

# 学内広報

for communication across the UT



濱田純一 第29代総長就任  
平成21年度役員等の紹介  
平成20年度卒業式・学位記授与式  
平成21年度入学式・大学院入学式  
平成20年度第2回「東京大学総長賞」



濱田 純一 第29代総長

4月1日、濱田純一第29代総長が就任されました。そこで今回の巻頭特集では、濱田総長の所信表明、略歴を紹介するとともに、3月31日に行われた総長インタビューの内容を掲載します。

## 所信表明

## 森を動かす。世界を担う知の拠点へ

## — 森を動かす

国立大学法人化後5年が経ち、佐々木元総長による法人化の制度整備、小宮山前総長による法人化のもつ可能性へのチャレンジがなされてきた基盤の上に、いま法人化による改革は、土壌づくりと「木を動かす」段階から、「森を動かす」段階に入ったものと考えています。法人化後の仕組みやその可能性を存分に活用し、東京大学の基底から湧きあがる力を最大化し持続可能なものとしていくという課題が、私の任期中のバックボーンです。この課題の確実な実現を目指して、行動シナリオを策定します。

## — 世界を担う知の拠点

東京大学は、国民に支えられる大学として、日本社会に対する直接的な貢献とともに、世界の人々の福利に寄与することを通じて、日本に対する信頼と敬意を高める役割を担います。東京大学は、世界の知の頂点を目指して研究水準を一層高めていくとともに、教育を通じて、卒業生が日本と世界の至る所で、東京大学の知を生かして活躍し、人類の未来を支えていくことができる、卓越した知の拠点たるべきであると考えています。

## — 「未来への確かな指針」を示す、知の公共性

時代はいま激しく変動し、将来が見通しにくい状況となっています。こうした時こそ、学術を基盤として「未来への確かな指針」を示し、誰もがより快適に安心して生活できる社会を作るのに寄与することが、東京大学が担うべき「知の公共性」であると考えます。

## — 総長のリーダーシップ。強い本部と強い部局、強い個人

総長のリーダーシップは、教職員学生がもっている力を最大限に引き出しながら大学全体を動かす力にあると考えます。教職員学生一人一人が優れた力を有している東京大学は、しなやかなリーダーシップを発揮するにふさわしい組織です。この考え方を踏まえて、強い個人、強い部局を基盤とした強い本部組織を運営します。

平成21年4月  
東京大学総長 濱田純一

## 一 「厚み」のある教育。「タフ」な東大生

教養教育、専門教育ともに、さらなる質の洗練を続け、総合研究大学としての相乗効果を最大限に発揮することによって、教育の内容に「厚み」をつけます。知力にくわえて、人間力と国際的な力を鍛え、たくましい交渉力と大胆な行動力を備えた東大生をさらに多く輩出していきます。

## 一 世界から日本へ、日本から世界へ

海外からの留学生や研究者の受入れを拡充すべく、体制を強化します。アジアをはじめ世界の人々に対して知の公開を行い、かつ、知の創造のための多様性を拡大します。日本人学生のさらなる国際化は決定的に重要です。日本人学生に、語学学習、国際経験、留学生との交流の機会などを、拡大します。

## 一 二兎を追う

学術においては、基盤的なディシプリンの教育研究の拡充と、先端的・融合的な教育研究へのチャレンジとに、ともに取組みます。業務運営においては、安定性のある正確さと、柔軟かつ挑戦的であることを、ともに目指します。長所と長所の組み合わせを大胆に試み、その相乗効果を生み出します。

## 一 スリムな組織、スマートな運営、スピーディな業務

組織改革、業務改革の一層の推進とコンプライアンスの徹底を図ります。スリムな組織による効率的な経営によって教職員の創造的活動のための時間を生み出すとともに、国立大学法人にふさわしい、スマート（賢く洗練された）でスピード感のある業務運営を目指します。

## 一 財源の多様化と資産の有効活用

多様な財源の確保とその機動的な運用によって、高度な水準の教育研究活動を確実に担保していきます。施設、敷地等の資産は、計画の最適化とともに、多様な開発手法を用いることによって、有効で迅速な活用を図ります。また、施設等の適正な管理をすすめます。

## 一 旗艦大学の自負と広範な連携

東京大学は、日本の知の水準を着実に高めていく重要な責務を負っています。そうした責務は、東京大学自らの誇りある教育研究活動によって、また、多くの大学や産業界、国、自治体等も含めた社会との幅広い連携によって、果たされるものと考えています。

### 略歴

昭和47年 3月 東京大学法学部卒業  
昭和49年 3月 大学院法学政治学研究科  
修士課程 修了  
昭和53年 3月 大学院法学政治学研究科  
博士課程 単位取得退学  
昭和55年 9月 法学博士（東京大学）  
昭和53年 4月 新聞研究所 助手  
昭和56年 10月 新聞研究所 助教授  
平成1年 4月 総長補佐  
（～平成2年3月）  
平成4年 4月 新聞研究所 教授  
平成4年 4月 社会情報研究所 教授  
平成7年 4月 社会情報研究所長、  
本学評議員  
（～平成11年3月）  
平成12年 4月 大学院情報学環 教授  
大学院情報学環長・学  
際情報学府長（～平成  
14年3月）  
平成17年 4月 国立大学法人  
東京大学  
理事（副学長）  
平成21年 4月 国立大学法人  
東京大学  
総長

専門分野：「情報法」「情報政策」

主な著作・研究論文：  
「制度概念における主観性と客観性」  
（現代憲法研究会編『現代国家と憲法  
の原理』所収）有斐閣（1983年）  
『メディアの法理』日本評論社（1990  
年）  
『情報法』有斐閣（1993年）  
「情報政策論への視点」（東京大学社会  
情報研究所編『社会情報と情報環境』所  
収）東京大学出版会（1994年）  
『情報学事典』（共編著）弘文堂（2002  
年）



## interview

——まず始めに、昨年11月に次期総長予定者に決まった瞬間のお気持ちを教えていただけますか？

濱田 「決まっちゃったなあ。よし、やるか」という感じが正直に近いところです。

——それから、忙しい日々が始まったわけですね。

濱田 今まで理事（副学長）の仕事だけでフルに動いていたのに加えて、新執行部の準備があったので、本当に忙しかったですね。それと、理事を選ぶにも電話一本やメールでというわけにはいかず、直接お話しをしてという形です。結構大変でした。

——理事を選ばれるにあたって、何か基準はございましたか？

濱田 基本的には能力本位。それから、文・理、学部・研究所といった全学的なバランスも考えました。

——ところで、他愛のないことで良いのですが、4月1日に総長に就任して、最初にやろうと思っていたら、4月1日、つまり明日には総長室に移られるんですね。

濱田 僕はこの部屋のままで（笑）。総長室は置いておいて、応接の時だけ向こうへ、日常の仕事はこちらで。それから、例えば、副学長などがきちんと来客を応接する必要がある時は総長室を使ってもらって…。ああいう執務机があって大きな会議のテーブルがあってというのは、どこでもそうなのかな？ 公務員の大臣室的な感覚じゃないかという気がするんですよ。でも、モノを取りに行くにも、スタッフと相談するにも、機能的じゃないですね。僕はとにかく機能的に動こうと思います。ただ、儀礼的・象徴的な実用性があるので、部屋は置いておこうと思っています。

——では、明日は総長室に移らずに、この部屋で仕事を続けられるわけですね。

濱田 口の悪い人は「書類が多すぎて移動できないだろう」と言いますがね（笑）。それもその通りで、片付けようがない（笑）。だから、4月1日の最初に何をやるかというよりは、淡々と仕事を続けるという感じです。

——また、いよいよ明日、総長に就任されますが、今の時点で特別な緊張感などはございますか？

濱田 特にないんだよね（笑）。このまま明日の仕事にずっと移るという感じが強くて（笑）。総務担当でいろいろなことをやってきたし、総長の仕事はもちろん大変重い仕事だとは思いますが、「さあ、次の仕事 came から、きちんとやるか」という感じです。部屋も変わらないし（笑）。

——総長としての仕事はこれまでの仕事の続きだという感覚でしょうか？

濱田 続きですね。僕の意識の中では、大きな「段差」はないです。

——そのあたりは、これまでの4年間の流れに慣れてきた教職員には安心感を与えるかもしれないですね。今度の総長でどう変わるんだろうと思っている方々も多いと思うので。

濱田 うん、そうですね。やはり、僕は本部棟にずっといたから、総長のやり方もなんとなく見えるし、その意味で「繋ぎ」という点では、ここにいたことはありがたかったですね。

——それでは、現時点での、東京大学運営に関するビジョンを教えてくださいいただけますか？

濱田 詳細なビジョンはこれから考えていこうと思っているんですが、まずは、新年度のはじめに教育研究評議会や経営協議会に示すことになる、総長としての所信表明がベースになります。また、一年目にやっておかなきゃいけないと思っているのは、「アクション・プラン」の着地です。あそこで出されていた考え方を、きちんと足固めが出来るように。その中で、もう少し長期的に手を入れたほうが良いことや、新しい課題、あるいは「もうこれはあまりやらなくてもよい」ということなども見えてくると思います。全体の方向は動き出しているので、きちんと着地させれば、これからの東大の大きな力になると思います。

——ちなみに、濱田総長版のアクション・プランもお作りになりますか？

濱田 作ろうと思っています。現在のもよりも、もう少しシンプルなものでも良いかもしれません。僕はもともとは、あまり計画的に

動く性格ではないので、目標を決めて何かをやるってことには、最初は違和感があったんですよ。むしろ、僕は目の前にあるものを手当たり次第にやっていくタイプなんです（笑）。ただ、プランがあることで、「何をやらなきゃいけないか」という目標が常に見えますよね。それはとても良いな、と思いました。ですから、「東大として何が課題で、何を重点的にやらなければいけないのか、どのようにやっていくのか」ということが見えるようなシナリオは作りたと思っています。

——そうすると、新しい行動シナリオが出来るのは、結構後になるのでしょうか？

濱田 まずは、所信表明を軸に動きます。その後、第一期の中期計画が終わる時点で、小宮山アクション・プランの整理も一応完了させて、新しい中期計画のスタートと一緒に、次の行動シナリオを発表しようと思っています。6年の長丁場ですから、そのスケジュール感で良いと思います。…やっぱり、工学系の先生方の発想は新しいことにチャレンジなんですかね。僕が法律系という

こともあると思うんだけど、「とにかく地道に積み重ねて」という感覚が強いですね。

——この1年で足固めをする中で、4月以降、「これは特に力を入れてやらなければ」というものはございますか？

濱田 基本的に、「研究」は、先生方に任せておけば、どんどんいろいろな発想で提案もされ、活動なさっていくと思います。その際、必要なことを総長サイドでサポートするというので良いと思っています。ただ、ひとつ、気になっているのは、このところ、新しい分野、新しい課題にずいぶん挑戦してきましたが、その基盤になる部分、伝統的なディシプリンをどうするのかということ、それも大事な課題だと考えています。外に対しても、「伝統的なディシプリンは大事なんだよ」と、総長として、繰り返し言う必要があるでしょうね。

——教育面では、「タフな東大生」を育てたいとおっしゃっていましたが…？



▼

濱田 「タフな東大生」と言いましたが、一種のコミュニケーション力とか交渉力とか、「知的な力を、社会的な、現実のものにしていく力」、そういうものをどのように鍛えるかということが課題だと思います。端的に言えば、とにかく、「学生時代に一度留学してきたら」というのが一番良いのですが、まだ、それを具体的に担保できる財政的な仕組みができていないことやセキュリティなどの問題もある。とにかく、学生にたくましさをつける方法をいろいろ考えていきたいと思います。

——海外も含め、学生が外と関わりをもつ仕組みをどのように作るかということですよ。

濱田 そうですね…。みんな優秀なので、そんなに言わなくたって、最近みんな勉強するし。自分が持っている知識や知恵を「実際に使える力」さえ付けば、相当強力になると思います。東大の学生は知的なベースがあるから、やはり強いですよ。賢さをどう使いこなすか、その仕組みを考えてみたいですよ。

——教育・研究以外では何かございますか？ 例えば大学評価で

は、社会連携などで結構高い評価をもらっていますが…？

濱田 あと国際化もね。そういうものはこれまで通り、着実に続けていくということでしょうね…。それから、どういう言い方をすれば良いか分からないんですが、先生方は相変わらず非常に忙しいので、「もうちょっと仕事をスリムにできないか」、ということも考えてみたい。これは、職員の場合も同様です。辰野理事とも話しています。ただ、教員の仕事のスリム化は、教員の自治と関わることもあるので、若干微妙なこともあります。例えば、「懲戒などはもう弁護士に任せたら」といった意見があります。教員がものすごい時間をかけて調査するのはいかがなものかという…。でも、そのやり方が、ある意味では自治の基本でもあるし。だから、難しいんだけど、丁寧に先生方と一緒に考えたいと思います。思い切って仕事をスリムにするには、何かの仕事をやめるしかないと思うんですよ。その仕事をやるという前提で改善するのはもう随分やってきている。だから、「この仕事はやらない」と決めていかないと。職員も人数が減ってきているから大変だと思う。



——ところで、職員に対して「もっとこうなってほしい」ということなどあれば、うかがいたいのですが。

濱田 「言いたいことを言う」ということが大事ですね。もちろん、きちんと考えて言うのが前提ですが…。言いたいことを上司にぶつけると良いと僕は思います。上司も試されている時期だと思うんですよ。昔はあらゆる組織が「権威のピラミッド構造」になっていましたね。教員もそうで、「教授が言うことは正しい、偉い」ということだったんですが、今の時代は、「自分の発言に対して反論があった時に、どう説得できるか」ということが問われている時代だと

▼

思います。だから、若い職員はのびのびと意見を言って、「上司にそういう力があるのか」ということを試す、あるいは「上司を鍛える」ということをやると良いと思います。いまの上司の皆さんも、それに応える力をもっているはずで、これからの時代はそういう力がないとダメですよ。さっきの「学生をタフに」というのも同じことで…。自分の論理の世界を完結的に作って、「さあ、これで整合的だ」と言って、後は権威で押し付けるということは、もう通じない時代です。それに対する批判があった時にちゃんと対応できる力がないと。

——コミュニケーション力ですね。

濱田 そうですね。ただ、今の私たちは僕らの時代に比べると、随分コミュニケーション力や社会性が身についていると思うんですよ。だから、全体の底上げをするということですね。

——最後に、どんな総長を目指されるか、お聞かせください。

濱田 教職員・学生、みんなの力を最大限に引き出せる総長を目指したいと思います。総長個人の持っている能力は知れているので、それぞれの教員・職員・学生、みんなすばらしい力を持っているわけだから、それを引き出すことが、総長として一番必要なことだと思います。

——総長候補者になられた時の所感に「編集者のような総長」という言葉を書いているらしいんですが、現在も同じ考えでいらっしゃいますか？

濱田 全く同じ気持ちです。編集者というのは「全体をまとめるポリシー」を持っていますよね。それが大事だと思います。ただ原稿などの素材を集めるだけの編集者ではなくて、「ひとつのポリシーのもとに、みんなの力を引き出す」ということが大事だし、大学

にふさわしい仕事だと思います。その点では、とっても楽しい仕事です。

——6年経って、振り返ってみると、それがひとつの「濱田総長色」になるわけですね。

濱田 そうですね。やはり、総長としては、皆の、特に学問的な力、あるいは知的な能力をどう引き出せるのかというリーダーシップが、一番大切だと思います。

——そのお言葉に、教職員のモチベーションも上がるのではないのでしょうか？

濱田 そこが普通の会社の社長と違うところだと思います（笑）。上から引っ張っていただくだけではないということですね。

——ありがとうございました。

【2009年3月31日 本部棟濱田理事室にて】



平成21年度役員等を以下のとおり、紹介します。

総長

**濱田 純一**

(任期) 平成21年4月1日～平成27年3月31日

理事(副学長)

**佐藤 慎一**

(担当) 教育 入試 評価

(任期) 平成21年4月1日～平成22年3月31日

理事(副学長)

**松本 洋一郎**

(担当) 研究 産学連携 情報システム 環境安全

(任期) 平成21年4月1日～平成22年3月31日

理事(副学長)

**前田 正史**

(担当) 財務 施設 調達

(任期) 平成21年4月1日～平成22年3月31日

理事(副学長)

**小島 憲道**

(担当) 学生 広報 渉外・社会連携

(任期) 平成21年4月1日～平成22年3月31日

理事(副学長)

**田中 明彦**

(担当) 総務 国際

(任期) 平成21年4月1日～平成22年3月31日

理事

**辰野 裕一**

(担当) 人事労務 事務組織

(任期) 平成21年4月1日～平成22年3月31日

理事

**江川 雅子**

(担当) 経営企画 監査

(任期) 平成21年4月1日～平成22年3月31日

副学長

**磯部 雅彦**

(担当) 柏キャンパス、TSCP

(任期) 平成21年4月1日～平成22年3月31日

監事

**石黒 光**

(任期) 平成20年4月1日～平成22年3月31日

監事

**漆館 日出明**

(任期) 平成20年4月1日～平成22年3月31日



副理事

**杉山 健一**

(担当) 渉外

(任期) 平成21年4月1日～平成22年3月31日

副理事

**三浦 充**

(担当) 調達

(任期) 平成21年4月1日～平成22年3月31日

副理事

**尾越 和博**

(担当) 情報、業務改善

(任期) 平成21年4月1日～平成22年3月31日

副理事

**櫛山 博**

(担当) 病院

(任期) 平成21年4月1日～平成22年3月31日

総長特任補佐

**光田 好孝**

総長特任補佐

**門脇 孝**

総長特任補佐

**難波 成任**

総長顧問

**小宮山 宏**

総長室顧問

**浅島 誠**

総長室顧問

**山田 興一**

## 役員略歴および就任の挨拶

新総長執行部役員略歴、および、就任に当たっての挨拶を以下のとおり、掲載します。



理事（副学長）  
佐藤 慎一

昭和44年6月 東京大学法学部 卒業  
平成5年4月 文学部 教授  
平成13年4月 大学院人文社会系研究科長・  
文学部長【～平成15年3月】  
平成18年4月 理事（副学長）【～平成19年3月】  
平成19年4月 大学院人文社会系研究科 教授  
平成21年4月 理事（副学長）

専門分野：近代中国思想史

研究内容（著書）：『近代中国の知識人と文明』  
（東京大学出版会）

### 生協食堂で会いましょう

本年3月31日を以て東京大学大学院人文社会系研究科教授の職を定年退職し、4月1日より東京大学理事（副学長）となりました。東京大学理事（副学長）となるのは2006年度に引き続き2回目ですが、「法人化以後の1年は、法人化以前の10年に匹敵する」と言われるほど変化の激しい東京大学ですから、2年の空白を挟む前回の経験は殆ど役に立たないと覚悟し、当面は東京大学の現状を把握するのに全力をあげるつもりです。

今回の私の担当は、「教育」「入試」「評価」「バリアフリー」「図書館」などです。いずれも重要な職務ですが、「教育」がとりわけ重要であることは言うまでもありません。「教育」は、「研究」と並んで、大学が存在する意義そのものにかかわる事項だからです。おそらく、最も多くの時間とエネルギーを「教育」に捧げることになるでしょう。

法人化以後の国立大学は、厳しい評価制度に晒されています。国民の税金に由来する膨大な運営費交付金を与えられている国立大学法人にとって、評価は避けられないことですが、何か目新しいことをやらないと高い評価を受けられないというのは、こと「教育」についてはきわめて問題があります。「教育」は、高い水準で継続することが最も重要な事業であり、かつ成果が現われるのに長い時間がかかる事業であって、数年を単位とする評価には本質的に馴染まないことだからです。

他方で、東京大学の「教育」を高い水準で継続するためには、問題点を洗い出し、不断に手直しすることが必要です。時間の経過とともに学問の内容も学生の関心も変化しますから、変化に見合った手直しを継続しない限り、東京大学の「教育」を高い水準で継続することはできません。それが教員と学生の内在的な要求に基づくものである限り、「教育」の改革は積極的に進めなくてはならないと考えています。

仕事に追われない限り、昼食はこれまで通り法文2号館地下の生協食堂で食べるつもりです。顔を見かけたら、遠慮なく声をかけてください。そして、皆さんの部局が「教育」について如何なる問題を抱えているか、教えてください。



理事（副学長）  
松本 洋一郎

昭和52年3月 東京大学大学院工学系研究科  
博士課程修了  
平成4年8月 工学部 教授  
平成18年4月 大学院工学系研究科長・工学部長  
【～平成20年3月】  
平成20年4月 総長特任補佐（副学長）  
【～平成21年3月】  
平成21年4月 理事（副学長）

専門分野：流体工学、計算力学

研究内容：分子動力学、マイクロ熱流体力学、  
混相流、流体工学の医療応用、知識の構造化

### 就任にあたって

理事（副学長）として、主に「研究」、「産学連携」、「環境安全」を担当することになりました。「研究」は教育とともに大学の根幹をなす最も重要なもののひとつです。大学というのは自律した個人の集団です。研究者は、主体的、自律的判断に基づいて、確信を持って行動しています。この自律性が学術の発展には不可欠であることを、人類は歴史の教訓から深く学んでいます。大学が、新たな知を創造し、様々な課題の解決を図る機関として、社会からの期待に応えるには、各部署の自律性と連携の強化を基軸とし、全ての構成員が主体的に分野を越えて共同作業に取り組むための持続的発展基盤を整える必要があります。「研究」は研究者だけで出来るものではありません。組織としてどのように自律的な研究を支援し、連携を促し、成果を最大化していくかが問われることになるでしょう。また、理系、文系を問わず、そうして生まれた研究成果を社会に生かすには「産学連携」は必須です。産学連携本部、東京大学TLOの方々とも力を合わせて、取り組んで行きたいと思っております。さらに社会から信頼を得て大学としての活動を行って行くには「環境安全」への真摯な取り組みが必要です。環境安全本部、環境安全研究センターの方々も協力して、大学構成員の自覚を促し、実効あるものとするべく取り組んで行きたいと存じます。現在、社会から学術への無条件の寛容性は無くなっており、社会の大学への目には厳しいものがあると思われまます。このような状況は、大学が社会に対して説明責任を果たすことを困難にしています。しかし、それが現状なのでから、私たち自身が、解決に責任を持つべきであることはいうまでもありません。そのためにも私自身が現場感覚を失わないようにしながら、出来るだけ多くの構成員の方々と意見交換を行い、大学が抱える課題の解決に力を尽くしたいと思っています。どうぞ宜しくお願いします。



理事（副学長）  
前田 正史

昭和56年 3月 東京大学大学院工学系研究科  
金属工学専攻 博士課程修了  
平成 8年11月 生産技術研究所 教授  
平成17年 4月 生産技術研究所長【～平成21年3月】  
平成20年 4月 総長特任補佐（副学長）【～平成21年3月】  
平成21年 4月 理事（副学長）

専門分野：持続性循環資源工学

研究内容（論文）：W. H. Han, M. Miyake, T. Nagai, and M.

Maeda: “Measurements of Vapor Pressure of Y and Activity of Y in Y-O Alloy by Multi Knudsen Cell Mass Spectrometry”, Journal of Alloys and Compounds, (Accepted).

Y. Kayanuma, T. H. Okabe, and M. Maeda: “Metal Vapor Treatment for Enhancing the Dissolution of Platinum Group Metals from Automotive Catalyst Scrap”, Metallurgical and Materials Transactions B, 35, 10, 817-824 (2004).

K. Mita, S. Yamaguchi, and M. Maeda: “Vapor Pressure Measurement of Zn-Fe Intermetallic Compounds”, Metallurg

## 東京大学のこれから

東京大学は、国内で抜きん出た教育力・研究力を持つ大学です。その質の高さ、奥深さ、広さは優秀な国内学部学生を惹きつけています。しかし、世界には東京大学を上回る人材供給力と研究力を持つ大学が複数あります。我が国が人材とその知的集積によってのみ存続可能であることを考えれば、より一層の努力を重ねる必要があることは自明です。高等教育の成果は国家の生き残りや発展に直接関わり、大学は世界規模の人材獲得（供給）競争の現場となるはずですが、“我が国”における東京大学として責任は重いのですが、法人化以後、概算要求により国の施策を先取りする形での教育、研究分野への資金的支援の仕組みはなく、学内の工夫をしていくしかありません。運営費交付金の経常的削減と、政府による長期的な財政支援の約束がなされない中で、過度に競争的資金に偏る研究体制は、国家として大きな失策を招きかねないのですが、これは現実です。東京大学は適当な比率で間接経費を確保し、競争的資金にそぐわない分野や、未来の可能性のために財政支援を行い、学術の健全性を保つ努力をしてきましたが、今後ともこの姿勢を崩すべきではないでしょう。

もちろん競争的資金獲得を目指すための支援体制を十二分に用意することは当然で、管理的な作業に教員が時間を“盗まれて”いることは大きな損失です。特に、大学内の活動以外に日本の高等教育界のリーダーとして活動する総長、アカデミアのリーダーである教職員の繁忙度は他大学と比べて高く、負荷は大きいように思います。理事会と部局長を中心とする運営体制をなお一層機能させ、個人の負担低減のため、間接的部門の一層の合理化を必要とすることは間違いありません。

教育と学術の計画を立て、予算計画を示し、施設計画を実行することではじめて大学は成立します。計画の立案と実施を高速化し質を高めるためには、外部資源の活用を含め、管理職員人事における民間、旧国立大学、公立試験研究機関、行政組織との交流を柔軟に考える必要もあります。そのことで人材の育成が強化され、大学としての競争力が一層高まると考えています。

濱田新総長の下で、財務、施設、調達、病院財務を主に担当します。いずれも困難が待ち受けているかと思いますが、微力ながら力を尽くしたいと思っています。どうかよろしくお願いします。



理事（副学長）  
小島 憲道

昭和52年 3月 京都大学大学院理学研究科 博士課程所定単位取得  
昭和53年 3月 理学博士（京都大学）  
平成 4年 2月 京都大学理学部 助教授  
平成 6年 5月 東京大学教養学部 教授  
平成19年 2月 大学院総合文化研究科長・教養学部長【～平成21年2月】  
平成21年 4月 理事（副学長）

専門分野：物性化学、錯体化学

研究内容（代表的な著書）：

“Magneto Optics” (Springer, 2000)、『新しい磁気と光の科学』（講談社サイエントフィク, 2001）、『現代物性化学の基礎』（講談社サイエントフィク, 2003）、『金属錯体の現代物性化学』（三共出版, 2008）など

## 就任の挨拶

この度、理事（副学長）として「学生」、「広報」、「渉外」、「社会連携」、「卒業生室」、「ハラスメント」を担当することになりました。学部学生が2年間を過ごす教養学部は状況を把握している教養学部長経験者が執行部には必要であるという要請から、理事（副学長）をお引き受けいたしました。グローバル化が進む今日、世界で真の知的なリーダーとして、深い専門性と豊かな教養を持ち、総合的判断力、社会的責任感、地球的な視野という三つの資質を持った人材を育てることが東京大学の使命であり、資源のない日本に対する最大の貢献と思っています。この使命のために、担当する任務を通して微力ながら最善を尽くしたいと思っております。理事を務めるにあたり、座右銘にしたい新渡戸稲造著『一日一言』の一文が心に浮かんできます。

「5月24日：伊達政宗は永禄13年（西暦1636年）の今日、70歳で没した。その座右銘にいわく。

○仁に過れば弱くなる。○義に過れば固くなる。  
○礼に過れば諂となる。○智に過れば嘘をつく。  
○信に過れば損をする。」



**理事（副学長）**  
**田中 明彦**

昭和52年3月 東京大学教養学部教養学科国際関係論分科卒業  
 昭和56年9月 マサチューセッツ工科大学政治学部大学院卒業（Ph.D. 取得）  
 平成10年4月 本学東洋文化研究所 教授  
 平成12年4月 大学院情報学環 教授  
 平成14年4月 東洋文化研究所長【～平成18年3月】  
 平成20年7月 国際連携本部長  
 平成21年4月 理事（副学長）

専門分野：国際政治学、東アジアの国際政治  
 研究内容（主要著書）：『新しい「中世」』（日本経済新聞社、1996年、サントリー学芸賞受賞）、『ワード・ポリティクス』（筑摩書房、2000年、読売・吉野作造賞受賞）、『アジアのなかの日本』（NTT出版、2007年）、『ポスト・クライシスの世界』（日本経済新聞出版社、2009年）

## 就任にあたって

大学運営に責任あるポストにつかせていただくということは、名誉でもありますが、国際政治を研究する一研究者としてはつらい面もあります。

現代の世界は、百年に一度かどうかはともかく、大変な激動の中にあります。金融面の危機は、さらに拡大し实体经济あるいは政治や社会面での危機までもたらす可能性すらあります。短期の危機対応に加えて、地球的課題もまた深刻です。平和構築、公衆衛生、経済発展を実現しつつ、温暖化を防止させていかなければなりません。このような時代こそ国際政治学が活躍する時代だと思っております。もちろん、日本にも世界にも、有能な国際政治学者は大勢いるので、田中がたいした研究ができなくなっても、学問としては困らないと思います。ただ、個人としてみると、ちょっと取り残されるような気がしてさみしい感じがします。落ち込んでばかりいてもしかたないかと気を取り直して考えてみると、今回機会を与えられて東京大学の運営に関与させていただくということは、国際政治学者としても役にたつこともあるかと思うようになりつつあります。これは国際政治学者としての私の主張ですが、現代世界において、知識こそがパワーの基盤となりつつあります。もしこの主張が正しいとすれば、知識を扱うことをその最大の機能としている大学は、現代世界においてますます重要な役割を果たしつつあるはずで

す。いうまでもなく、大学が国際政治の前面に出ることはあまりありませんし、それ自体は望ましいことでもないと思います。しかし、知識の背景なしに現在の国際政治は動きません。その中で世界の有力大学の一つである東京大学もまた、重要な役割を果たしているに違いないと思っております。今回、大学運営のなかで、「総務」と「国際」の担当をさせていただくことになりました。与えられた任務をできる限り果たすことはもちろんですが、それにくわえて、いささか「参与観察」をさせていただき、研究者としての「やる気」も満たさせていただければ幸いですと思っております。



**理事**  
**辰野 裕一**

昭和53年3月 東京大学法学部 卒業  
 昭和53年4月 文部省入省 初等中等教育局  
 平成10年7月 広島県教育委員会教育長  
 平成13年7月 文部科学省初等中等教育局 初等中等教育企画課長  
 平成16年7月 文化庁文化財部長  
 平成17年4月 文化庁長官官房審議官  
 平成18年7月 文部科学省大臣官房審議官（高等教育局担当）  
 平成19年7月 本学理事

## 再任に当たって－「最良の作戦」を－

前執行部に引き続き理事をつとめさせていただくことになりました。担当は、以前と同様、人事・労務、組織、業務改善、男女共同参画ですので、よろしくお願ひします。

小宮山前総長が、法人化のメリットを最大限に生かし、「アクション・プラン」のもとに次々と果敢な改革を進めるのに関わることができたのは、私にとっても貴重な体験でした。私の担当について見れば、職員評価制度の実施、特任職員制度の改善、学内7保育園体制の実現などは、この「突破力」によって達成できたものと思っています。

法人化後の国立大学改革の先頭に立ち、旺盛な掘削力と推進力をもって、改めるべきものは改め、できるものは具体化し、さらに道なきところに道を切り開いてきた東京大学の取り組みは、わが国のリーディング・ユニバーシティとしての責務を果たしたものと自覚しています。

新執行部としては、その成果を受け継ぎつつ、これらをより確かなものとし、持続可能なシステムに創り上げていくことが課題であると考えます。これらを定常化・日常化し、いわば巡航飛行にしていく、そのための高度と速度をいかに設定していくかをしっかりと見極め具現化していくことです。

海軍の名参謀といわれた秋山真之は、「最良の作戦は無味無臭である。そこにはいかなる英雄も武勇談も必要としない。」という言葉を残しています。アカデミアのスタッフである事務職員は、教員、学生がその本来のつとめに専念できるよう、最良の作戦を立て最善のサポートをしていかななくてはなりません。これにより、東京大学が「世界を担う知の拠点」としてさらなる発展と達成を遂げるよう微力を尽くしていきたいと思っております。



理事  
江川 雅子

昭和55年3月 東京大学教養学部教養学科国際関係論分科 卒業  
 昭和55年4月 シティバンク東京支店  
 (企画部および金融法人部)に勤務  
 昭和61年6月 ハーバード・ビジネス・スクール(ハーバード  
 大学経営学大学院)にて経営学修士(MBA)取得  
 昭和61年9月 ソロモン・ブラザーズ(ニューヨーク本社)入社  
 昭和63年6月 ソロモン・ブラザーズ東京支店  
 平成5年12月 S.G. ウォーバーク東京支店  
 平成13年11月 ハーバード・ビジネス・スクール  
 日本リサーチ・センター長【～平成21年3月】  
 平成18年3月 商学博士(一橋大学)  
 平成18年4月 本学経営協議会委員、総長選考会議委員  
 平成21年4月 理事

専門分野：経営学、企業金融

研究内容(代表的な著書や論文等)：

『株主を重視しない経営』(日本経済新聞社)

注：買収・合併などのために、現在、ソロモン・ブラザーズは、日興シティグループ、S.G.ウォーバークは、UBSとなっています。

## 東大に新しい風を

「母校を改革するために力を貸して欲しい」

濱田先生からの依頼を受けて、このたび経営企画担当の理事に就任致しました。ハーバード・ビジネス・スクール(ハーバード大学経営学大学院)日本リサーチ・センター長の仕事を辞めるべきかについては大変悩みました。2001年末に始めたこの仕事は、ハーバードの教員とともに日本企業の様々な経営課題を研究するのが主な目的で、知的刺激に富むとともに自由度が高く、勤務条件も恵まれたものでした。年に数回の海外出張やボストンの教職員とのやり取りも楽しく、ハーバードからも長く続けてほしいと言われていました。でも、現代の日本が抱える様々な課題の根本に教育問題があることを考えると、東大の改革の重要性は看過できません。東大の後輩のために役に立てるなら、日本の社会を少しでも良くすることに貢献できるなら、という思いで決心しました。

私は1980年に駒場の教養学科(国際関係論)を卒業して以来およそ20年間、外資系投資銀行で国際金融(主に企業の資金調達やM&A)の仕事に携わりました。欧米の優秀なビジネスマン・プロフェッショナルと切磋琢磨する中で、グローバルに活躍する人材に必要な資質は何かについて深く考えさせられました。「世界を変えるリーダーを育成する」を使命とするハーバード・ビジネス・スクールの仕事では、研究と教育プログラムの向上に情熱を傾ける教員と共同作業をすると同時に、ハーバード大学の一員として大学の組織や問題点について学びました。その間に、ハーバード大学の修士課程(MBA)、一橋大学の博士課程で学んだので、それぞれの大学の強みや校風の違いについても考えさせられました。コーポレート・ガバナンス(企業統治)に関する博士論文を日経から出版し、組織のガバナンスについて深く考えたり議論したりする機会にも恵まれました。

このように他の理事の方とは異なる経験・視点を活かして、東大に新しい風を吹き込んでいきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。



副学長  
磯部 雅彦

昭和52年3月 東京大学大学院工学系研究科 修士課程修了  
 昭和56年4月 横浜国立大学工学部 講師  
 平成4年1月 本学工学部 教授  
 平成11年4月 大学院新領域創成科学研究科 教授  
 平成17年4月 大学院新領域創成科学研究科長  
 【～平成19年3月】  
 平成19年4月 総長特任補佐【～平成20年3月】  
 平成20年4月 総長特任補佐(副学長)【～平成21年3月】  
 平成21年4月 副学長

専門分野：海岸工学、沿岸域環境

研究内容：海岸水理、閉鎖性海域環境、海岸防災

## 柏キャンパスとTSCP

新年度から柏キャンパスとTSCP担当の副学長を務めることになりました。

柏キャンパスでは1995年の第1期用地取得に始まり、現在では1研究科、2研究所、3研究センターに数物連携宇宙研究機構を加えた7教育研究組織が集まり、また海洋研究所と生産技術研究所千葉実験所が移転することになっています。今まさに研究棟の建設が進み、第3期用地や柏の葉駅前キャンパスを含めた整備を進めながら、本郷、駒場と並ぶ第3極のキャンパスとしての柏の教育研究活動を軌道に乗せることが第一の任務です。第二の任務は、東大サステイナブル・キャンパス・プロジェクト(TSCP)室長として、東京大学の省エネルギー、省資源化を進め、持続可能なキャンパスづくりを進めることです。東京大学では2006年度に約13万tの二酸化炭素を排出し、その後も教育研究活動の活発化などによって排出量が増えつつありますが、昨年度にはTSCP2012というプランを発表し、2012年度までに15%の排出削減をするという目標を定めて、大々的な活動を開始しました。今年度からその効果が現れるはずですが、この目標を達成するにはさらに無駄を省き、エネルギー効率を上げなければなりません。これは容易なことではありませんが、それが地球や私たちの社会の持続性につながるものであり、同時に光熱水費の削減を通じて大学の財務の改善にもなるのです。是非とも皆様のご理解とご協力をお願いします。

私は新領域創成科学研究科長を務めたこともあり、職員の方々とは違った意味の専門性を持って働くのを見るときとても勉強になり、また心地よく感じます。今後もそのような共同作業を楽しみながら、東京大学のためにできる限りのことをやっていきたいと思っておりますので、よろしくお願致します。



副理事  
杉山 健一

昭和46年 東京大学大学院工学系研究科修士課程 修了  
 昭和46年4月 東亜燃料工業株式会社  
 (現・東燃ゼネラル石油株式会社) 入社  
 平成8年3月 同社取締役  
 平成12年7月 同社常務取締役 川崎工場長  
 平成14年3月 同社代表取締役 常務取締役 川崎工場長  
 平成18年4月 同社 退社  
 平成19年7月 本学副理事

### 渉外本部・卒業生室の活動へのご支援を

渉外本部および卒業生室を担当します副理事の杉山です。昨年3月にクローズした東大130キャンペーンでは多くの法人企業・個人の皆さまから過分なご厚志を賜り、目標を上回る138億円のご寄附を頂戴致しました。基金としての残高も55億円となり、信託基金第一期の120億円を合わせて、東大基金の大いなる第一歩を踏み出すことができました。

2008年度は、周年寄附を終了し、恒常的な基金活動の実質的なスタートとなり、新たな目標「“TODAI2000”-2020年には2000億円の基金へ」を掲げ、活動してきました。その結果、大型プロジェクトのお申し込みにより、総額として54億円のご寄附を頂戴することができましたが、未曾有の金融危機の影響は大きく、東大基金の積み上げ額は3億円弱にとどまりました。

そして、2009年度、中期目標として「2014年度末に1000億円」を掲げ、その初年度の活動を開始しました。本年度の重点施策として、①小口・継続寄附の基礎作り ②有価証券等による寄附受入強化 ③既存寄附者フォローアッププログラムの充実 ④信託基金第二期の設定 ⑤全学的協力体制に基づくプロジェクト開発 ⑥システムインフラ整備 等を確実に実行して行きます。

卒業生室の活動につきましては、①卒業生データベース(名簿)の管理・拡充【新規補足、現在の10万人を12万人へ】 ②第8回ホームカミングディの開催【2009年11月14日(土)、周年幹事の動員・活用】 ③赤門学友会報「懐徳」の年3回発行 ④東大イェール大卒業生国際交流会【2009年6月29日・30日ワークショップ開催@本郷キャンパス・山上会館、7月1日フェアウェルパーティ@学士会館】 ⑤各種同窓会への支援・連携【役員参加、講演会派遣】等、卒業生のネットワークを拡大し、充実させるためのプログラムを着実に実行して行きます。

教職員の皆さまの、渉外本部および卒業生室の活動に対するご支援・ご協力をお願い致します。



副理事  
三浦 充

昭和47年3月 東京電機大学工学部卒業  
 平成16年4月 東京大学生産技術研究所事務部長  
 平成19年1月 調達・経理担当部長  
 平成19年4月 本部統括長(調達・経理系)  
 平成20年1月 副理事  
 平成20年4月 本部統括長(調達・経理系)兼任

### お金は大切に使いたい

副理事、調達経理系の統括長としてもう1年間勤めることとなりました。「経理」「調達」「決算・財務分析」の実務を担当いたします。引き続きよろしくお願いいたします。

調達の効率化などを含む資金の有効活用への取り組みは、運営費交付金が毎年減額されていくという外的要因の中で、教育・研究環境を如何に維持、発展させていくかにあります。法人化前も経費の縮減には努めておりましたが、法人化の利点を活かして、自己努力が可能な調達改善や余裕資金の積極的な運用などにより、できる限り資金の有効活用に努力しようということでした。

これまでもみなさんのご協力で一定の成果は上がっておりますが、まだまだ十分とは言えません。どうも外的要因から受ける痛みのようなものは、段々慣れてしまっていて、その痛さ、厳しさを感じなくなっているのではと少々心配になってきています。調達改善などへの緻密な取り組みには、「お金はみんな大切に使おう」という、内部からわきあがる気持ちを構成員全員が持っていないと成果はあがらないように思われます。

運営費交付金も学生から頂いている授業料も大変貴重なお金なのです。大切なお金はもっともっと有効に使おうという思いを強くして、これからも仕事をしていきたいと思っております。

昭和41年に奉職してほぼ40年間東大一筋で、楽しく、やりがいのある仕事をさせていただいてきました。そのご恩を返すべく濱田総長の下でこれからも頑張っていきたいと思います。どうぞ引き続きご支援、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



**副理事**  
**尾越 和博**

昭和47年3月 千葉工業大学電子工学科 卒業  
 昭和51年10月 東京大学 採用  
 平成8年4月 福島工業高等専門学校会計課長  
 平成11年4月 本学医科学研究所経理課長  
 平成13年4月 高エネルギー研究機構経理課長  
 平成15年4月 岡崎研究機構主計課長  
 平成16年4月 岡崎統合事務センター 財務課長  
 平成17年4月 本学柏地区事務部長  
 平成19年3月 工学系・情報理工学系等事務部長  
 平成21年4月 副理事（兼）本部統括長（情報系）

### 副理事就任にあたって

副理事として業務改善を担当することになりました。東京大学では、教職員の皆様から毎年数多くの「業務改善提案」をいただき、その成果が少しずつ始まっています。この改善へのベクトルを更に強くし、ワーク・ライフ・バランスのとれた職場環境を創るべく、教職員の皆様の協力を得ながら微力を尽くしたいと存じます。

東京大学に昭和51年10月に就職し、33年経とうとしています。その間7年ほど東京大学を離れ、法人化後の平成17年に東京大学に採用していただきました。久々に戻った職場は、ドサ回りする前とは職場雰囲気はかなり変わり戸惑った感がありました。しかしながら、さすが「東大だな」と思ったのは、教職員が一体となり難局を乗り越えようと努力する姿でした。東大の「力」だと思いました。私に与えられた業務がもう一つあります。情報系を統括する業務です。この業務についても、職員の皆様の意見を聴き、よりよい方向に向かうように努力したいと思っております。

いずれにしても、新たな気持ちで東京大学の管理運営に貢献できることは、私にとって大変うれしいことでもあります。是非、教職員の皆様方のご協力を得ながら、つたない私の経験を交えながら、実際の業務に活かせるモノを提案していきたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。



**副理事**  
**櫛山 博**

昭和48年3月 神戸高等学校 卒業  
 昭和48年4月 舞鶴工業高等専門学校 採用  
 昭和51年4月 文部省転任（総務課、医学教育課、専門教育課等）  
 平成元年4月 信州大学経理課長  
 平成2年4月 香川医科大学会計課長  
 平成5年4月 京都大学医学部附属病院管理課長  
 平成7年4月 東京大学医学部附属病院管理課長  
 平成9年4月 文部省医学教育課 課長補佐  
 平成11年4月 東京医科歯科大学歯学部事務部長  
 平成13年10月 東京医科歯科大学医学部事務部長  
 平成15年4月 本学医学部附属病院事務部長  
 平成21年4月 副理事（兼）医学部附属病院事務部長

### 副理事就任にあたって

このたび、4月1日付けで副理事となりました櫛山博です。東大病院事務部長を兼務することとなっております。これまでいくつかの大学病院を経験し、平成7・8年度に管理課長、平成15年度からは東大病院事務部長として病院長の下病院運営に携わり、現在に至っております。

これからは副理事としても、大学全体を見ながら病院運営に携わっていきたくと思っております。特に、本部と病院間の円滑な意思疎通に重点を置き、今年度は第2期中期計画期間の運営に大きな影響を及ぼす運営費交付金算定ルールなどに積極的に取り組んで行くこととしています。

現在の医学部附属病院の診療収入は約345億円、教育・研究費や病院建設のための借入金償還額67億円を含めた執行額は470億円となっており、病院運営の結果が大学全体の運営に大きな影響を与えることとなります。現在、病院運営費交付金が毎年度5億円ずつ削減されているため毎年度10億円以上の増収を図ってきていますが、平成15年度から約90億円の増収となり、そろそろ限度に近づいています。経営面だけではなく、世界のトップを目指して大学病院の使命である高度医療の開発・提供、教育・研究などの推進も必要です。

これらの様々な課題に向けて積極的に取り組んでいきたいと思っておりますので、皆様方のご理解とご協力を是非ともお願いいたします。

## 役員退任の挨拶

このたび退任された理事(副学長)の、  
退任に当たっての挨拶を以下のとおり、掲載します。

### 退任にあたって

思いがけず東大執行部の一員となって3年が経過し退任の時を迎えました。私は、当初、「研究」と「環境安全」と「情報システム」の担当でしたが、最後の1年は「研究」が「教育」に変わりました。執行部に加わるまで私は、自分の研究分野である天文学、もう少し広く言えば基礎科学、の観点からしか東大や社会を見ていなかったといっても過言ではありません。

この3年間に、東大と社会の関わりの複雑さを学びました。その一例が競争的研究資金ルールの改善運動です。東大はその先頭に立ちました。研究の本質とルールとの不整合が、現場での研究効率を下げている実態を、制度の設計や運用にあたっている方々に理解して頂くのは最初はとても困難でした。幸い、関係者のご理解も次第に進んでいくつかの重要な改善が実現しました。この運動に関しては、さらなるフォロー、特に最も影響を受ける教員が積極的に発言し行動することが重要です。

前理事(副学長) 岡村 定矩

もう一つ学んだことがあります。それは東大の持つ多様性、言い換えれば懐の深さです。ある分野では自明と思えるやり方が他の分野では通用しないのです。博士課程院生の経済支援策の一つであるRA制度の改善や博士課程研究遂行協力費制度の創設、部局単位ではなく全学として学際的な教育を展開する「部局横断型教育プログラム」という新しい枠組みの開設を行いました。その過程では、この多様性に十分配慮する必要があることを実感しました。

上述の例のように成果のあがったこともいくつかありましたが、道半ばで引き継ぐことになったもの、問題点の指摘のみを申し送ることになったものも少なくありません。多くの素晴らしい方々の知己を得て、多忙を苦にする暇もなく、気がつけばあつという間に過ぎた3年間でした。この間の活動を様々な側面からサポートして下さった多くの方々に厚く感謝致します。

### 理事(副学長)退任にあたって

小宮山総長から「理事(副学長)に」とのお話があったのは、私が東大を定年退職する少し前であった。東大にはお世話になっていたし、何よりも小宮山総長の「アクション・プラン」と行動力に魅力を感じていたので受諾した。また、法人化の大波によって大学は危機とチャンスの中にあると思ったので、微力を尽くしてみようと思ったのも事実である。

1年目は「教育」「学生」「国際」を担当し、2年目は「学生」「国際」を担当した。どこまでできたのか自問自答するところではあるが、いくつかの施策は実行に移され、軌道に乗った。また、いくつかの施策は次期執行部への申し送り事項となった。いずれの場合も、この2年間、教職員の方々に大変なご尽力とご協力をいただいたことに深く感謝したい。特に、統括長やグループ長はじめ多くの事務職員の方々、新井さん、荻野さんら、秘書の方々には格別にお世話になった。私は「大学は、学問と教育と研究の場であり、そこにはacademic freedomと philosophyがなければならない」と思っている。その事は常に意識していた。法人化後、まだ4年しか経っていないので評価は難しいが、いろいろなバランスが崩れてきたことは確かである。ひとつは「基礎科学の軽視」である。これは後からボディブローのように効いてくるので、早めに対策を講じておく必要がある。また、ハード・ソフト両面から様々な学内整備が始まっている中で法人化だったので、各先生方には時間の劣化をもたらしてきたはずだ。これを回復することが重要である。

前理事(副学長) 浅島 誠

理事になって、まず私が手掛けたことは学生・大学院生の福利厚生である。今まで、ともすればバラバラであった組織を統合し、「学生相談ネットワーク本部」を作った。これにより、学生・大学院生の福利厚生・学生生活全体を考えられるようになった。本部内に設置した「なんでも相談コーナー」は、今や、学生や院生のみならず教職員の悩み事や相談事に対するワン・ストップ・サービスとして大きく機能している。寮についても新追分寮や柏インターナショナルロッジの建設に対応した。また、保健センターの改組を行い、「保健・健康推進本部」を設置した。これは西尾理事が全力で取り組んでこられた事業を引き継いだものである。「国際」関係では、小宮山総長のリーダーシップによる「第1回G8大学サミット」を行い、成功裡に終わった。大きな海外拠点としては「イェール・東大イニシアティブ」が設立された。今後、「真の国際化」を進めるためには、宿舎整備、ビザ手続き、受入れ体制、日本語・英語教育、日本の学生と留学生との交流などを改善していかなければならない。

まだまだ書き足りないこともあるが、思いつくままにいくつかのトピックスをとりあげてみた。私はこの2年間、役員懇談会などでかなり自由に発言してきたが、それも、小宮山総長の「東大を良くするための並々ならぬ努力と卓越した能力」に少しでも協力したいという思いから発した言動に他ならない。今、振り返ると、力不足や時間不足のためにやり残したことも多くあるが、これらは濱田新総長の執行部の下で解決し、前進してくれるものと思っている。



お役に立てなかったのですが

前理事（副学長） 高橋 宏志

2年間、理事（副学長）を務めて参りました。顧みて、東京大学のためになにも役に立てなかったことに気づきませんが、私の方はよい経験をさせて頂きました。

大学本部は、想像した通り、部局（私の場合は、法学政治学研究科）とは違いました。部局は、相対的にはありますがまだしも等質性があります。けれども、大学本部、東京大学全体はまことに多様です。考え方の基本構造が異なる多くの人がいるわけです。その中で、法学政治学研究科にいたときには気がつかないのですが、私はやはり法律家であり、口幅ったい言い方ですが真実と正義に多少ウェイトを置いた人間だったのだと思います。周りから見ても頼もしかったのか、煙たかったのかは本人の私には判断

が付きかねます。しかし、小宮山総長、他の理事（副学長）、事務職員の方々には随分と助けてもらいました。御礼申し上げます。

東京大学の将来には、少し不安があります。佐々木前総長が指摘されたように、政治との関係が不安定であり、たとえば運営費交付金はどうなるのか予断を許しません。東京大学の本当の味方がどこにいるのかも見えません。しかし、一人一人の教員、学生、職員の学問的営み、知的作業はまことに優れておりますので、天が東京大学を見捨てることはないでしょう。そう祈ります。

理事（副学長）の退任と同時に、私は東京大学をも退職いたします。長い間、有り難うございました。

定年退職に当たってのご挨拶

前理事（副学長） 平尾 公彦

この3月末で東京大学を定年退職する。四国の片田舎の高校を卒業したあと、京都大学で学んだ。その後はAlberta大学、滋賀医科大学、Sheffield大学、名古屋大学、そして東京大学と勤務地を変えた。知らない職場や土地に移ると習慣や風土も違い、戸惑うことが多い。できるだけいいところだけを見るように努めてきた。新しい場所に移るたびに、新しい友人ができたし、新しい発見があった。何より人生を長く生きることができた。東京大学に来たのは1993年である。あつという間の16年であったが、充実した幸せな時間であった。多くの方々にお世話になった。本当に感謝している。

私はGoyaに夢中である。むしろ夢中になるように自分で仕向けているのかもしれない。スペインから招聘があるとよっぽどでない限り引き受けている。もう数え切れないほどスペインを訪れている。目的は学会よりもGoyaにある。ブラド美術館をはじめとして、おまな美術館には何度も足しげく通った。パリやロンドンでもGoyaを追い求めているスペインとフランスの国境近くの小さな教会にある1枚の

Goyaを見るために長時間の列車の旅もした。Goyaに夢中になるとGoyaに関することは何でも集めたい。神田の古本市では、終日、古本屋めぐりをし、Goyaに関する本や画集を探し回っている。Goyaを知れば知るほど好きになる。

私のGoyaぐるい、Bachぐるい(BachもGoyaに劣らず好き)はずっかり有名になり、外国からの訪問者はGoyaやBachにまつわる土産を持ってきてくれる。つい先日、友人たちが私の定年を記念して国際シンポジウムを開いてくれた。何人かの外国の友人からGoyaの版画集や17時間にも及ぶBachのオルガン曲を集めたCDをいただいた。本当にうれしい限りである。

この4月から新しい職場に移る。齢60を過ぎ、研究者として残された時間を考えると、何となく寂しいが、これまでと同じように、新しい職場を好きになり、新たな感激をしたいと思う。GoyaやBachに負けぬくらい夢中になれるものを見つきたい。

Aun Aprendo

永い間、ありがとうございました。

退任の挨拶

前理事 山田 興一

本学教授を定年退職して6年半後の2005年10月に理事として出戻り、3年半小宮山総長のもとでいろいろな分野の仕事を担当しました。時代の先頭に立つ大学として何をなすべきかについては、すでに「(東京大学)アクション・プラン」にまとめられていました。志の高い方針が明確であったため、それらを如何に効率的に進めるかということを考え、実行すればよく、仕事量が多い分だけ達成したとの満足感を得る機会も多くありました。

担当分野は経営企画、総長秘書室、財務など内政的なものと産学連携、渉外など社会連携的なものでした。前者に関しては、活力が溢れた大学を保ち、更に発展させるために必要な大学運営の基本的構造である「自律、分散、協調系」のうち「協調系」の強化が大学本部の大きな任務でした。アクション・プラン実施の効果を上げるための協調系の重要性を、部局長を通す従来の伝達経路に加えて、総長

から直接教職員に伝える場を何回も持ったことが皆の理解を得るために有効でした。

総長が先頭に立ち、大学の活力を高めると共に世界にその成果を見える形にしていく活動を理事、部局長、その他多くの教職員が協力する体制が進んでいきました。

アクション・プランに沿った計画が進むにつれてその成果も世の中の人にかなり理解されて、社会との連携も密になってきました。そのため、東大基金充実化にも第一歩を踏み出せましたし、産学連携では海外の企業からも寄附講座設立、共同研究の申し込みが増えてきました。教育、研究、国際活動、社会連携など多くの分野での成果が相乗作用をして、好循環が生まれるという得がたい状況を体験し、楽しい気持ちで退任できることを皆様に感謝して退任の挨拶にいたします。ありがとうございました。

平成20年度卒業式が、3月24日(火)に、安田講堂において行われた。

式は、第一部(9時開式)理系学部、第二部(11時開式)文系・教養学部の2回に分けて行われ、約2,700名の卒業生(卒業生数3,045名)が出席した。

開式に先立ち、総長をはじめ、理事(副学長)、理事、各学部の学部長及び代表教員、並びにご来賓(経営協議会学外委員、各学部の同窓会等代表者)の方々がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となった。

はじめに、音楽部管弦楽団による「バッハ作曲『管弦楽組曲第3番』より『ガボット、ブーレ、ジューグ』」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、第一部は浅島誠理事(副学長)から、第二部は高橋宏志理事(副学長)から学事報告が行われ、小宮山宏総長から、各学部卒業生代表に、順次、学位記が授与された。続いて、小宮山総長から卒業生に告辞が述べられた後、卒業生総代(第一部 理学部 穂坂秀昭さん、第二部 文学部 長崎恭子さん)から答辞が述べられた。

その後、音楽部コールアカデミーによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了した。

なお、本学の卒業式では、壇上において手話通訳を行い、卒業生の父母会場(法文2号館31番教室、3番大教室及び1番大教室)では、スクリーンに大講堂での式典の模様(手話通訳の映像と筆記のテロップも表示)を放映し、父母など約3,500名が出席した。また、2回の式ともインターネットによるライブ中継を行った。

2回目の式終了後13時から14時まで、卒業生及び父母などに、安田講堂の一般開放を行い、約1,000名の方が来場し、自由に観覧いただいた。



## 平成20年度東京大学卒業式総長告辞



東京大学総長  
小宮山 宏

皆さん、ご卒業おめでとう。

皆さんの大多数の方は、4年前の4月に、東京大学に入学しました。日本武道館で行なわれた入学式で私は式辞を述べましたが、それは、その年に総長に就任したばかりの私にとって、総長として行なう最初の大きな仕事でした。あれから4年がたち、まもなく任期を満了する私にとって、今日の告辞は、総長として行う最後の大きな仕事になります。つまり、学生としての皆さんの4年間の歩みと、総長としての私の歩みは、びたりと重なっているわけです。それだけに、皆さんを送る今日の卒業式は、私にとっても格別に感慨深いものがあります。

4年前の入学式で、私は皆さんにある呼びかけを行ないました。それは、東京大学で学ぶ中で、「本質を捉える知」と「他者を感じる力」と「先頭に立つ勇氣」を身に付けて欲しいという呼びかけです。覚えておられるでしょうか？私は、東京大学で学び、教え、研究した私自身の体験を通して、「本質を捉える知」と「他者を感じる力」と「先頭に立つ勇氣」の3つこそが、東京大学の教育と研究を、これまで支えてきた核心的な価値であり、かつ、東京大学がこれから世界の大学を目指すうえで不可欠の要素である、そう考えました。そこで、総長就任直後の入学式で、これら3つの価値を身に付けて欲しいと、皆さんに呼びかけ、同時に、皆さんがこれらを身に付けることを可能にする教育環境の整備を、総長が取り組むべき最重要課題として自らに課したのです。

あれから4年の歳月が流れました。その間、皆さんも私も、立場こそ違え、東京大学という共通の場でそれぞれ精一杯活動してきました。この4年間に私が行ってきた取り組みを振り返りつつ、皆さんに餞の言葉を述べることにいたします。

東京大学は、きわめて規模の大きい、しかも多様性に富む大学です。10の学部、15の大学院研究科・教育部、11の研究所、18の全学センターがあり、約5000人の教員がいて、教育研究活動を展開しています。皆さんは前期課程の2年間を教養学部で過ごし、後期課程の2年間を10ある学部のいずれかで過ごしましたが、4年間を通じて、何人の先生と知り合ったでしょうか？どれだけの講義を聴講したでしょうか？皆さんが体験した東京大学は、この巨大で多様性に富む東京大学のほんの一部、ほんの一面に過ぎません。

学生だけではありません。私も含めて、教職員の誰一人として、この東京大学を隅々まで知る人はおりません。総長になったとき、私が最初に直面した課題は、この巨大で多様な東京大学に対して、総長として如何なる姿勢で向かい合うべきかという問題でした。ご承知のように、東京大学は2004年に法人化され、大学自身の責任で経営することが求められております。翌2005年に総長に就任した私は、実質的に法人化後最初の総長であって、法人化された東京大学の経営をどのように行うかという、歴代総長が経験されたことのない問題に、はじめて直面することになったのです。

法律の上では、法人化された国立大学の学長は大きな権限を与えられています。ですから、社会の一部からは、「東京大学総長は、企業経営者のような強力なリーダーシップを発揮せよ」という声が聞かれました。総長はトップ・ダウンで東京大学の構成員に臨み、総長の判断でスクラップ・アンド・ビルドを断行して、大学改革を進めろというわけです。他方で、学内の一部からは、「総長は部局の自治を尊重し、あくまで調整役に徹しろ」という声も聞かれました。大学はボトム・アップの組織であり、総長は伝統的な部局自治に大学経営を委ねて、余計なリーダーシップは発揮するなというわけです。

こうした2つの対照的な意見に挟まれて、私が出した答えは、東京大学は自律・分散・協調系の組織であり、総長は、自律・分散系の機能や活動を尊重しつつ、協調系の強化を図るためにリーダーシップを発揮すべきである、というものでした。

自律・分散・協調系という言葉で私がイメージしているのは、人間の身体です。人間の身体は、神経器官や運動器官、呼吸器官など様々な器官から成り立っており、器官はそれぞれ独立して存在し、自律的に動いていますが、同時に互いが協調して、生命体としての人間の生存を可能にしています。自律と分散と協調という3つの要素が十全に果たされてはじめて、命の営みが可能になるのです。

大学も同じです。器官にあたるのは学部や研究所などの部局ですが、これらの部局に属する教員が自律的に、かつ生き生きと教育研究活動を展開することが、大学のあらゆる活動の基盤をなします。総長が責任を果たすために必要なことは、総長が

部局や教員に命令することではなく、自律・分散系であるところの部局と教員が行う教育研究活動を尊重し、支援することです。東京大学総長の責任の在り方は、企業経営者とは本質的に異なるのです。

他方で、自律・分散系に任せるだけでは総長の責任を全うできないとも、私は考えました。この場合の責任とは、社会に対する責任です。東京大学は巨額の国費を与えられており、そうである以上、社会の期待に応える責任を負っています。それでは東京大学に対する社会の期待とは何でしょうか？優れた人材を育成して社会に送り出すことや、ノーベル賞級の傑出した研究成果を生み出すことは、これらは間違いなく社会の期待に含まれるでしょう。私は、それらと並んで、人類が直面する諸課題の解決に率先して取り組むこともまた、東京大学に対する社会の期待の中で、大きな割合を占めていると、そう考えました。

21世紀初頭の現在、人類は実に多くの、解決困難な課題に直面しています。思いつくままに列挙すれば、地球温暖化に代表される環境問題、資源エネルギー問題、食糧問題、貧困問題、都市問題、高齢化社会の問題などです。その大部分は人類活動の膨張の必然的な結果であり、私達がよりよい未来社会を築くためには、これらの課題の解決が不可欠です。

しかし、これらはいずれも巨大な複合的問題であって、ある特定分野の知識のみではとうてい解決できません。様々な分野の知識を有機的に組み合わせることが、課題解決のための不可欠な前提です。

東京大学は、世界有数のシンクタンクとなる潜在的能力を持っています。それは、理科系と文科系にまたがる広範な分野において、一流の研究者を数多く擁しているからです。しかし残念なことに、これまでの仕組みは、専門知識を有機的に組み合わせることに適したものではありませんでした。何故なら、個々の研究者の最大の使命は専門知識を深めることにあり、そう考えられ、個々の学部や大学院研究科の主要な役割は、専門知識の教育にあると、そう考えられてきたからです。部局や教員の自律・分散的活動に委ねては、専門化が進むばかりで、人類の直面する諸課題の解決に必要な、様々な専門知識を有機的に組み合わせるといふ仕組みは、東京大学の中に永久に出現しません。私は、そのような仕組みを作ることこそ、学術経営において東京大学総長が期待されている役割だと考えました。私が協調系の強化に力を注ぐと決意した所以は、ここにあります。

協調系の強化のために、4年間に様々なことを試みましたが、とりわけ重要な成果と考えているのは、以下に述べる2つの事業です。

まず、研究については、総長直属の総長室総括委員会を設置し、この委員会の管轄下に学術統合化プロジェクトを推進し、部局

の壁や専門の壁を超えて、統合的に研究を進める仕組みを作りました。多くの教職員の積極的な参加を得て、わずか4年でこのプロジェクトは大いに進展し、現在、サステナビリティ学連携研究機構や生命科学ネットワーク、海洋アライアンスなど、合計16の組織が活発に活動しています。いずれの組織も、経験を積む中で協調能力を高めつつあります。

教育については、教養学部の学生を対象とする、学術俯瞰講義を開始しました。これは、学術を、物質、生命、情報・数学、人間・環境、社会、思想という6つの領域に大きく括り、それぞれの領域において超一流の業績を挙げられた学者に、学術の全体像を語って頂くというものです。第1回目の俯瞰講義はノーベル賞受賞者である小柴昌俊先生にお願いし、私自身も何回か教壇に立ちました。皆さんの中にも、聴講した方がたくさんおられると思います。講師はみな、最も高い学問水準に到達した方たちです。その高みから俯瞰した、その講師独自の学問の全体像を、若い学生諸君に語って頂く、というのが趣旨です。ですからこれは、通常の概説講義や入門講義とは全く異なる、新しいスタイルの講義なのです。学術俯瞰講義を聴講して大きな刺激を受けたという学生諸君の声を、数多く耳にしています。これがさらに充実されて、今後も東京大学の若い学生諸君に刺激を与え続けてくれることを心から願っています。

こうして私は、研究における学術統合化プロジェクトと、教育における学術俯瞰講義を車の両輪として、学術における協調系の強化に努めてきました。こうした活動の基底にある考えを一言で要約すれば、「知の構造化」ということになります。

「知の構造化」とは、様々な領域の膨大な専門知識を有機的に関連づけ、専門領域を超えた巨大な課題の解決のために活用することを指します。20世紀は人類活動膨張の世紀であり、人類の有する知識の総量は膨大なものとなっています。こうした中で、最先端の研究者は自らの研究領域を狭く限定し、その狭い範囲内で、まるで深い井戸を掘るようにして、新たな発見を求めるといった傾向が顕著になっています。いわゆる専門化の傾向であり、増大する知識の多くは、限られた数の専門家にしか理解できないものになっています。先ほど述べたように、人類は、地球温暖化に代表されるように、実に多くの課題を抱えています。これらの課題は限られた領域の専門知識をもってしては、それがいかに深い知識であっても、解決することは不可能です。人類が直面する巨大で深刻な課題を解決するには、「知の構造化」が不可欠なのです。

私が「知の構造化」の必要性に思い至ったのは、自らの研究活動を通してでした。私は、今から46年前に教養学部理科1類に入学し、2年後に工学部化学工学科に進学しました。学生時代はアメリカン・フットボールの練習に明け暮れていましたが、大学院に残って研究者になる道を選択し、以来約40年、化

学工学を主たる分野として研究活動を続けてきました。私が化学工学に進学した1960年代は、日本社会の工業化が急速に進展した時期で、「理工系ブーム」という言葉が流行ったように、工学部や理学部の学生定員が10年間でほぼ倍増し、化学産業も花形産業のひとつでした。

ところが、間もなく逆流が始まります。水俣病や四日市喘息に代表される公害問題が深刻化する中で、化学産業は「公害の元凶」として激しい批判を受けるようになったのです。私は、研究者としての足場を崩されるような、大きな衝撃を受けました。しかし、もともと私は楽観的かつ行動的な性格の人間ですので、深刻な顔をして悩むよりは、前向きかつ具体的に難問を解決することの方が性に合っています。課題は解決するためにあるというのが、私の信念です。このときも、環境問題を生み出した責任が科学者にあるのであれば、課題を解決する科学的処方箋を発見することこそ、科学者が自らの責任を全うする道であろうと考えました。その科学的処方箋を求めて、私は環境学の広大な領域に足を踏み入れることになったのです。

調べれば調べるほど、私たちを取り巻く地球環境が急速に悪化していることが分かりました。エネルギー資源の枯渇と地球の温暖化、そして廃棄物の大量発生という三重苦が急速に進行し、もし事態を放置すれば、21世紀半ばに、地球環境の持続的再生産は、ほぼ確実に困難になる、そう予想されたのです。私は、この環境危機を解決し、人類と地球の持続的発展を可能とするような、科学に基礎づけられた具体像を提案することこそが、科学者の責任であると考えました。私の採った手法は、21世紀の半ば、2050年の時点で社会がこのようになっていれば地球環境は持続できるという、マクロ・ビジョンを提示し、そのビジョンを踏まえて、例えば資源のリサイクルや太陽電池といった個別の活動や技術を評価し、ビジョンを実現するための具体的道筋を明らかにするという方法でした。研究を進めた結果、私は、地球上の全ての人々が現在の先進国に匹敵する生活レベルを達成し、同時に環境と資源の問題を解決することは、十分に可能であるという結論に達しました。これは、夢ではなく、科学的方法に裏付けられた結論です。

私が「ビジョン2050」と呼ぶ、社会のマクロ・ビジョンは、文科系を含む様々な領域の研究者との議論を通じて出来上がったものです。私にとって、分野の異なる研究者と協働しつつ大きな成果を生み出したのは、これがはじめての体験でした。それは、決して容易なことではありませんでした。異分野の研究者が集まっても、問題関心の相違や専門用語の壁に阻まれ、はじめはコミュニケーションすら困難でした。その困難を克服し、専門の壁を突破することによって、はじめて「ビジョン2050」は誕生したのです。私は、その経験を通して、「知の構造化」の意義と必要性を確信しました。

総長になる直前、『知の構造化』という題名の書物を上梓して世に問いました。皆さんの中にも、読んで下さった方がおられると思います。私の最大の狙いは、東京大学で広く「知の構造化」を実行し、東京大学を、人類の抱える巨大な未解決の課題を解決するための、世界的な「知の拠点」にすることにありました。この狙いに基づいて、総長として、協調系の強化に力を注いだのです。

人類の直面する巨大で深刻な課題は、環境問題にとどまりません。食糧問題や貧困問題、都市問題や高齢化社会の問題など、枚挙に暇がありません。私が総長を退任した後も、東京大学がこれらの諸課題の解決に向けて貢献し続けてくれることを、私は信じて疑いません。

皆さんもぜひ、東京大学が行なうこの課題解決の試みの環に加わって下さい。卒業して社会に出る方も多いと思いますが、皆さんは、これで東京大学と別れるのではありません。今日を境に、卒業生という資格で新たな関係を結ぶのです。卒業生は、東京大学という巨大なアカデミック・コミュニティーの一員です。東京大学は、卒業生の皆さんに向かって、様々な形で活動報告をします。人類の直面する深刻な課題の解決に向けた東京大学の取り組みを、どうか注意深く見守ってください。そして、皆さんが社会人として働くそれぞれの場で、自分なりにそれらの課題の解決に向けて貢献してください。「知の構造化」を東京大学の中で推進するには、部局の壁、専門の壁を突破することが必要でした。私は、「知の構造化」を日本全体で推進するには、大学と社会の壁を突破することが必要になると、そう確信しています。皆さんは、卒業後も、東京大学の人たちと協調して、人類の抱える困難な課題の解決に貢献し、皆さんの子孫のために、よりよい社会とよりよい地球を残してください。

そのような活動を展開する上で必要なものは、「本質を捉える知」と「他者を感じる力」と「先頭に立つ勇氣」です。4年前の入学式で、私は皆さんに、東京大学で学ぶ中で、この3つの価値を身に付けて欲しいと呼びかけました。いま、卒業式に際して、改めてこの言葉を贈ります。東京大学で身につけた「本質を捉える知」と「他者を感じる力」と「先頭に立つ勇氣」を、社会の中で磨き上げ、それぞれの活動の場を通して、現代社会が抱える様々な課題を解決するために貢献してください。

皆さんの前途に幸多かれと祈りつつ、東京大学総長としての私の最後の大きな仕事を、これで終わることにします。

さようなら。そして、どうもありがとう。



<平成二十一（2009）年三月二十四日>

## 第一部 答辞

本日は教職員の皆様をはじめ、多くの皆様のご臨席の下、このように盛大な卒業式を催していただいたことに、卒業生一同心より御礼申し上げます。また只今小宮山総長より告辞のお言葉を賜りましたことに、重ねて御礼申し上げます。振り返ると、大学での時間は瞬く間に過ぎて行きました。その中で私たちは諸先生方のご指導を受け、大いなる知恵を得ました。そして何より、かけがえのない多くの友人を得ることができました。その友人たちと共によく遊び、そして勉強に励んだ時間はとても楽しく、有意義で、この上なく贅沢なものでした。卒業に際して喜びを覚える一方で、友人達との別れに、寂しさを感じずにはられません。しかし、いつまでも過去を名残惜しむことは許されません。程なくして私たちはそれぞれの道を歩き始めますが、その前途には未解決の問題が山積みとなっています。多種多様な問題が噴出している

卒業生総代 理学部 穂坂 秀昭

昨今、東京大学の卒業生である私たちの果たすべき役割は、ますます大きくなってきているものだと思います。私たちは東京大学で得た知識・技術を元に、互いの分野の垣根を越えて協力し合い、待ち受ける困難な課題に立ち向かわなければいけません。四年前の入学式の日、小宮山総長は次のようにおっしゃいました。「先頭に立つ勇氣を持って」と。いま改めてこの言葉を噛みしめ、先頭に立ってより良い未来を切り拓いていけるように、今後更なる努力をすることを、ここに決意致します。最後になりましたが、諸先生方のご指導、職員の皆様の助け、そして暖かく見守ってくれた家族があって初めて、本日、こうして卒業の日を迎えることができました。卒業生を代表して、私たちを支え、導いて下さった全ての方に心より御礼申し上げます。そして、皆様方のご健康と東京大学の更なる発展を願い、答辞と致します。

## 第二部 答辞

本日は、諸先生方並びに来賓各位の御臨席を賜り、盛大な卒業式を挙げていただき、また只今は総長先生からの暖かい訓辞と激励のお言葉を賜りまして、私たち卒業生一同、感謝の念でいっぱいでございます。私たちを今まで育て、大学にまで通わせてくださった両親、家族の皆さん、学問の奥深さを示唆し、時にやさしく、時に厳しく、的確にご指導くださった先生方、共に学び、多くの時間を共有した学友、先輩、後輩の皆さん、そして、私たち若者に学びの場と機会を与えてくださったすべての皆様に、感謝の意を表明したいと思います。今日まで本当にありがとうございました。春の風が爽やかなこのキャンパスに立ち、卒業という事実と対峙するとき、私たち一人ひとりの胸中には、さまざまな想いが去来しているに違いありません。

卒業生総代 文学部 長崎 恭子

入学後間もなく、私は日中韓の学生の国際交流を目的としたビジネスコンテストを企画するサークルに所属しました。そこでの出会いと経験から、色々なものの見方や考え方の存在を知りました。大学生の身で起業している先輩に会ったときには衝撃を受けました。多くの社会人の方々に支援していただき、感謝を学びました。中国や韓国の学生とのやり取りの難しさに悩んだこともありました。友人と、互いに励ましあいながら徹夜をしたことも、一晩中喧嘩ごしの議論をしたこともありました。議論に議論を重ね、意思決定を積み重ね、コンテストを成功させました。この活動を通して得たものは、ものごとを見る視点の多様性と、その視点を相対的に捉える力が、意思決定の質に大きく影響を与えているのではないかと、いう気付きでした。文学部に進学後、専攻した社会心理学の研究のひとつに、意思決定に関するものがあり、視点の多様性と相対化に結び付けて、卒論のテーマとしました。実施した調査の結果、色々な人とのコミュニケーションを多くとる人は、自分を客観的に認知する

視点を持ち、かつ相手の立場・視点に立って考えることができるため、他人の意見に安易に流されて行動を決めることが少ない、ということが、統計的に分かりました。人は、人との意思疎通の中で、新しい視点を発見・客観化し、自分の判断軸のひとつとして血肉にするのだと思います。今、日本の社会は、大きな転換点に到達しようとしています。法律、教育、医療、福祉、産業、金融、ありとあらゆる分野で戦後に作られた古いシステムが機能しなくなり、問題が起こっています。特に、金融の大河は、濁流となって実態経済を直撃しました。しかし私たちは、決して悲観論に屈しません。大きな変化の先に希望を見ます。私たちの世代は、瓦解した社会システムを、新しいパラダイムと一貫したコンセプトで再設計し、社会に浸透させていく役割を担っているのです。明治維新後に新しい日本を作った偉人たちように、活躍すべき時なのだと思います。私は、4月から就職する会社で、金融の民主化という切り口からこの社会システム再構築に貢献していきたいと考えています。現状の資本主義やお金そのものに対するパラダイムを変えるのは容易なことではありませんが、決して逃げ出さず、視座を変え、視点を変え、解を創造していきたいと思っています。その積み重ねが、私の人生を作るのでしょうか、そうやって未来は創造されていくものだと思います。私たちは今日、この東京大学を卒業します。今後さらに学問の道に進む者も、実社会において職業上の目的に邁進する者も、明日からの人生の節目においてその都度、ここで学んだことの意義をかみ締め、それぞれの分野で活かし、一人ひとりが託された使命を精一杯果たします。4年間、ありがとうございました。終わりに、皆様の御健康と東京大学の輝かしい発展をお祈りいたしまして、答辞とさせていただきます。

平成20年度学位記授与式が、3月23日(月)に、安田講堂において挙行された。

式は、第一部(9時開式)人文社会系研究科、教育学研究科、法学政治学研究科、経済学研究科、総合文化研究科、新領域創成科学研究科、学際情報学府及び公共政策学教育部、第二部(11時開式)理学系研究科、工学系研究科、農学生命科学研究科、医学系研究科、薬学系研究科、数理科学研究科及び情報理工学系研究科の2回に分けて行われた。式には、約3,000名の修了生(修了者数4,047名(修士課程2,825名、博士課程809名、専門職学位課程413名))が出席した。

開式に先立ち、総長をはじめ、理事(副学長)、理事、各研究科長及び各研究所長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となった。

はじめに、音楽部管弦楽団による「パッハ作曲『管弦楽組曲第3番』より『ガボット、ブーレ、ジーク』」が演奏され、壇上列席

者の紹介があった後、第一部は濱田純一理事(副学長)から、第二部は平尾公彦理事(副学長)から学事報告が行われ、小宮山宏総長から各研究科・課程の修了生代表に、順次、学位記が授与された。続いて、小宮山総長から修了生に告辞が述べられた後、修了生総代(第一部 教育学研究科博士課程 大滝世津子さん、第二部 工学系研究科博士課程 大内政輝さん)から答辞が述べられた。

その後、音楽部コーラルアカデミーによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了した。

なお、本学の学位記授与式では、壇上において手話通訳を行い、修了生の父母会場(法文2号館31番教室、3番大教室及び1番大教室)では、スクリーンに安田講堂での式典の様様(手話通訳の映像と筆記のテロップも表示)を放映し、父母など約2,500名が出席した。

## 平成20年度学位記授与式総長 告辞



東京大学総長  
小宮山 宏

本日、東京大学から博士、修士あるいは専門職の学位を授与された皆さん、おめでとうございます。東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いの言葉をお送りします。

今日は、私にとっても特別な日です。4年間の総長の職務がまさに終わろうとする今、めでたく学位を授与された皆さんを送り出す、最後の告辞を述べる時となりました。

私は今から40数年前に、化学工学を勉強して研究者の道を歩み始めました。そして20年程前からは、地球環境に強い関心を抱くようになり、ごく最近のことですが、サステナビリティ・サイエンスという新しい学問領域を立ち上げました。

本日は、この地球環境問題の話題を中心にして、私自身のこれまでの研究で得られた知見、思い、経験を語りつつ、皆さんへの期待、エールをお送りし、餞の言葉に代えたいと思います。本日送り出す修了生は4,047名です。この中で、留学生の

方々も年々増大しており、博士課程においては12パーセントに達しました。皆さんが今後活動する領域、職業、立場などは、それぞれ異なるでしょうが、いずれにしても、この地球社会運命共同体の未来を切り開く、かけがえのない一員であることを、まず強調したいと思います。

さて、20世紀において人類社会は未曾有の発展と膨張をとげました。19世紀と比較すれば人口は3.5倍となり、穀物生産は7.5倍、エネルギーの消費量も実に20倍になっています。しかし、こうしためざましい発展と引きかえに、私たちは大きな「負のレガシー」を背負うことにもなりました。もしこのままの推移で人類社会が膨張を続ければ、環境と資源の問題に限っても、石油資源の枯渇、地球の温暖化、廃棄物の大量発生三重苦という、人類存亡に関わる重大な局面を迎えるであろうことは、ほぼ確実な状況にあります。

このような難局にある今こそ、人類社会は一致団結して、持続可能な地球環境を確保するための技術開発、社会システム、経済システム、あるいは国際協調の体制を実現しなければなりません。今ほど、知の創造と継承・発展に携わる私たち研究者が、人類の未来に重大な責務を負う時代は、未だかつてありませんでした。21世紀は、人類の文明がはたして存続可能なのかどうかという、サステナビリティが問われる世紀です。

かつてレイチェル・カーソンは『沈黙の春』を出版して、DDTやパラチオンなど微量の化学物質が、いかに環境を破壊しているかを問題にしました。1962年のことです。そしてその10年後にはローマクラブが『成長の限界』を発表して、「現在の人口増加や環境破壊が続けば、資源の枯渇や環境悪化により、

100年以内に人類の成長は限界に達する」という警鐘を鳴らしました。しかし私たちは、もはや未来の予測や警鐘にとどまっているわけにはいきません。地球環境を持続可能なものにして、次世代へと引き継いでいくための、ポジティブな未来社会の設計図を示すことが必須です。

そのように考えた私は、自らフロントランナーとして、この一大事業に先鞭をつけようと一念発起し、1999年に『地球持続の技術』を出版しました。大方の予想で世界人口が現在の1.5倍、つまり90億人となり、単純計算でエネルギー消費量が現在の3倍になると予想されるのが2050年です。その2050年までに、私達は何をなすべきか、何をなしうるか、という具体的なアクションプランを、その本の中で明確に示し、これを「ビジョン2050」と命名しました。今はその詳細に立ち入りませんが、ビジョン2050の結論はこうです。— (1) 物質循環システムの構築、(2) エネルギー効率を現在の3倍に引き上げる、(3) 太陽電池などの非化石エネルギーの利用を現在の2倍に引き上げる、この3つを実現することで、持続可能な社会を作り上げることは十分可能だ、というのが結論です。

ところで、そのような未来ビジョンの策定を通じて、またビジョン策定後の10年の事態の経緯を見て、あらためて次の2点がポイントになる、と再認識しました。

一つ目は、「課題先進国」である日本が、「課題解決先進国」として世界をリードしていくことが、今後ますます重要になるだろう、ということ。

二つ目は、20世紀において爆発的に増大した知識を、問題解決に向けて再統合しなければならないという、いわゆる「知の構造化」の問題です。

この2点は、地球社会の未来を背負う皆さんに、本日、強く訴えたいところですので、少し詳しくお話しします。

第一に、課題先進国である日本が、課題解決先進国として世界をさらにリードしていかなければならない、という点です。

日本は、世界有数の「課題先進国」です。それは、日本が第二次世界大戦後のほぼゼロの状態から立ち直り、急激な経済発展をとげ、1968年にはすでにGDPでアメリカに次ぐ世界第2位となる一方で、深刻な公害、環境汚染を招いたということに象徴されています。私が子供だった頃は、空が工場の煙で曇っているのは日本経済がうまく成長している証だ、と小学校で習いました。しかし、ふと気がついてみると、空は灰色で、光化学スモッグが起り、川は汚れて異臭を放ち、海もすっかり汚れてしまいました。しかしその後、徹底的に汚染物質の排出を規制する努力が、国レベル、自治体レベル、住民レベル、産業界レベルでなされ、その結果、ふたたびきれいな空と海を取り戻すことができました。したがって日本は、環境汚染という課題が目に見える形でいち早く顕在化したからこそ、その課題

解決の必要に迫られ、見事、問題をクリアできたこととなります。

深刻な大気汚染の解決にむけての努力も、他の先進諸国と比べて、日本は一步も二歩もリードしてきました。たとえば火力発電に際しては、イオウ酸化物が排出され、大気汚染の大きな原因となるのですが、そのイオウ酸化物の排出量を国際的に比較すると、2002年の時点で、日本はアメリカの20分の1、ヨーロッパの中でクリーン化が最も進んでいるドイツと比べても35分の1です。日本は圧倒的にクリーンな火力発電の方式を世界に先駆けて導入したということが、数字から明確に読みとれます。

このように日本は、経済発展にともなう様々な課題が、世界に先駆ける形で顕在化し、その意味で「課題先進国」になりました。しかし、だからこそ、その課題克服の必要に迫られ、結果として、環境を汚さない産業システムの構築を、世界に先んじて行う「課題解決先進国」に変貌する道が開けてきた、ということができるでしょう。

今お話したのは、汚染した環境をもとにもどすという、マイナスをゼロに近づける形の、ややネガティブな方向の事例です。勿論、このような課題は、他の先進諸国、あるいは今、発展途上にある多くの国々でも、現に、あるいは近い将来、深刻な問題になり、その課題解決に向けて日本が一つのモデルを提示している、という点で、立派な課題解決先進国になっているのですが、もっと積極的な意味で、地球資源について、日本が世界をリードする、顕著な事例がいくつも見られます。例えば、日本の企業による、海水の淡水化技術がそうした一例でしょう。

海水淡水化の方法の一つに、海水に圧力を加えて濾過膜を通して淡水を漉し出す、「逆浸透法」があります。その実用化に際しては、濾過膜の性能をいかに高め、しかも生産コストをいかに押さえるかが、従来、大きな問題となっていました。

水槽をセロファンのような半透膜で仕切り、一方に海水、反対側に真水を入れると、真水が海水側に浸み込みます。24気圧の浸み込む力、すなわち浸透圧がかかるからです。逆に、海水側に24気圧以上の圧力をかけると、今度は海水側から真水側に水が浸み出していきます。その時に間にある膜が、塩分などの不純物を遮断し、水分子のみを通過させると、真水が得られる、というのが逆浸透法のメカニズムです。しかしそのためには、濾過膜に、電子顕微鏡でも見えないような小さな穴をあけて水分子のみを通過させ、しかもできる限り24気圧に近い圧力で漉し出されていくような膜を作る、きわめて高度な技術力が求められます。その難問を見事クリアしたのが、日本のメーカーであり、深刻な水不足に苦しむ中東や北アフリカを中心に、この淡水化ビジネスは日本が大きなシェアを獲得しております。

21世紀は、石油よりも、むしろ水をめぐる熾烈な争いになる



とも予測されるなか、広大無辺の海洋から、大量の淡水を、比較的安価で、エネルギー効率よく獲得できる道筋を切り開いたことで、課題解決先進国としての日本の役割はさらに大きく広がりました。

もっとも、日本は明治以来、欧米先進国に追いつくことに必死だったあまり、もうすでにこうしたさまざまな点で、世界のトップランナーのレベルに達しているにもかかわらず、欧米の優れた点に見習おう、というキャッチアップの精神から未だに抜け切れないでいるのは、まことに残念なことです。エネルギー資源が乏しいために、少しでもエネルギー効率のよい物づくりシステムに移行せざるを得ず、また、国土が狭く、生活空間に悪影響が及びやすいために、環境を汚染しないような産業システムを作らざるを得なかった、このような、たゆまぬ課題克服のための努力の歴史を、私たちはもっと誇りに思わなければなりません。さらに、そのようなスタイルこそが、これからの地球社会の模範になるのだ、という自覚を深めるべきでしょう。

以上が、本日の告辞で、是非とも皆さんに訴えたい第一の点です。少し日本を中心にした言い方になってしまったかもしれませんが、留学生の方々には、このような課題解決先進国としての日本の重要性に今後も目を注ぎ、地球環境持続のための国際連携ネットワークの強化に向けて、ともに力を合わせていければと強く願います。

もう一つ、皆さんにお話したいのは、知の構造化と連携ネットワークの必要性です。

20世紀は、知識がおびただしく膨張した時代でもあります。専門領域を分化し、たえず先端化していくサイエンスの各分野では、次々と専門知が生み出されていきます。そしてこのような専門分化の傾向が著しく進んだ結果、自分が生み出す専門知が、出発点となっていたはずの現実世界と、どのような関係にあるのか、あるいは、大きな知識体系や広いコンテキストの中で、どのような意味を持つのか、これが見えにくくなっている、そのような状況に私たちはおかれています。いわゆる蛸壺化の弊害です。しかしサイエンスは元来、専門に分化していく内在的方向性があります。先ほどの海水淡水化における半透膜の開発にしても、まさに限定された専門知の世界での最先端の努力のたまものです。

しかし、ただ狭い専門知の世界にとどまっていればよい、ということではありません。全体像の中での位置付けができない専門知は、バラバラになったジグソーパズルのピースであり、知の断片にすぎません。他の領域の人たちから見れば、一体、どのような研究を、どのような目的で行なっているのか、すっかり見えなくなってしまいます。したがって、「知識の構造化」は絶対に必要です。

知識の構造化はコンピューターが勝手に行なってくれる、人間がする必要はない、グーグルがあるではないか、ヤフーがあるではないか、それらが勝手に知識を構造化してくれるはずだと、そう考える人があるかもしれません。しかしそれは誤っています。本来、コンピューターは、自ら目的に向けて知を統合するものではありません。それを行なうのは人間一人一人の頭なのです。

私たちは自らが頭を使って、知識の構造化を行なわなければなりません。その際に、「本質を見抜く力」はきわめて重要です。しかし、その「本質を見抜く力」とは、一体何なのでしょう。シンプルな具体例をひとつだけ紹介しましょう。

乾電池に豆電球を一つつなぐと、豆電球が点灯します。今度はその電池に、豆電球をもう一つ並列につなぎますと、豆電球の明るさはどうなるのでしょうか。多くの方は、並列だから明るさは変わらない、そう答えるでしょう。実験すれば分かることですが、二つを並列につないだときのほうが、明らかに豆電球は暗くなります。しかし、1.5ボルトの電池に豆電球を一つつないでも、並列に二つつないでも、明るさは同じだと、学校で習いました。私達は、嘘を習ったのでしょうか。あるいは、所詮、理論と現実は一貫しないものだ、と割り切るべきなのでしょう。いずれも違います。

なぜ実験では暗くなるのか、その理由を見究めることができれば、問題は氷解します。

理由は、豆電球をつなぐと電池の電圧が変わるからです。一つつなぐと普通の電池と豆電球の組み合わせであれば、1.43ボルト程度に下がり、二つつなぐと、1.37ボルトほどにさらに下がります。並列に二つつないでも、明るさは同じである、という理論は、電池の電圧がいずれも1.5ボルトである、という前提の上に成り立っているのであり、現実には、その前提が成り立っていなかったのです。つまり、理論が誤っているのではなく、理論を現実に対応する仕方に誤りがあったのだ、と見究めることが、この事例の場合の「本質を見抜く力」になります。

しかし知識の構造化は、個人的な知的営みだけで成し遂げることはできません。私たちの前に茫漠と広がる知識と情報の大海原、その全体像を把握できている人は、一人としていません。どれほど有能な人でも、それは不可能です。

したがって、専門を異にする数多くの研究者たちと活発に議論して、先端化した専門知相互の接続を図り、より大きな知識の地図へと構造化していく必要があります。一人の人間は言うに及ばず、ひとつの研究機関が総力をあげて取り組んだとしても、たとえばエネルギー環境の次世代モデルを作れるものではありません。21世紀は本質的にネットワークの時代なのです。そして、このネットワーク作りは、国の壁を越えた、全地球的な視点でなされなければなりません。その意味では、昨年7月、

洞爺湖で開催されたG 8 首脳会議に合わせる形で、史上初の「G 8 大学サミット」を開催し、27大学の代表が、「札幌サステナビリティ宣言」を採択したことは、世界の大学が学術国際協調の体制へと向かう、新たな時代の幕開けを告げる画期的な出来事でしょう。

しかし、ここで特に強調したいのは、このような議論の輪、ネットワークの広がり、大学間にとどめてはいけない、ということです。先ほど電池と豆電球の事例でもお話しましたが、理論あるいはモデルと、現実に見られる現象との間には、しばしば不一致が生じます。そしてこの不一致の発見こそが、よりの確な知の地平を開いてくれると同時に、よりの確な現実への対応を可能にしてくれます。大学というコミュニティは、基本的に、ものごとを基礎から、じっくりと理論的に考える人々の集団であり、またそのような研究者マインドを、時代を越え、未来社会に向けて守り、育て、発展させることに、大学固有のミッションがあります。しかしながら、このような知のコミュニティが、課題解決に向けて真の力を発揮するためには、知が適用され、試される場となる一般社会との連携を、今後ますます深めていかなければなりません。大学と社会との、適正な関係プレーの確立が、時代の要請なのです。

修了生の皆さんが東京大学で行った知の冒険は、今日の日をもって、一つの区切りを迎えます。四月からは新たな船出です。歩みゆく道はさまざまでしょう。しかしどうか忘れないで下さい。東京大学で学んだことが、真の意味で試されるのは、これからです。これまで学んだ理論、知識、情報と、これから直面する現実、実態とのズレをどうか恐れずに、そこからさらに知の力を研いで下さい。そして、この点はこうしたほうがいいのではないですかと、東京大学にフィードバックして下さい。東京大学は皆さんからの励まし、支援、助言を心よりお待ちしております。

科学技術の発展は、世界を狭くしました。自然に対する人間の支配力が増大したことで、地球の有限性が露わになりました。それと反比例するかのように、知識の世界は、ひたすら広がり続け、今や知識の総体を人間はコントロールしがたくなってきました。しかし私たちは、一人一人が、自らの知のナビゲーターをヴァージョンアップしつつ、さまざまな意味での知識のネットワークの絆を深めて、この困難な時代を乗り越えるための知の力を取り戻そうではありませんか。このことを最後に強調して、本日の告辞を締めくりたいと思います。どうもありがとうございました。

<平成二十一（2009）年三月二十三日>



## 第一部 答辞

修了生総代教育学研究科博士課程  
大滝 世津子

本日は小宮山総長をはじめ、多くの皆様のご臨席を賜り、このように盛大な学位授与式を催していただきましたこと、修了生を代表いたしまして、心より御礼申し上げます。また、只今は小宮山総長より激励のお言葉を賜りましたこと、重ねて御礼申し上げます。

私は数年前、希望と不安を胸に、この東京大学大学院の門を叩きました。はじめは右も左もわからない状態からスタートし、無我夢中で走り続けた日々でした。そんな私が、無事に今日の日を迎えることができたのは、ひとえに東京大学と、そこで出会えた大切な方々のおかげであると感じております。

私が大学院に入学し、最初に実感したのは「自分の無知」でした。そこから、試行錯誤しながら学んで行く中で、時に私の行く道を照らし、時に叱咤激励し、時に支えて下さったのが、親身になって下さる先生方、面倒見の良い先輩方、そしてかけがえの無い同期や後輩達でした。こうした方々との議論や学問的な訓練を通して、私は幾度も「目からウロコ」という体験をし、わくわくする日々の中で、学問の面白さと厳しさを学びました。この同じ時期に東京大学に在籍したからこそ得ることができた大切な出会いに、いま改めて感謝しております。

本日ここに集った修了生は、学問領域も、就学年数もさまざまですが、この大学でのかけがえのない出会いは誠に得がたいものであったと、誰もが感じていることでしょう。

けれども、今日のこの日は私たちにとってゴールではなく、スタートです。周囲に目を向けてみると、環境問題や資源問題、人口問題など、マクロレベルでも、ミクロレベルでも、多くの問題が山積しています。こうした問題に対応するためにも、これからひとりひとりが、この恵まれた研究環境を持つ東京大学で、真剣に学問と向き合えた経験を誇りにして、この大学で培った眼で社会を見つめ、精一杯持てる力を発揮する、そのことが同時に、私たちを導いてくださった大切な方々への恩返しにもなると考えております。この大学で学んだ全てのことが私たちの宝物です。

最後に、これまでご指導下さいました小宮山総長をはじめとする諸先生方、職員の皆様、そして、いつも私たちを温かく見守って下さったご家族の皆様に、重ねて御礼申し上げますと共に、皆様のご健康と東京大学の更なるご発展を祈念し、答辞とさせていただきます。ありがとうございました。

## 第二部 答辞

修了生総代工学系研究科博士課程  
大内 政輝

本日は、諸先生方、教職員の皆様をはじめ、多数の皆様のご臨席の下、このように盛大な学位授与式を催していただき、修了生一同、心より厚く御礼申し上げます。また、只今は小宮山総長より、ご懇篤なる告辞と激励のお言葉を賜りましたこと、重ねて御礼申し上げます。

さて、私たちが本学へ入学して以来、2年もしくは5年間を振り返りますと、そのほとんどの時間を「科学」という知的活動に捧げてきました。科学研究は、一見すると極めて高い合理性をもった知的活動であるように見えます。しかしながら、実際には、自己の予測や仮説がすぐに成功することは極めてまれであり、研究活動の大部分は、失敗の活動であったといっても過言ではありません。そこでは、私達が持つ予測や期待のような、「主観」に対して、真理に基づいた「結果」のみが存在しました。この絶対的な真理の前では、私達の思考、行動、費やした時間などは、いとも簡単に打ち砕かれ、時には途方にくれることもありました。しかしながら私達は、この科学研究を通じ真理と向き合うことによって、自らの思考、予測を客観的に捕らえ、対象を論理的かつに詳細に分析した後、合理的な研究計画を立ててきました。従って、本学において真理に向き合い、一見すると無駄に見える失敗

の繰り返しこそが、対象の本質を鋭く捉え、私達の客観性、論理性、合理性を研ぎ澄ますことができた大きな要因であったと思っております。

一方で、今世の中は、100年に一度と言われる世界的経済不況であります。また、学術研究では異分野が融合し、新たな研究領域が誕生する中、グローバルな研究競争が行われております。このような厳しい社会情勢の中、私達は今日をもって東京大学を巣立ち、社会へ出るようになります。本日、理学・工学・農学・医学・薬学・数理科学、情報理工学の各分野を修め、東京大学を巣立っていく修了生一同は、科学を通じて得た「方法」、そして「その展開」をもって本質を捉え、日本のリーダーシップとなる人材として活躍し、次の時代を創造していく覚悟であります。

最後に東京大学の学生として、素晴らしい環境の中で自己を磨くことができたのも、ひとえに諸先生方や職員の皆様、先輩方、友人、そして、なにより本日来ていただいておます御父母の皆様のおかげです。今日まで私達を支えて下さった方々に、修了生一同心よりお礼申し上げます。皆様の今後一層のご活躍と、東京大学のさらなる発展を祈念し、答辞とさせていただきます。

平成21年度学部入学式及び大学院入学式が4月13日(月)に、日本武道館において挙行された。午前 of 学部入学式には約3,200名の新入生と、その父母など約5,400名、合わせて約8,600名が、午後の大学院入学式には、約2,800名の新入生と、その父母など約3,100名、合わせて約5,900名が出席した。

9時50分、運動会応援部による演舞及び東京大学の歌「ただ一つ」のデモンストレーションがあり、音学部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュールンベルグのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、濱田純一総長はじめ理事(副学長)、理事、各学部長、各研究科長、各研究所長並びに来賓の経営協議会学外委員の佐々木元委員、榊田淳二委員がアカデミックガウンを着用のうえ登壇し、10時40分開式となった。

式はまず、音楽部管弦楽団、音楽部コールアカデミーにより、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、山影進教養学部長が式辞を述べた。式辞の後、本学卒業生で昨年ノーベル物理学賞を受賞された南部陽一郎シカゴ大学名誉教授の祝辞を横山広美理学系研究科准教授が披露した。その後、入学生総代 清水浩之さん(理科I類)による宣誓が行われた。最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、11時40分に式を終えた。

大学院入学式においては、学部入学式と同様に、13時25分から運動会応援部による演舞及び東京大学の歌「ただ一つ」のデモンストレーション、音学部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュールンベルグのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、濱田純一総長はじめ理事(副学長)、理事、各研究科長、各研究所長並びに来賓の中根千枝本学名誉教授がアカデミックガウンを着用のうえ登壇し、14時20分開式となった。

式は音楽部管弦楽団、音楽部コールアカデミーによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、生源寺眞一農学生命科学研究科長が式辞を述べた。式辞の後、本学名誉教授の中根千枝先生から祝辞をいただき、入学生総代 郭珉希さん(法学政治学研究科)による宣誓が行われた。最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、15時29分に式を終えた。

## 平成21年度東京大学入学式 総長 式辞



東京大学総長  
濱田 純一

東京大学に入学なさった皆さん、おめでとうございます。これから皆さんが、この東京大学で、充実した学生生活をお送りになることを、心より願っています。

そして、また、皆さんがいま、こうしてここにいることを可能にして下さった、皆さんのご家族はじめご関係の皆さまにも、心からお祝いを申し上げたいと思います。

今年の学部入学者は3,154名です。その内訳は、いわゆる文系の皆さんが1,312名、そして理系の皆さんが1,842名となります。また、後期日程での入学者は、97名です。男性と女性の割合は、およそ8対2、また、留学生の数は41名です。

これだけの数の皆さんに、これからの東京大学のもっとも若い力として、ご活躍いただくこととなります。

東京大学については、皆さんはすでに多くの情報を持っていらっしゃるかと思います。ただ、どうしても受験のための情報が中心だったでしょうから、この機会に改めて、これから皆さんが、その中で過ごすことになる、東京大学という組織の全体像を簡単にお話しておこうと思います。

東京大学の教員は、およそ4,000名近くいます。また、事務系・技術系の職員は約2,000名、そして在籍している学生の数は、およそ2万8千名で、学部学生の数と大学院学生の数が、ほぼ半々の状況です。東京大学の主なキャンパスは、本郷と駒場、そして柏の3つですが、さまざまな実験施設や観測施設、演習林などが、北海道から鹿児島まで、日本全国に存在しています。皆さんが旅行などをした時に、思いがけないところで東京大学の表札に出会うことがあるかもしれません。海外にも、さまざまな大学や研究機関との協力によって、何十もの研究の拠点があります。

東京大学では、このように、たくさんの教職員や学生が、さまざまな場所で、人間の存在や生命現象の仕組み、そして、宇宙や物質の成り立ちに対する根源的な研究、また、人々の社会生活を支える科学技術の開拓、あるいは社会的な制度や理論の構築など、幅広く多様な学術研究に携わっています。そして、それらの幅広く高度な研究を基盤として、未来の社会を担うべき人材が育成されています。

人材育成、つまり教育の内容については、カリキュラムの改善をはじめ、東京大学ではさまざまな努力を重ねてきました。

「知」の大きな体系や構造を見せる「学術俯瞰講義」、また、新しい課題にこたえる学部横断型の教育プログラムも開始されています。学術の確実な基盤をしっかりと身につける専門教育とともに、教養学部で行われているリベラルアーツ教育は、東京大学の大きな特徴です。また、こうした授業内容とともに、奨学制度やキャリアサポートの充実、さらに学生相談体制の整備なども、大学として近年とくに力を入れてきているところです。

このような教育環境を整えることによって、皆さんが持っている素晴らしい能力が、この東京大学において、さらに花開くことができるように、引き続き努力を傾けていきたいと考えています。

さて、時代はいま、激しい変動の時期、大きな変化の時期を迎えています。金融や産業が世界的規模で動揺する中で、人々の生活の基盤も大きく揺らいでいます。今日ここにいる皆さんのご家庭でも、経済的に大変な思いをなさりながら、皆さんを大学に送り出されているご家庭も少なくないことと思います。

こうした不安定な状況がいつまで続くのか、誰もが明確な回答を持っているわけではありません。また、とりあえず状況が一段落したとしても、それは、必ずしもこの危機の克服ということではないように思います。本当の「克服」というのは、こうした危機が二度と起こらないような社会の仕組みと人々の考え方を、新たに作っていくということです。

つまり、この危機が克服された後の世界は、危機以前の状態に戻るといっただけであってはならない、と思います。人類の知恵は、今回の危機から学び、誰もがより快適に安心して生活できる社会の姿を生み出していくことを可能とするはずで、それが出来ないのであれば、私たちの知識は何のためにあるのか、ということが問い直されなければなりません。

いまの時代は、これまで当たり前と思ってきたもの、いわば信用と信頼の体系が、がらがらと崩れている時代です。その意味で、この危機は、表層的なものではなく構造的なものです。こうした場面では、根本の部分から時代の課題にしっかりと

取り組み、「未来に向けた確かな指針」を示すことが求められます。たしかに、目の前の危機を回避するために応急的な対応は必要です。しかし、こうした時代だからこそ、目の前のことだけに囚われるのではなく、20年、50年、100年先の、日本と世界を見据えた指針が求められるように思います。そのような新しい世界を描き、それに至る道筋を提示することができるのが、学術であり、大学です。とりわけ東京大学のような大学は、これからの「世界を担う知の拠点」としての役割を果たしていかなければなりません。

ITやグリーン・テクノロジーといった分野をはじめとする新しい技術開発、医療や生命にかかわる研究の展開、また、新しい時代を支える経済的な仕組みや制度的な枠組みづくりなど、東京大学の学術が「未来」の構想にかかわるべきことは山のようにあります。また、今回の危機で、「金融界では、すでに危機の顕在化以前に、多くの人が危ない状況だと思っていた。それでも止めることができなかった」、というような説明を聞くことがあります。そこには、人間や社会のあり方への、本質的な洞察を必要とする課題も含まれているような気がします。

そして、何より、東京大学は人材育成の場です。現在の危機からの回復のためには、ある程度の時間がかかるでしょうから、今日ここに入学式を迎えられた皆さんは、卒業なさる時、おそらくは、まだ回復中の経済や社会のただ中に入り、その回復のための中核的な力としてご活躍いただかなければなりません。皆さんの力が、社会の「未来に向けた確かな指針」を生み出すのに与ることができるように、東京大学は皆さんを、しっかりと教育していきたいと考えています。

これまで、社会が数多くの課題を抱えていることに対して、東京大学は、新しい学術的な価値を創造し、また、多様な教育と研究のプログラムを構築することで応えてきました。こうした挑戦をつねに可能とする、学術的な基盤の充実と発展には、引き続き大きな力を注ぎたいと考えています。東京大学の学術のウィングというのは、現在と未来だけではなく過去にも広がっています。知の創造にとって、未来に開かれた知の可能性に対する果敢な挑戦とともに、歴史に鍛え上げられた知の蓄積に対する鋭敏な意識は、決定的な要素です。時代にもてはやされる学問だけではなく、多彩な学問分野を、時の制約を越えて確実に維持し発展させ続けることは、東京大学の誇るべき伝統であり、学術の基盤を確かなものとし、創造性を生み出す源となります。

現代のような厳しい時代に、いま改めて、東京大学は、こうした知的な底力を発揮しようと決意しているところです。

このように、時代と真正面から取組もうとしている東京大学

の、知的活動を担う主体の一人として、今日ここにいる皆さんには、ぜひ「タフ」な東大生として成長いただきたいと願っています。入学試験を経てここにいらっしゃる皆さんが、豊かな知識をもち、そして素晴らしい学習能力をもっているということ、いわゆる「頭の良さ」については、私はまったく心配はしていません。そして、東京大学でこれから皆さんに提供されるカリキュラムは、豊かな教養教育と、伝統に裏付けられた専門教育で構成されており、皆さんのそうした知的能力を、さらに成長させるものとなるはずで

す。しかし、そうした知識だけではなく、皆さんには「タフ」でもあってほしいと思うのです。この「タフ」という言葉には、いろいろな意味合いを込めているつもりです。

まずは、体力・健康です。当たり前のことのように、とにかく健康でないと、知的な緊張や知的な思考を長時間続けることが難しくなります。もちろん、そうした体力の不足を、強靱な精神力で乗り越えた、素晴らしい学者や学生を、私は何人も知っています。したがって、体力がないからといって知的であることをあきらめる必要はありませんが、知的な活動にも、それを支える体力・健康があるに越したことはありません。

ただ、今日、「タフ」であってほしいと申し上げることで、そうした体力以上に、社会的なコミュニケーションの場におけるたくましさの大切さを、強調しておきたいと思います。知識というのは、それ自体としてももちろん価値あるものですが、知識が強い力を発揮するのは、とくに、社会的なコミュニケーションを通じてです。人や社会を動かすことによって、知識は生命を持ちます。ある知識を自分で納得するだけでなく、人に伝えること、人を納得させることには、一つの力が必要です。そして、コミュニケーションの相手というのは、自分と同じ価値観や人生観の人ではないことが、むしろ普通です。この国際化の時代には、しばしば、使用する言語さえ異なることも珍しくありません。こうした差異を超えて、知識を伝え、受け取ることができる力、また、互いに論じ合うことができる力、それが「タフ」であるということです。

そして、このような「タフ」さの基盤にあるのは、たんに、コミュニケーションのテクニックあるいはスキルではありません。むしろ、人間的な力、人格そのものです。

私が若い頃、あるゼミで学んだときに、大変に印象深い言葉があったことを覚えています。それを教えて下さったのは、法哲学がご専門の非常に博識な先生でしたが、その先生が、ある著名な海外の法律学者の評価について、「才ありて徳なき」という言葉をお使いになりました。当時は気づかなかったのです

が、後にそれは、中国の明の時代の古典である、「菜根譚」の中で出てくる言葉と分かりました。この本は、いわゆる「清言の書」、物事の理を人生訓として書き記しているものです。少し悟りすぎたところがありますので、まだまだ若くて迷うことも必要な学生の皆さんには、今の年代で必ずしも一読をおすすめするというようなものではありませんが、そこには、次のような一節があります。文章は、漢学者であった今井宇三郎氏による読み下し文を使わせていただきますが、「徳は才の主にして、才は徳の奴なり。才ありて徳なきは、家に主なくして奴の事を用うるが如し。幾何か魍魎にして猖狂せざらん」というものです。つまり、「徳」、人格が、「才」、才能の主人公であって、才能は人格の召使いである。才能があっても人格のないものは、家に主人がいなくて、召使いが勝手気ままにふるまっているようなものである。どれほどに妖怪が現われて暴れ狂わないことがあろうか、といったような意味です。

ここで、「才」は、知識や知恵と置き換えてよいと思いますが、「徳」をどのようなものとして理解するかについては、もちろん、いろいろな解釈の仕方があるでしょう。私は、この「徳」を、ただ人柄がよいといったことではなく、広い意味での人格、幅広い人間的な力も含めたものと理解しておきたいと思います。そう理解いただくと、私がさきほど言わんとしたこと

の一端が、お分かりいただけるのではないかと思います。ぜひ、皆さんも、この「徳」ということの意味を、考え続けてみて下さい。それを考えること自体が、きっと皆さんを成長させることになると思います。皆さんが、東京大学での学生生活の中で、さまざまな出会いや触れあいを通じて、才もあり、徳もある人間として成長して下さることを、心より願っています。

さて、今日この場にお越しいただいている、ご家族の皆さま、ご関係の皆さまにも、一言申し上げておきたいと思います。

このところ、こうした席では、皆さまのお子さんは大学に入っていよいよ自立する時が来た、だから、もうあまり干渉しないようお願いする、ということがしばしばあります。また、マスコミでも、「子離れが出来ない親」、という構図がしばしば描かれることもあります。

しかし、今日、私は、皆さま方に、むしろ、これからもお子さんたちとしっかりとかわかって下さい、とお願ひしたいと思っています。もちろん、それは、いわゆる「過保護」という意味ではありません。お子さんたちが、これからタフな学生として育っていくために、その成長の過程に引き続きご協力をいただきたい、ということです。

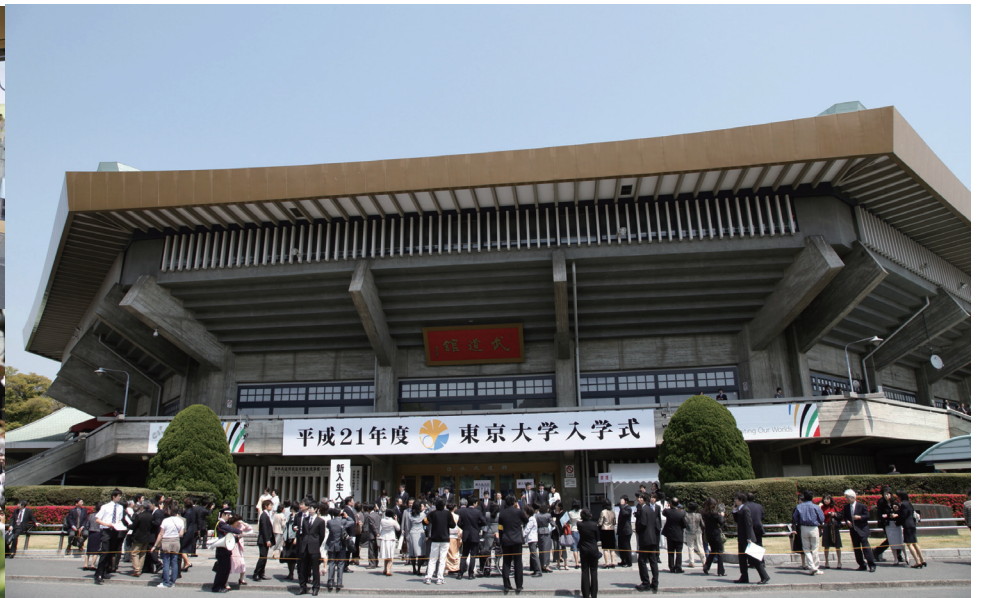
「獅子がわが子を千尋の谷に突き落とす」ということが必要な場合もありますが、タフな学生を育てるには、ただ厳しい環境にむやみに投げ込めばそれでよいというものではありません。必要なのは、厳しい環境よりも、むしろ多様な触れあいのある環境です。そうした触れあいの中には、もちろん厳しいものもあれば、温かいものも、またわくわくするものも、緊張を必要とするものもあります。そうした環境を、大学は、国際的な経験をはじめとして、いろいろな形で用意していきたいと思いますが、またご家庭などにおかれても、お子さんに、さまざまなチャンスを作ってあげていただければと思います。

東京大学が、これから学生の皆さんに提供する知的に豊かで多様な環境と、ご家族やご関係の皆さまのご協力との総合力が、タフな東大生を作りだしていきます。そうした意味で、今日ここにおいでになっている皆さま方も、東京大学という広大な知の共同体の一員でいらっしゃる、ということになります。これから、ぜひそのようなお気持ちと、また誇りをもって、東京大学の教育活動、研究活動をご覧いただき、そして、ご支援をいただければと思います。

知の創造と教育、社会との連携を通じて、東京大学は、日本の未来、世界の未来に対する公共的な責任を、いまこそ果たすべき時であると考えています。これからも東京大学は、豊かな構想力を備えた「世界を担う知の拠点」として、そのような責任を進んで果たし、社会からの信頼を確かなものとしていく決意でいます。

今日ここにいる新入生の皆さんが、こうした決意をもった私たちの仲間に入って下さることに、改めて歓迎の気持ちをお伝えして、式辞といたします。

<平成二十一年（2009年）四月十三日>



## 教養学部長 式辞



東京大学教養学部長  
山影 進

新入生の皆さん。

入学式にあたり、君たちが所属する教養学部の教職員を代表して、皆さんを歓迎するとともに、これから始まるキャンパスライフについて、そして皆さんに期待したい事柄について述べたいと思います。

東京大学は、リベラルアーツ教育を重視しています。このことは、君たち全員を駒場キャンパスにある教養学部に所属させて、6つの科類にまとめ、時間割上は4つに大別していることに現れています。進学振分けという制度にしたがって、君たちが教養学部を含む10学部に分かれるのは、2年生後半から3年生になるときにかけてです。東大では最初の2年間のカリキュラムを前期課程と呼び、後半2年間のそれを後期課程と呼んでいます。

東京大学がこのような制度を作ったのは、教育制度が抜本的に改正された60年前のことです。そのときに教養学部が設置されました。ですから今年は、教養学部創設60周年にあたります。60年前に教養学部におけるリベラルアーツ教育を重視するという理念を掲げて以来、その基本は現在にいたるまで変わっていません。

それでは、リベラルアーツ教育とはなんでしょうか。その起源は古代ギリシアにまで遡ると言われていますが、ヨーロッパでの1000年近い伝統と近代アメリカで発達した人材育成制度に根ざしています。戦前日本の旧制高等学校の名残もあります。このような歴史の地層の上に乗っている今日のリベラルアーツ教育は、君たちが社会の中で責任ある判断と行動のできる大人になることを手助けすることです。

言い換えると、権威に寄りかかるのでも、雰囲気呑まれるのでもなく、自分自身の頭で考え抜いて結論を出し、その結論にしたがって行動する智慧を身につけてもらうことです。安直にだれかを批判するのでも、だれかに責任転嫁するのでもなく、自分自身の責任を自覚した行動をとれる強い心を持ってもらうことです。

今ここで、リベラルアーツ教育とは何かを私なりに要約してみました。気がついたかも知れませんが、知識について全く触れませんでした。それは、リベラルアーツ教育に知識が重要でないと思っているからではありません。知識はもちろん重要です。無知では困ります。しかし大学で知識について学ぶのは、知識量を増やすためではないのです。知識という既に分かっていること自体を疑い、何がまだ分かっていないのかを知り、まだ分かっていないことにどう立ち向かうのかを考えるためなのです。このことは学問・研究にのみ当てはまることではありません。社会を少しでも望ましいものにしていこうと試みるとき、そして21世紀の人類が直面している課題に取り組もうとするとき、必要不可欠な態度なのです。

もう少し具体的に、リベラルアーツ教育の中で君たちに何が求められているのかをまとめてみましょう。これから皆さんは、高校時代とは異なる勉学態度が必要です。高校では既存知識を身につけることが求められ、受験参考書にあるような、きれいに整理され図式化された体系を覚えることを目指してきたことでしょうか。それとは対照的に、これからは既存の知識を疑い、新しい知識を生み出すための作法を身につけることが求められます。たとえば、講義を聴きながら、質問の用意をすることです。自分自身の考えを、論拠を示しながら論理的に発信することです。そして、ディスカッションという双方向のコミュニケーション作法を会得することです。

駒場キャンパスで教育を受ける環境も高校時代とは違ってくるでしょう。外国語や基礎科目の授業の一部はクラス指定ですが、かなりの部分は自分自身で時間割を作っていくこととなります。選択肢は選択に困るほど多岐にわたっています。空き時間を漫然と埋めるのか、それとも新しい刺激を求めて詳細にチェックするのかによって、前期課程が終わる頃には大きな違いになるでしょう。

駒場キャンパスのリベラルアーツ教育環境を活用できるかどうかは、皆さん自身にかかっています。是非、これからの勉学の日々を有意義に過ごしてください。もっとも、リベラルアーツ教育は前期課程の2年間で終わるわけではありません。駒場キャンパスの教育環境を最大限利用したいと思うなら、教養学部の後期課程が皆さん全員に対して開かれています。

大学は、皆さんが勉学し、学問に触れる場です。しかし、それだけに終始しては十分ではありません。リベラルアーツ教育は、社会の中で責任ある判断と行動のできる大人になることを手助けすることだと先ほど述べました。このことは、皆さんの人格形成に大学が深く関わっていることを意味しています。



君たちの多くは、年齢的に中途半端な大人だと思います。つまり、成人に近い権利と責任が生じる18歳と成人として扱われる20歳との間にいることでしょう。これから2年の間のどこかで、選挙権を持ち飲酒も許される成人になるのだと思います。皆さんは、未成年であってもすでに社会の一員として責任をとれる個人と見なされています。大学生になったことで、この責任から免れるわけではありません。キャンパスの中でも外でも、社会のルールを逸脱するような行動は厳に慎んでください。

人格形成という点では、これからの2年間は、法律的に成人となっていく過程にも増して、アイデンティティを確立する上できわめて重要な時期です。アイデンティティとは、自分が何者なのかということ、今までの比較的狭い人間関係を越えて、広く社会の中に位置づけ、それを自覚するとともに他者からも認められることです。他者との関係づけが重要なのです。新しい友人を作ったり、同好の士と趣味を追求したり、生きる目的を仲間と語り合ったりすることにも大学を使ってください。要するに人的ネットワークを広げて、自分自身のアイデンティティを確立する場として、駒場キャンパスを活用してください。

教養学部のある駒場キャンパスは、授業を受ける場であるのはもちろん、皆さんの人格形成の場でもあります。そのために、駒場キャンパスにはさまざまな施設が整備されつつあります。恵まれたリベラルアーツ教育を受け、人格的に成長する機会を与えられたことは、皆さんにとってきわめて幸運なことです。大事な人生の移行期間を駒場キャンパスで過ごせることは、東京大学に入学したことの最大のメリットかも知れません。

新入生の皆さんを歓迎するにあたって、今日は、リベラルアーツ教育とは何かを述べながら、君たちの自覚を促してきました。しかし明日からすぐには実行できるとは思っていません。皆さんは、新しい環境に飛び込んだばかりですから、最初はまごついたり、失敗したりするでしょう。毎日キャンパスに来て、駒場での生活に一日も早くなじんでください。もっとも、新しい環境はいやが上にもストレスを高めます。しかも、春は身体にさまざまな変化を引き起こす季節です。心身両面で体調を適切に管理することが大切ですが、変調を来したらすぐに適切な施設を訪れてください。駒場キャンパスの保健センター、学生相談所、ハラスメント相談所では専門家が皆さんに対応するために待機しています。

教養学部は、皆さんがこれから過ごす駒場キャンパスの教育環境だけでなく生活環境をなるべく良いものにしようと努めています。皆さんは、授業料を払ったのですから、良い教育を受ける権利があるのはもちろんです。しかし、多額の税金が注が

れていることも忘れないでください。それは、社会に貢献できる優れた人材になることへの期待であり、皆さんにはそれに応える義務があります。

新入生の皆さん。

皆さんやご家族にとって、東大入学はめでたいことでしょう。しかし私は、君たちが東京大学を十二分に活用し、自らを高めて社会に巣立つ日が来たときに、心からおめでとうということにします。

<平成二十一年（2009年）四月十三日>



## 南部陽一郎先生 祝辞

2008年ノーベル物理学賞受賞者  
シカゴ大学エンリコ・フェルミ研究所名誉教授

南部 陽一郎

私は72年前に駒場に入學した古い人です。日本を離れてからも57年になります。私の時代と現在とではあまりに事情が変わっており、皆さんは比較にならないほど幸福な環境に恵まれています。しかし新入生やその父兄の皆さんに私の経験と信念をご紹介するのも無意義ではないと思います。

私は東京で生まれましたが、育ったのは父の故郷であった福井市です。父は仏壇屋の長男として家業を継ぐべきはずだったのですが文学を志し、東京に出てきました。しかし関東大震災にあってやむなく故郷に戻り、高校の先生として一生を終えました。小説を書くのが念願であった父はよく私にこう言いました。お前はまず人間として立派な人格者にならなければいけない。偏屈な専門家になってはいけません。

私の時代には駒場キャンパスは一高と呼ばれ、東大とは独立の3年制度のカレッジでした。1学年に文科と理科とをあわせて300人、全寮制度をとって学生の自治をモットーとし、キャンパスには一般人は父兄でも誰でも、一年に一回の記念祭の日以外は入れてもらえませんでした。

私が一高で過ごした3年間は私の生涯でもっとも楽しかった時代だと今でも思っています。私が一高生活で経験した貴重なものは何かというと、まず共同生活です。軍国主義時代の田舎で育った私には大都会の生活はすべて珍しいことばかりでした。友人に誘われて初めて喫茶店というものに入ったとき、女の子がコーヒーの飲み方を教えてくれたのが忘れられません。

われわれは一部屋に8人ほど、始めは文科も理科も一緒に入れられ、夜は寝台をならべて一晩中語りあかす。勉強よりもまず自分とは何か、という問題を解決するのが先決でした。

読書のほうでは、倉田百三の「出家とその弟子」、漱石の小説、ドイツ哲学などがその頃の流行で、私はWindelbandの哲学入門を岩波文庫で真っ先に読みました。学科のほうでも、先生たちの講義よりも、友人たちから学んだことのほうが貴重だったと思います。すでに物理学をよく知っている友人が数人いて、私は彼らが問題を出し合って議論しているのをそばで聞いていて、物理の考え方をだんだん会得しました。

ことわっておきますが、その頃大学に進めるような人はいわゆるエリート族でした。エリートという言葉は今禁物かもしれません。

しかし東大に入るあなた方は誇りをもっていいはずですよ。ただ昔は今と比べて学ぶべきインフォメーションの量は非常に

少なかった。卒業すればまず職は保障されているから、心の余裕があったのは事実です。私はひと月さぼってTolstoyの「戦争と平和」を読んだ覚えがあります。大学をいったん卒業してから、もう一度一高に入りなおして寮生活を楽しむ者もいました。アメリカのカレッジも、いわゆるliberal education、すなわち社会に出てからでは暇がなくて学べないようなことを一般教養として身に付けるのが主な目的であるべきは現在にも当てはまるでしょう。

私がいままで感じてきたことですが、学校の成績と社会に出てからの成功度とは別物であると思います。勿論学業の成績は就職のために重要であり、知識の習得は自分のためであることは明らかです。しかし社会人として成功するためには成績では測れない個人的要素が大きな役割を果たしています。また、社会的成功のいかんにかかわらず、私の父が言ったように人間として立派な人、他人に尊敬され愛される人であることは、本人の価値を高めるものであると信じます。もう一つ言いたいのは人間の個性について。今日の日本の繁栄は教育のレベルが一律に高く、粒がそろっていることによるのが大きい。しかし人はボルトやナットのような規格品であってはつまらない。自分とは何か他人と違ったところをもっていることを自負し、お互いにそれを評価せねばなりません。これは専門の分野に入ったあとも当てはまることだと思います。

私の時代に欠けていたものは勿論たくさんあります。有名な寮歌「ああ玉杯」の中にあるように

「治安の夢にふけりたる榮華の巷低く見て」

一般社会とも隔絶し、むしろそれを誇りとしていました。これは絶対に良いことではない。社会的意識をもつことが大切なことはお分かりだと思います。

それでは皆さん、ようこそ！

<平成二十一年（2009年）四月十三日>



## 平成21年度大学院入学式 総長式辞



東京大学総長  
濱田 純一

東京大学の大学院に入学なさった皆さん、おめでとうございます。これから皆さんが、大学院という新しい世界で、充実した学生生活をお送りになることを、心より願っています。

そして、また、皆さんが、こうしてここにいることを可能にして下さった、皆さんのご家族はじめご関係の皆さま方にも、心からお祝いを申し上げたいと思います。

今年の大学院の入学者は、4,766名です。その内訳は、修士課程が2,968名、博士課程が1,383名、専門職学位課程が415名です。そのうち、男性と女性の割合は、ほぼ3対1になっています。また、入学者の中で留学生の数は500名ちょうど、つまり入学者の1割以上いらっしゃるということになります。

これだけの数の皆さんが、これから東京大学の大学院で、その専門的な知識をさらに深めるべく、勉学に励まれるということになります。

大学院における教育について、東京大学は、さまざまな形で、その充実を図ってきました。昨年度も、社会的ニーズを踏まえた新しい専攻の設置、また、経済やICT分野などでの大学院教育改革支援プログラムの実施、あるいは大学院レベルでの大学間学生交流の推進など、教育体制の充実・強化を行っています。また、博士課程大学院生に対する経済支援策を拡充し、奨学制度を着実に実施していくとともに、キャリアサポートや学生相談体制の整備なども、大学として近年とくに力を入れているところです。

このような教育環境を整えることによって、皆さんが持っている素晴らしい能力が、東京大学の大学院において、さらに花開くことができるように、引き続き努力を傾けていきたいと思っています。

さて、時代はいま、激しい変動の時期、大きな変化の時期を迎えています。金融や産業が世界的規模で動揺する中で、人々の生活の基盤も大きく揺らいでいます。こうした不安定な状況がいつまで続くのか、誰もが明確な回答を持っているわけではありません。また、とりあえず状況が一段落したとしても、

それは、必ずしもこの危機の克服ということではないように思います。本当の「克服」というのは、こうした危機が二度と起こらないような、社会の仕組みと人々の考え方を、新たに作っていくということです。

つまり、この危機が克服された後の世界は、危機以前の状態に戻るというだけであってはならない、と思います。人類の知恵は、今回の危機から学び、誰もがより快適に安心して生活できる、そうした社会の姿を生み出していくことを可能とするはずで、それが出来ないのであれば、私たちの知識は何のためにあるのか、ということが問い直されなければなりません。

いまの時代は、これまで当たり前とってきたもの、いわば信用と信頼の体系が、がらがらと崩れている時代です。その意味で、この危機は、表層的なものではなく構造的なものです。こうした場面では、根本の部分から時代の課題にしっかりと取り組み、「未来に向けた確かな指針」を示すことが求められます。たしかに、目前の危機を回避するために応急的な対応は必要です。しかし、こうした時代だからこそ、目前のことだけに囚われるのではなく、20年、50年、100年先の、日本と世界を見据えた指針が求められるように思います。そのような新しい世界を描き、それに至る道筋を提示することができるのが、学術であり、大学です。とりわけ東京大学のような大学は、これからの「世界を担う知の拠点」としての役割を、果たしていかなければなりません。

ITやグリーン・テクノロジーといった分野をはじめとする新しい技術開発、医療や生命にかかわる研究の展開、また、新しい時代を支える経済的な仕組みや制度的な枠組みづくりなど、東京大学の学術が「未来」の構想にかかわるべきことは山のようにあります。また、今回の危機で、「金融界では、すでに危機の顕在化以前に、多くの人が危ない状況だと思っていた。それでも止めることができなかった」、というような説明を聞くことがあります。そこには、人間や社会のあり方への、本質的な洞察を必要とする課題も含まれているような気がします。

そして、何より、東京大学は人材育成の場です。現在の危機からの回復のためには、ある程度の時間がかかるでしょうから、今日ここに入学式を迎えられた皆さんは、その課程を修了なさる時、おそらくは、まだ回復中の経済や社会のただ中に入り、その回復のための中核的な力としてご活躍いただかなければなりません。皆さんの力が、社会の「未来に向けた確かな指針」を生み出すのに与えることができるように、東京大学は皆さんを、しっかりと教育していきたいと考えています。

これまで、社会が数多くの課題を抱えていることに対して、東京大学は、新しい学術的な価値を創造し、また、多様な教育と研究のプログラムを構築することで応えてきました。こうした挑戦をつねに可能とする、学術的な基盤の充実と発展には、引き続き大きな力を注ぎたいと考えています。東京大学の学術のウィングというのは、現在と未来だけではなく過去にも広がっています。知の創造にとって、未来に開かれた知の可能性に対する果敢な挑戦とともに、歴史に鍛え上げられた知の蓄積に対する鋭敏な意識は、決定的な要素です。時代にもてはやされる学問だけではなく、多彩な学問分野を、時の制約を越えて確実に維持し発展させ続けることは、東京大学の誇るべき伝統であり、学術の基盤を豊かなものとし、創造性を生み出す源となります。

このような基盤の上に立って、現代のような厳しい時代に立ち向かう東京大学の役割を、私は、「知の公共性」という言葉で示しておきたいと思います。

「公共性」という用語は、とても長い歴史を背負った言葉です。人々の行動や組織の活動が、社会的な文脈の中に置かれる時、そこに「公共性」というテーマが発生することは、ある意味で当然です。同時に、この言葉は、なかなか扱いにくいものです。この言葉は、しばしば国家や権威と同じように見なされてきました。そうした意味で、個人や自由を尊ぶ人々からは、ときには消極的な評価を受けてきました。また、市場の価値や個人の自己責任が強調される時代には、「公共性」という言葉の意義が、いささか後退するよう見えることもあります。

ただ、いまの時代、改めて「公共性」というテーマと、真摯に向き合うことが必要となっているように、私は感じます。これは必ずしも、昨年来の金融危機や産業の動揺が理由というわけではありません。そうした危機によって状況が加速された面はあるとしても、それ以前から、この日本社会の中で次第に顕在化しつつあった課題です。

すなわち、いまの社会では、さまざまな場面で、人々が共有できる価値が失われつつある、ということが言われます。むしろ、「格差」が広がる中で、社会の分裂ということが危惧されています。いわゆる「総中流」の意識が崩れて、経済格差の拡大していることが、すでに今世紀への変り目の頃から議論になっていました。

また、地方と都市の格差、という課題もあります。地方自治をテーマにしている、あるジャーナリストが記していた表現が、大変印象的だったのですが、彼は、放射性廃棄物処理や限界集落の問題を事例にして、地方と都市が対立構造で描かれがちな

状況を、「共感が失われた共同体国家」という言葉で示しています。また、「都市と地方は、同じ日本という国内でありながら、別の世界に住む人々と認識され始めている」のではないかとともに述べています。

あるいは、あるメディア論の若い研究者は、日本の各地で海外からの労働者の移住によって、「住民の多国籍化、多文化化」の状況が起きていることを指摘し、「異なる言語・異なる文化・異なる労働環境・異なる生を生きる人々の間をつなぎ止め翻訳し調停する」ことが必要だと強調しています。

「公共性」の再構築といっても、何か論理操作によって新しいコンセプトを作れば、それでよいというものではありません。むしろ、これからの多様化する社会の中で、人々が共有できる価値を見出し、あるいは創り出し、その発見や創造のためのプロセスを動かし、そして、その価値を実現していくための手段を考えていく、ということが必要なのです。そこでは、新しい知恵が求められています。私は、その媒介をするのが、知の公共性、学術の公共性、大学の公共性であると考えています。

言うまでもなく、それは、「権威」としての公共性ということではありません。学術や大学が、ただ権威をもって一方的に未来の方向を指し示す、ということではありません。欧米的な語源での公共性、つまりパブリックとかエフフェントリッヒカイトといった言葉には、公開性というニュアンスが本来に備わっています。つまり、社会に開かれた議論のプロセスを通じて、人々が、未来に向けてお互いに共有できる価値と仕組みを作りだしていく、ということが求められていると思うのです。

実際、いまの社会の中で、新しい形で共通の価値や認識を見つけていこう、あるいは生み出していこうとする芽は、すでにあります。NPOをはじめ、さまざまな人々のボランティアな活動が、しばしばインターネットのような新しい通信手段も使って、空間的、あるいは時間的な制約を越えて、新しい公共性の世界を生み出しつつあることも、しばしば見られます。あるいは、もう少し制度的なことと言えば、この五月からスタートすることになる裁判員制度では、職業裁判官による、従来のある意味では権威的で専門的な司法というものを、人々により開かれた司法にしていくという意味で、公共性が権威的なものからより開放的なものに向かっていく時代の流れに、対応している印象を持ちます。

大学というものは、こうした新しい時代の公共性を生み出す、最高の装置です。大学は、新鮮な知恵と多様な価値、そして開かれた議論が支配している空間です。そしてまた、この空間は、決していわゆる「象牙の塔」として、閉ざされているわけでは

ありません。今日の大学、とりわけ大学院は、さまざまな形の社会との連携によって、その知の生命力を高めています。これから大学院に入学しようとする皆さんにも、今日のように、その基盤から激しく問い直されている時代に、未来に向けて人々が共有すべき価値とは何なのか、人々に幸せをもたらす知識や技術とは何なのか、といったことを、大学院における学生生活の中で、折に触れて考えていただければと思います。

もちろん、こうした「公共性」という問題意識だけで、大学院での勉学が行えるわけではありません。せっかく、学部時代よりはさらに、一段と奥深い研究を行おうとするわけですから、皆さんには、ぜひ、学問をするということの「わくわく感」を味わっていただきたいと思います。

どうすれば、そうした「わくわく感」をもつことが出来るのか。これには正直なところ、これだという明確な答えはありません。そこには、いろいろなきっかけがあるはずですが、

ただ、私自身の経験から一つ言えることは、「違和感」というものを大切にするとよい、そこに宝が眠っているかもしれない、ということです。要するに、あれ、何か変だ、どうしてだろう、どうなっているんだろう、という気持ちを大切にしたい、ということです。

私は、大学院を法学政治学研究科で過ごしましたが、その時に研究していた中心的なテーマは、「自由と制度」というものでした。それは、ドイツ語の言葉で、「インスティテューション・フライハイム」、つまり「制度的自由」という言葉に出会ったことがきっかけでした。自由と制度の組み合わせというのは、直感的に違和感のあるものです。自然法思想においては、個人の自由は、人間が生まれながらに持っているものであり、その意味では社会以前から存在しているものです。他方、制度は言うまでもなく、社会が出来てからの存在であるはずですが、

しかし、さきほどの言葉は、自由と制度を結びつけようとするのです。それがどのようにして可能なのか、私は大変困惑しました。それは、知的緊張を高めるものでした。そして、その解決は、「制度的自由」という概念が、法律の世界の中でも解釈論と哲学論の境界に、また、法律の世界と社会的現実の世界との境界に位置して組み立てられている、と気づくことによって、はじめてある程度の合点がきました。そこまで合点するために、私は、法律学の勉強だけでなく、国家学、社会学、そして人間学や文化学、さらには神学などの勉強も、少しばかりすることになりました。そうした幅広い勉強ができたのは、何より、最初に「違和感」を持ったからに他なりません。

ついでながら、この自由と制度の構造をつなぐ重要な鍵と

して、エラン・ヴィタル（生命の躍動）という概念があります。この言葉を、私は1920年代のフランスの公法学者の論文から学んで、当然にその学者の創作にかかる言葉だと思い込んでいました。

ところが、ほんの数ヶ月前、ある社会学の分野の先生から著書を送っていただき、それをばらばらとめくっていると、このエラン・ヴィタルという言葉が目に入って飛び上がりました。その言葉は、さきほどの公法学者の発明ではなく、同時代のフランスの哲学者の言葉だったのです。そして、実は、このエラン・ヴィタルというのは、少し哲学をかじった人であれば、おそらく皆さんの中にもいらっしゃると思いますが、ああそれはベルクソンの言葉だと、すぐ気づくほど有名なものです。その点では、この話は、30年前の私が、まだまだ勉強が足りなかった、未熟だったというだけのことです。しかし、同時に、勉強というものは一生続くものだという、ある意味では当たり前のことに、改めてちょっとした感動を覚えたのも事実です。

さて、今日は、新しく入学なさる皆さんのご家族の方々、ご関係の方々もたくさんおいでになっています。皆さまにも一言申し上げておきたいと思います。大学院生になる皆さんは、たしかに学部の4年を終了した、しっかりとした大人です。当然ながら、「過保護」にさせていただく必要はありません。完全に一人立ちしていくことが出来る皆さんたちです。

ただ、大学院での勉学、研究というのは、学部での勉強以上に、強い精神力と体力を必要とするものです。また、個人の内面での、孤独な、しばしば峻烈な作業となることも少なくありません。その点で、ご家族の皆さま、ご関係の皆さまには、どうか、そうした厳しい勉学に立ち向かおうとする大学院生の皆さんに、引き続き精神的なサポートをして差し上げていただければと思います。

東京大学は、いま、このように多くの皆さんが、ともに学術の可能性にチャレンジしていく仲間として、新たにくわわって下さることを、心から嬉しく思います。皆さんに、改めて東京大学としての歓迎の気持ちをお伝えして、式辞といたします。

<平成二十一年（2009年）四月十三日>

## 農学生命科学研究科長 式辞



東京大学大学院農学生命科学研究科長 生源寺 眞一

このたび東京大学大学院に入学された皆さんを心から祝福し、歓迎したいと思います。本日の入学式に臨んで、いくぶんの高揚感を覚えている方も多いことと思います。改めて自分自身の知的活動のスイッチがオンに切り替わったことを実感している方も少なくないでしょう。どうか今のフレッシュな気持ちを忘れることなく、修士課程あるいは博士課程の研究生生活を稔り豊かなものにしていただきたいと思います。

知識や方法について一定のスタンダードを身につけることが学部教育の基本であるのに対して、大学院の教育は、それぞれに異なる研究活動に取り組む皆さんの挑戦をリードし、サポートするところに本質的な特徴があります。言うまでもないことですが、研究の世界では、既存の成果に新たな知見を加えることに意味があり、研究者は未開の地を切り開くことに深い満足を感じるものです。したがって大学院のカリキュラムも、同じことを一斉に学ぶシステムというよりも、学生の個性的な研究能力を鍛え上げる点で、道場にたとえることができるシステムなのです。むろん入学したばかりの皆さんにとって、吸収すべき知識は少なくないでしょう。しかしながら知識の伝達についても、大学院教育はそれまでの学校教育とは異なっています。ひとことで表現するならば、その領域で何が分かっているかを伝えること、ここに知識伝授の面における大学院教育の眼目があります。

東京大学は真のユニバーシティとして、現時点でこの地球社会に存在する研究分野のほぼ全域をカバーしていると言ってよいと思います。したがって、本日ここに参集された皆さんの専門領域は、驚くほど広い範囲に及んでいるはずで、座席の周囲を見渡してみれば、自分の専門とはまったく異質の研究に挑戦する多数の同期生が列席しているというわけです。研究はある意味では孤独な営みです。ときには孤独に耐えがたい気持ちにかられて、逃げ出したくなることもあるかもしれませんが、けれども、そんなときには、研究分野を異にしなが、それぞれ

に力を尽くして取り組む同期の仲間がいることを思い起こしていただきたいと思います。

充実した大学院生活を送るためには、仲間の存在を感じ取ることと並んで、次の点をときおり意識することが大切です。それは、自分の取り組んでいる研究が日本社会の、そして地球社会の福祉の向上に対して、どのようなポジションから貢献できるかという点です。貢献の道筋を意識すること、つまりミッションの自覚は日々の研究活動を支える力になるはずで、むろん研究分野が異なれば、貢献の具体的なスタイルも異なることでしょう。ただ、学問の深化を通じた貢献という意味で、研究分野を超えて共通する要素もあるように思います。それは、大学における研究活動が、短期の利益を追い求めない点で、いわば我慢強い、ペイシャントな投資としての性格を帯び、その成果の利用がすべての人々に開かれている点で、公共財の創出としての意味合いを有することです。私自身の専門である食料の問題を例に少し説明を加えてみましょう。

食料問題を理解するためのキーワードのひとつに、フード・セキュリティという概念があります。日本では通常、食料安全保障と訳されています。国際紛争や大規模な災害といった不測の事態が発生した場合にも、人々が生き延びることができる食料が確保されている状態を表す概念です。食料安保は一種の保険にほかなりません。一方、フード・セキュリティは、途上国の貧困層を念頭に、すべての人々に毎日の食料が確保されている状態を意味する概念でもあります。むしろ国際的にはこの意味で使われるのが普通です。混乱を避けるためにも、こちらのフード・セキュリティには食料安保ではなく、たとえば食料保障といった日本語をあてるべきでしょう。

最新のデータによれば、近年の食料価格の高騰もあって、世界の栄養不足人口は10億人に近づいています。事態の悪化とともに、食料保障の意味でのフード・セキュリティの改善が、地球社会の課題として一段と重要性を増し、とりわけ途上国に対する国際協力に強い期待が寄せられています。ところで、食料をめぐる国際協力には三つの次元があります。ひとつは食料援助であり、食料そのものの移転です。もうひとつは途上国自身の食料供給力を増強するための援助であり、技術の開発・移転や灌漑などのインフラの整備がこのカテゴリーに含まれます。そして、第3に食料供給力の増強を担う人材づくりの支援であります。

三つのうちで大学が貢献できるのは、第2の研究開発と第3の人材づくりの面です。第2の研究開発に関して、とくに基礎的な研究をリードするのが大学です。農業の生産力をアップ

する研究開発にも、基礎から応用、そして現場への普及・移転に至るステップがあります。このうち広い応用範囲を持つ基礎的な知見の探求に、大学の研究者は心血を注いでいるのです。たとえば作物生理の解明であり、ゲノム情報の解析であります。こうした基礎研究は、既存の知見に安住することなく、新知見の探求に資源を投入する点で迂回的であり、確実な成果が約束されていない点ではリスクも伴っています。我慢強い投資なのです。むしろ新知見が獲得されるならば、それは公共財として地球社会が共有することになるわけです。

ところで、途上国のフード・セキュリティの改善は、貧困問題の緩和を通じて、国際社会の安定にも寄与するに違いありません。局地的な紛争やテロなどの暴力の背後には、食料問題が横たわっているケースが少なくないのです。この文脈で言うならば、途上国のフード・セキュリティの改善は、先進国のフード・セキュリティ、つまり食料安全保障のための負担を軽減することにもつながるのです。「情けは人の為ならず」という格言がありますが、格言の正しい意味において、「援助も人の為ならず」というわけです。

ひとつの例として、食料をめぐる大学の研究のポジションに触れたわけですが、皆さんのそれぞれの専門領域について日本の社会との結びつき、さらには地球社会との結びつきの回路を考えてみてください。なかには問題を鋭く批判的に抉り出すかたちで、社会と結びつく場合もあるはずです。こうした点を含めて、研究組織としての大学は、長い時間的視野に立った公共財の供給というミッションを担う存在として、社会から認知され、少なからぬ研究資源を負託されているのです。

このように縷々述べてきたわけですが、社会とのつながりはあまり意識していなかったという方もいると思います。知的興味の趣くままに、大学院に進んだという方も少なくないでしょう。それでよいと思います。寝食を忘れて没頭できるのは、

とにかく研究が面白くてたまらないからなのです。かくいう私自身がそうでした。ただ、理屈抜きに研究にのめり込んだという皆さんにも、これからは自分の研究を分かりやすく説明すること、とくに専門外の人々とのコミュニケーションを意識することを勧めたいと思います。大学人として社会に発信することが大切です。声高に叫ぶ必要はありません。むしろ静かな語り口が好ましいように思います。

研究の入口に立ったばかりの皆さんが、社会と直接向き合う機会はありません。けれども、専門知の社会への伝達を意識することは、みずからの仕事のレゾナントを広い視野から再認識することであり、皆さんにとっても決して無駄ではないと思います。同時に、手放して肯定できないところもあります。外部への発信能力の高さが、その分野に対する資源の追加的な投入につながる面も否定できません。そしてこの点にも関わって、これまで私は大学の研究が公共財を創出する我慢強い投資だと述べてきたわけですが、このように自認することが一面で危険なことだとも申し上げておきたいと思えます。大学のこうした自意識は、独善的で抑制のきかない資源の浪費を正当化する方向にも働きやすいからです。そうならないためにも、大学人として社会に対していねいに説明する責務を、みずからに課する必要があると思うのです。

百年に一度という形容が適切かどうかは別として、大きな危機のもとにある日本社会と地球社会は、本物の専門家の知恵と力を切実に必要としています。本日ここに栄えある入学式を迎えられた皆さんが、その潜在力を十二分に発揮され、深い専門知とぶれることのない思考力を備えた学究として成長されることを祈念し、私の式辞といたします。

皆さんの健闘を心から祈ります。

<平成二十一年（2009年）四月十三日>



## 中根千枝名誉教授 祝辞



東京大学名誉教授

中根 千枝

このたびの皆様の大学院入学を心からおよこび申し上げます。この機会に皆様のご参考になるかと存じ、私の経験などをふまえて、大学院時代について、述べてみたいと思います。

皆様は学部からの勉強をさらに深め発展させようと大学院にお入りになったことと思いますが、まず、大学院時代は学部の延長ではなく、質的とも云える程の違いがあることを喚起しておきたいと思います。学部での勉強は基本的には受身のものであったわけですが、大学院は皆様にとって、ご自分の研究を自発的に能動的に形づくっていく創造的な第一歩を踏み出すことになるわけです。この大学院の数年間というのは、大変大事な時期で、皆さんの将来の研究、またそれぞれの専門の仕事する上での土台づくりの時期なのです。

実際、この時期には皆様の関心は学部時代と比べて、飛躍的に広くなり、新しい要素にさまざまな面に対応されていくことでしょうか。たとえば、研究においては、学部時代にはふれなかったような内外の研究者の業績を貪慾に涉猟されるようになり、外国の学者の著書、論文により多く接するばかりでなく、中には留学などをとおして、専門分野や隣接分野の学者たちと交流することによって、自らの研究を更に新しく発展させる機会に恵まれる方々も少なくないと思います。専門によっては、修士論文、博士論文作成を念頭においた研究やフィールドワークを、日本だけでなく、外国でされるのもこの時代と云えましょう。つけ加えて云えば、二十代というのは、外国での経験が大変役立つものなのです。というのは、三十代以降に比べて、この時代は偏見が比較的少なく吸収力が最も旺盛であるからです。後でふりかえると、若さのため、ずい分思いきった行動がとれるものですし、思いがけなく一生を左右するような出来事や人との出会いがあったりするものです。

人によっては、自分の将来像を具体的に描いて、それに向かって一心に努力されることもあると思いますが、現実的には、

現在自分が最もしたいこと、そして出来ることを推進されるのがよいと思います。というのは、世界の動きをはじめ、身近な環境というものは、思いもよらぬ方向に変化したりして、それが個人にとって、よくも悪くも影響しうるからです。自分のしたいことを強くもって、こうした変化に対応できる柔軟性と忍耐をもち、自分をとりまく流れの中で、チャンスを見過ごさずに決断することです。このようにして、自分の将来に次第に具体的な方向づけができてきたりするのです。

次に、研究を進める上で、かかわってくる条件として二つのこと、すなわち、語学と社会環境について述べておきましょう。

日本人が外国語が不得手であるということは、自他共に認めるものですが、その一番大きな原因は、日本の日常生活において、外国語を話す人たちと接触する機会が非常に少なく、異なる言語になれていないということです。外国で育った人たちとか、特に語学が好きですぐマスターしてしまうといった特殊な才能に恵まれている人たちを除いては、皆苦勞するわけです。しかし、研究者として要求されることは、外国語で論文を読み、論文が書け、外国人と議論できるということでしょう。自然科学では、研究がより国際的にならざるを得ないために、殆どの研究者は英語その他の外国語で論文を発表するのが常となっていますが、人文・社会科学ではこの点大変おくらせています。多くは翻訳者に依存するわけですが、たまたま専門が同じ翻訳者の場合はまだよいのですが、そうではないと、必ずしも筆者の意図や意味がよくとらえられているとは限りません。したがって、自分の論文は少なくとも英語で発表できるようにしたいものです。また、会話にいたっては、もっと不得手といえましょう。殆ど試験英語できているために、意思疎通が中々うまくいかない、当人は間違いなく正確に話さなければならないと思うために、中々話せません。

実は、これらのことを可能にする基本的な語学力は学部時代までにできていることが望ましいのです。大学院では少し遅すぎるのですが、個々人の努力次第ということになります。そこで特定の時間をそれに当てて、短期に自分の研究にとって必要な語学力をつけることです。この時期を逃すと、ますます本業が忙しくなって、とてもむずかしくなります。このような努力をしておきますと、次第に国際的な交流が増えることによって、外国語になれていき、ある程度の語学によるハンデキャップは克服できるものと云えましょう。語学能力というものは、個人差がありますから、うまくできないといって卑下する必要も



ありませんが、不自由しない程度の力をもつことは、研究生活にとって快適であることは言うまでもありません。

ついで、もう一つの条件、社会環境について述べますと、大学院時代には研究もさることながら、学部時代よりも社会的に複雑な場面に遭遇し、いろいろな人、知人とのつき合いも増えてきますし、好きな人などもできたり、結婚のお話もあったり、一生のうちでもゆれ動く要素が少なくありません。つとめて禁欲的になる必要はありませんが、そうしたさまざまな人々との出会いも楽しんで、それにもまして、研究への情熱を続けてもつことが大切だと思っています。

このような社会環境に対して、どちらかというと、女性の方がマイナスを負うことが多いといえましょう。ご参考までに統計的にみますと、本業としての研究者や確立された組織の管理職についている日本の女性の割合は先進国などと比べて一番低いという事実があるのです。女性研究者の数は近年ずいぶん増えてきていますが、上位10%をとりますと、女性はまだわずか全体の10%位にすぎず、内閣で目標としている30%に遠く及んでいないのです。一般的に学部卒業位までは、女子は大変成績がよいのですが、大学院時代から男子に凌駕されていくという現象がはっきりとみられます。

日本ではまだ女性の研究者にとって、制度的に不利なこと、社会の理解が不十分であることがよく指摘されますが、私がアメリカやイギリスで大学院を担当した経験からみると、欧米やさらに中国、インドなども比べて、日本の女子の研究に対する心構えが弱いように見受けられます。私が接した外国の彼女らには個々人をとりまく障害に対する強さを感じるのです。日本の女子学生にも不利な条件に対して賢く対応する術(すべ)と努力をもってほしいと思います。もちろん、ご家族や先生の理解が得られる方々は言うまでもなく、個人としては常に秘められた強さと共に心の余裕をもって、ご自分の研究を進めていかれることを望みます。

女性のことに少しふれましたが、最後に私が申したいのは、本来、研究とは性差とは関係するものではなく、男女ともにおのれの信ずる道を進むことです。私が大学院に入った頃一戦後間もなくでしたが一と比べると、皆様ははるかに恵まれた環境にいられるわけです。現状は複雑、流動的ですが、あらゆる意味で、個人の能力を発揮する可能性は大きいのです。大学院時代を楽しく生甲斐のある日々を過ごされることを心から願って、私の祝辞といたします。

<平成二十一年(2009年)四月十三日>



(特集写真撮影：尾関裕士)

平成20年度第2回学生表彰「東京大学総長賞」授与式は、3月23日（月）17:00より小柴ホール（本郷キャンパス）にて実施されました。

第2回（春）は学業のみを対象として募集を行い、合計30件の推薦をいただき、学生表彰選考委員会の厳正なる審議の結果、12名の方々が総長賞受賞者として選出されました。授与式では、選考結果報告のほか、総長から表彰状と記念品の贈呈後、各受賞者から今回の受賞内容に関する映像を交えたプレゼンテーションが行われました。



受賞者全員との記念撮影



総長大賞を授与される  
高橋淳さん



総長大賞を授与される  
秋草俊一郎さん

また、プレゼンテーション終了後、本年度で実施3回目となった「総長大賞」受賞者の選考が別室にて行われました。その結果、本年度総長賞受賞者16件の中から、第1回（秋）受賞者の高橋 淳さん、第2回（春）受賞者の秋草俊一郎さんに「総長大賞」が授与されるとともに、第2回受賞者のファム・ナム・ハイさんに「総長特別賞」が授与されました。

授与式には受賞者関係者のほか、学部卒業生および総代・大学院修了生代表も多数参加し、祝福の場に華を添えました。

総長大賞 受賞者紹介



**高橋 淳**  
(農学部4年)

高橋氏は、将棋の個人戦において第60回学生名人戦で準優勝、第10回学生将棋選手権で優勝した。学生将棋の頂点である学生将棋選手権優勝は2度目であるが、2度の優勝は史上初の快挙である。団体戦では、本学将棋部を主将として率いた第3回毎日杯、第47回全日本学生団体対抗戦に関東代表として出場し、優勝。その結果、第20回リコー杯アマチュア将棋団体日本選手権に学生代表として出場し、優勝を飾り、団体戦三冠を達成した。また、将棋の普及、発展に関する社会貢献活動も積極的に行う等、その優秀な成績と活躍による功績が高く評価された。

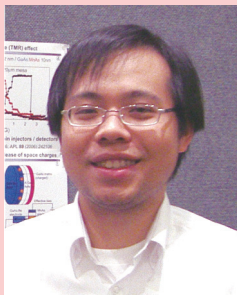


**秋草 俊一郎**  
(人文社会系研究科  
博士課程3年)

小説『ロリータ』で知られる亡命ロシア人作家ウラジーミル・ナボコフは、ロシア語・英語の両言語で作品を執筆しただけでなく、ロシア語・英語の古典および自作品を多く翻訳した「翻訳家」でもあった。秋草氏は翻訳家ナボコフに光を当てることで、その創作における二言語使用の特徴や、作品にしかけられた謎を解き明かすことに成功した。そのアプローチ的確さは、海外の学会誌に論文が掲載されるなど、国際的に注目されている。また、きわめて異例のことながら日本ロシア文学会と日本英文学会の双方で研究成果を精力的に発表し、文学研究における縦割りのディシプリンのあり方に一石を投じる学際的な研究活動が高く評価された。

■本件問合せ先: 本部学生支援グループ 宮内(内線:22514)

## 総長特別賞 受賞者紹介



**Pham Nam Hai**  
(工学系研究科  
博士課程3年)

ファム氏は、ナノスケール強磁性MnAs微粒子を含む半導体ヘテロ構造においてスピン依存伝導現象を実験的に明らかにするとともに、III-V族半導体ヘテロ構造中のMnAs微粒子がスピン

注入源および検出器になることなど、様々な新しい知見を示した。研究成果は、同氏を第1著者とする国際的な論文誌6編、国際会議13件などで発表され、スピントロニクスおよび電子工学の発展に寄与した。特に最近の研究ではスピン起電力と超巨大磁気抵抗効果を発見し、Nature誌に掲載された。これまでに、先端技術大賞、猪瀬学術奨励賞、SSDM Young Researcher Awardを受けており、外部からも高く評価されている。



総長特別賞を授与される  
ファム・ナム・ハイさん

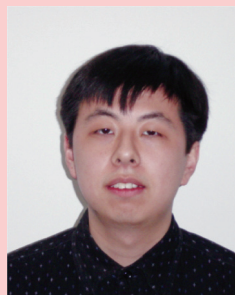
## 総長賞 受賞者紹介



**古戒 道典**  
(教養学部4年)

筋強直性ジストロフィーは複数の遺伝子の選択的スプライシングが異常になることによって発症する。これまで、20を超える遺伝子において異常が報告されてはいたが、患者が最も苦しむ

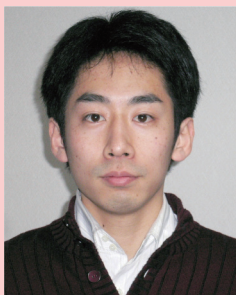
筋萎縮の原因となる異常は見つかっていないという現状があった。古戒氏は、この病気の患者の選択的スプライシングのパターンを網羅的に探索し、異常となっている遺伝子の候補を抽出した。さらに、候補の1つであり筋形成に関わるマイオメシン1について詳細な解析を行い、この遺伝子が筋強直性ジストロフィーにおける新たな異常遺伝子であることを明らかにした。この異常は筋萎縮の原因である可能性があり、効果的な治療標的となることが期待される。



**穂坂 秀昭**  
(理学部4年)

穂坂氏は、理学部数学科進学内定後の第4学期以降の2年半の期間において、理学部共通科目として位置づけられている「アクチュアリー・統計プログラム」及び「生物情報科学学部教育プロ

グラム」の他に教職課程科目を極めて優秀な成績で取得した。これらの成果は、同氏の大変な情熱とたゆまぬ努力によるものである。なお、「数学講義」とよばれるセミナー形式の授業において、大学院修士課程相当の高度なテキストを用い、「表現論」の分野を学習し、極めて明晰なプレゼンテーションにより高く評価された。大学院進学後の活躍が大いに期待される。



**川島 尚之**  
(医学部6年)

川島氏は、医学部医学科在学中に優秀な成績を修める一方で、学部生のためのフリークォーター制度を活用し4年間にわたり神経生化学の研究に従事した。その過程で、シナプス活動に反応して神経細胞の遺伝子発現を引き起こす

ゲノム配列SAREを発見し、その成果を世界に先駆けて米国科学アカデミー紀要に発表した。SAREは複数の主要転写因子をわずかに数十塩基の中に結合させ、脳が受ける多様なシグナルを統合する画期的なDNA配列として注目されている。この発見により長期記憶の成立過程を単一細胞レベルでリアルタイムに観察定量することが実現可能となったため、現在複数のモデル動物を用いた国際共同研究がスタートしつつある。記憶メカニズムの全貌解明、またアルツハイマー病等の記憶障害の理解に向けて大きく貢献するものと期待される。



**松本 麻美**  
(教育学研究科  
修士課程2年)

「子供の参加」は、2003年「世界子供白書」にあるように、国際機関が子供に関するプロジェクトを企画実施する上で重要事項として位置づけられる。しかし現実

に「子供の声」を聞き取るというのは非常に困難なことである。松本氏は、インドにおける「子供の自立」支援NGO活動や、ユニセフ・ガーナでのプログラム企画実施という豊かな現地経験に基づき、修士論文において「アクティヴ・コネクター」の役割の重要性を指摘した。これは留学経験者等、現地の子供達の言語文化を理解すると同時に国際機関の目的や活動も理解する、二重言語・二重文化所有者が果たしうる役割である。社会活動と現地調査を、見事に学術的成果に結実させたと評価された。

## 総長賞 受賞者紹介



**後藤 佑介**  
(工学系研究科  
修士課程2年)

後藤氏は、細胞内の反応を追跡するために、リアルタイム観察・世界最高水準の感度・誤評価ゼロを兼ね備えたイメージングツールを世界で初めて開発した。このツールに

より、これまで不可能であった遺伝子輸送機構の解明や未解明の生体分子機能を分析し得る可能性が生まれ、再生医療やテーラーメイド創薬の実現に大きく前進する。その研究成果は国際的にも高く評価され、これまでに筆頭著者として3報、共著者として2報の英文論文が国際雑誌に受理されている。また、本学と連携している台湾工業技術研究所からの短期滞在研究員を直接指導するなど、国際交流への積極的な貢献と熱心な研究姿勢が高く評価された。



**高木 穂香**  
(薬学系研究科  
修士課程2年)

$\gamma$ セクレターゼは、アルツハイマー病の病因タンパク質アミロイド $\beta$ を作り出す酵素であり、根本治療薬開発においてターゲットタンパク質として注目されている。高木氏は、 $\gamma$ セ

クレターゼの詳細な構造をシステイン置換法(SCAM)と呼ばれる手法を用いて解明し、 $\gamma$ セクレターゼ阻害剤の分子機構を明らかにした。この研究成果は、治療薬開発において重要な情報をもたらすものであるとして、国際アルツハイマー病学会において多くの研究者や製薬企業からの耳目を集め、アルツハイマー病研究者のためのネットコミュニティAlzforumにおいて高い評価を得た。このような業績および熱心な研究姿勢が高く評価された。



**阿野 泰久**  
(農学生命科学研究科  
修士課程2年)

阿野氏は、BSE等のプリオン病における食の安全対策の観点から、汚染した臓器がヒトや動物に食される際の感染経路を解明するため、プリオン経口感染時のモデルを作

成し、病原体の体内への侵入および動態機構を解析した。その結果、腸上皮への侵入が離乳前後で変化することを見出した。この成果は乳幼児が感染し易い現象を解明した点で、特に優れた業績といえ、今後の発病予防対策に大きな貢献をなすものと期待される。同氏は、修士課程在籍時に主著5報、連名も含めると8報の学術論文を行い、かつ日本学術振興会 International Training Programにより、英国エジンバラ大学での留学を経験した。また、所属専攻の修士論文発表においても、ただ一人ほぼ満点近い評点を得たことなどが高く評価された。



**渡邊 容子**  
法学政治学研究科  
(法曹養成専攻)3年

法学政治学研究科法曹養成専攻(専門職学位課程・法科大学院)において、成績評価はA+、A、B、C、Fの5段階であり、A+は全体の概ね5%まで、AはA+を含めて概ね

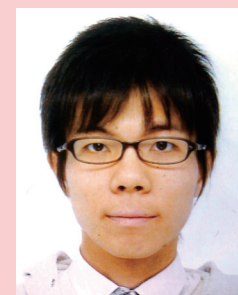
30%までと定められており、実際にも成績評価は極めて厳格になされている。渡邊氏の成績はA以上が85%以上(うちA+が57%)という極めて優れたものであり、かつ専門職学位課程修了者の中で最優秀の学生である。同氏は本学文学部、人文社会系研究科修了後、社会人生活を経て法学未修者として法科大学院に入学後、初めて法律学を学ぶようになったにもかかわらず、わずか3年間で極めて優秀な成績を修めたことが高く評価された。



**金 尚宏**  
(理学系研究科  
博士課程3年)

金氏は、我々の体内時計の時刻を操る“時計ホルモン”としてタンパク質因子TGF- $\beta$ やアクチビンが重要であることを発見した。さらに、斬新な解析手法を駆使し、体内時計の

時刻合わせの細胞内情報伝達系を世界で初めて詳細に解明した。体内時計の乱れは睡眠障害、うつ病、癌や代謝異常などと深く関与しており、本成果は様々な疾患の治療へ応用が期待される。一流誌に発表された研究成果は論文評価システムで最高評価を受けただけでなく、同氏は学会などでの講演依頼や科学誌から総説執筆の招待を受けるなど、極めて高いインパクトを世界に与えた。いくつもの共同研究を先導する同氏の精力的な研究姿勢は、本学学生の範となるもので高い評価を受けた。



**浅沼 大祐**  
(薬学系研究科  
博士課程1年)

がんは1981年以来日本人の死因第1位の疾患であり、微小がんの正確な検出法の開発は医療における喫緊の課題となっている。浅沼氏は、ある種のたんぱく質ががん細胞

に取り込まれ、酸性細胞小器官へと輸送されることに着目し、がん細胞を特異的に発光させる蛍光プローブの開発に成功した。この手法により、0.1mmオーダーのがんまで可視化され、がん診断で「誰もが名医になれる」と期待される。本成果は国際科学誌Nature Medicineに発表され、同氏の研究は国内外の学会においても高い評価を受けるなど学問的に高度であり、また、基礎科学と国民医療をつなぐ成果として本学の叡知を社会還元する観点でも高く評価された。

# NEWS

## 一般ニュース

### 部局長の交代

平成21年4月1日付で、下記のとおり部局長の交代がありました。新部局長をご紹介しますとともに、退任された部局長のご挨拶を掲載します。

	新部局長	前部局長
大学院医学系研究科長・医学部長	清水孝雄	(再任)
医学部附属病院長	武谷雄二	(再任)
大学院人文社会系研究科長・文学部長	小松久男	立花政夫
大学院理学系研究科長・理学部長	山形俊男	山本正幸
大学院農学生命科学研究科長・農学部長	生源寺眞一	(再任)
大学院教育学研究科長・教育学部長	武藤芳照	金子元久
大学院数理科学研究科長	大島利雄	桂 利行
大学院新領域創成科学研究科長	大和裕幸	雨宮慶幸
大学院情報理工学系研究科長	下山 勲	(再任)
大学院情報学環長・学際情報学府長	石田英敬	吉見俊哉
医科学研究所長	清木元治	(再任)
地震研究所長	平田 直	大久保修平
東洋文化研究所長	羽田 正	関本照夫
社会科学研究所長	末廣 昭	小森田秋夫
生産技術研究所長	野城智也	前田正史
史料編纂所長	加藤友康	横山伊徳
分子細胞生物学研究所長	秋山 徹	宮島 篤
海洋研究所長	西田 睦	(再任)
附属図書館長	古田元夫	西郷和彦

## 新部局長紹介

### 大学院人文社会系研究科長・文学部長

小松 久男 教授

(任期：平成21年4月1日～平成23年3月31日)



昭和49年3月

東京教育大学文学部卒業

昭和52年3月

本学大学院人文科学研究科修

士課程修了

平成8年4月

大学院人文社会系研究科教授

所属：アジア文化研究専攻東洋史学講座

専門分野：中央アジア史

研究内容（代表的な著書や論文等）：

『革命の中央アジア：あるジャディードの肖像』東京大学出版会、1996年

*Islam in Politics in Russia and Central Asia (Early Eighteenth to Late Twentieth Centuries)*, Kegan Paul: London-New York-Bahrain, 2001（共編）

『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年（共編）

『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会、2003年（共編）

『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005年（共編）

『イブラヒム、日本への旅：ロシア・オスマン帝国・日本』刀水書房、2008年

### 大学院理学系研究科長・理学部長

山形 俊男 教授

(任期：平成21年4月1日～平成23年3月31日)



昭和46年6月

本学理学部地球物理学科卒業

昭和48年3月

大学院理学系研究科地球物理学専攻修士課程修了

昭和54年6月

九州大学応用力学研究所

助教授

平成6年4月 本学大学院理学系研究科地球惑星物理学専攻教授

所属：地球惑星科学専攻大気海洋科学講座

専門分野：海洋物理学、気候力学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

1) Yamagata, T., 1982 : On Nonlinear Planetary Waves : A Class of Solutions Missed by the Traditional Quasi-Geostrophic Approximation. J. Oceanogr. Soc. Jpn., 38 (4), 236-244.

2) Yamagata, T., and Y. Masumoto, 1989 : A Simple Ocean-Atmosphere Coupled Model for the Origin of a Warm El Niño Southern Oscillation Event. Phil. Trans. Roy. Soc. Lond., A329, 225-236.

- 3) 山形 俊男、1996：岩波講座地球惑星科学 第11卷〈気候変動論〉(共著)、岩波書店。
- 4) Saji, N. H., B. N. Goswami, P. N. Vinayachandran, and T. Yamagata, 1999：A Dipole Mode in the Tropical Indian Ocean. *Nature*, 401, 360-363.
- 5) Ashok, K., S. K. Behera, S. A. Rao, H. Weng, and T. Yamagata, 2007：El Niño Modoki and its Possible Teleconnection. *J. Geophys. Res.*, 112, C11007, doi:10.1029/2006JC003798.

### 大学院教育学研究科長・教育学部長

武藤 芳照 教授

(任期：平成21年4月1日～平成23年3月31日)



昭和50年  
名古屋大学医学部卒業  
昭和55年  
名古屋大学大学院医学研究科  
修了  
昭和56年  
本学教育学部助教授

平成5年 教育学部教授

平成7年 大学院教育学研究科教授

所属：総合教育科学専攻・身体教育学講座

専門分野：身体教育学、健康・スポーツ科学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

『水泳の医学』ブックハウスHD、1982

『子どものスポーツ』東京大学出版会、1989

『疲労骨折』文光堂、1998

『武藤教授の転ばぬ教室-寝たきりにならないために-』暮しの手帖社、2001

『患者指導のための水と健康ハンドブック-科学的な飲水から水中運動まで-』日本医事新報社、2006

### 大学院数理科学研究科長

大島 利雄 教授

(任期：平成21年4月1日～平成22年3月31日)



昭和46年6月  
本学理学部数学科卒業  
昭和48年3月  
大学院理学系研究科数学専攻  
修士課程修了  
昭和48年4月  
理学部助手

昭和52年4月 教養学部助教授

昭和56年4月 理学部助教授

昭和62年4月 理学部教授

平成4年4月 大学院数理科学研究科教授

所属：数理科学専攻 数理構造論大講座

専門分野：代数解析学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

M. Kashiwara, A. Kowata, K. Minemura, K. Okamoto,  
1) T. Oshima and M. Tanaka, "Eigenfunctions of invariant differential operators on a symmetric space", *Ann. of Math.* 107(1978), 1-39.

2) T. Matsuki and T. Oshima, "A description of discrete series for semisimple symmetric spaces", *Advanced Studies in Pure Math.* 4(1984), 331-390.

3) T. Oshima, "A quantization of conjugacy classes of matrices", *Advances in Math.* 196(2005), 124-146.

4) T. Oshima, "Completely integrable quantum systems associated with classical root systems", *SIGMA* 3(2007), 071, 50 pp.

5) 小林俊行、大島利雄「Lie群と表現論」、岩波書店、2005, 610 pp.

### 大学院新領域創成科学研究科長

大和 裕幸 教授

(任期：平成21年4月1日～平成23年3月31日)



昭和52年3月  
本学工学部船舶工学科卒業  
昭和54年3月  
大学院工学系研究科船舶工学  
専門課程修士課程修了  
昭和57年3月  
大学院工学系研究科船舶工学  
専門課程博士課程修了

平成9年7月 大学院工学系研究科教授

平成11年4月 大学院新領域創成科学研究科教授

所属：人間環境学専攻／人工環境学講座／産業環境学  
専門分野：産業環境学、船舶設計、交通システム

研究内容(代表的な著書や論文等)：

1) 坪内孝太, 大和裕幸, 稗方和夫, オンデマンドバスシステムの実証実験による評価, 運輸政策研究, vol.10, no.4, pp.11-20, 2008.

2) 中田圭一, 大和裕幸, 『人工環境学 環境創成のための技術融合』, 東京大学出版会, 2006.

3) 稗方和夫, 大和裕幸, 安藤英幸, 榎本昌一, 中澤崇, ロジアナカモンサンピルン, 尾石航, セマンティックウェブ技術による設計プロセス記述と設計支援システムの開発, 日本船舶海洋工学会論文集, vol.4, pp.81-88, 2006.

4) 大和裕幸, 角田智弘, 小山健夫, 伏見彬, 数理計画手法によるコンテナ船航路の設計手法について, 日本造船学会論文集, vol.184, pp.611-619, 1998.

5) 小山健夫, 大和裕幸, 立久井正和, 上野善信, プロセスプランニングエキスパートシステムの研究, 日本造船学会論文集, vol.168, pp.639-643, 1990.

## 大学院情報学環長・学際情報学府長

### 石田 英敬 教授

(任期：平成 21 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日)



昭和55年 3 月

本学文学部卒業

昭和58年

パリ第十大学ナンテール大学院近代文学研究科修士課程修了(文学修士)

平成元年

パリ第十大学ナンテール大学院博士課程修了(人文科学博士)

昭和60年 3 月 本学大学院人文科学研究科  
修士課程修了

平成 8 年 4 月 大学院総合文化研究科教授

平成12年 4 月 大学院情報学環教授

所属：大学院情報学環・学際情報学府

専門分野：記号学・情報記号論

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 1) 『知のデジタル・シフト』(編著)、弘文堂、2006
- 2) 『記号の知/メディアの知 日常生活批判のためのレッスン』(単著)、東京大学出版会、2003
- 3) 『シリーズ言語態 1 言語態の問い/5 社会の言語態』(共編著)、東大出版会、2001-2002
- 4) 『ミシェル・フーコー思考集成 I～X 巻』(共編訳)、筑摩書房、1998-2002
- 5) LA FORMATION DE LA POESIE DE MALLARME (パリ第十大学博士学位論文 1989)

## 地震研究所長

### 平田 直 教授

(任期：平成 21 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日)



昭和53年 3 月

本学理学部地球物理学科卒業

昭和55年 3 月

大学院理学系研究科地球物理学専攻修士課程修了

昭和57年 6 月

大学院理学系研究科地球物理学専攻博士課程退学

昭和60年 4 月 理学博士(東京大学)

平成10年 4 月 地震研究所教授

所属：地震火山噴火予知研究推進センター

専門分野：観測地震学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

Sato, H., N., Hirata, K. Koketsu, D. Okaya, S. Abe, R. Kobayashi, M. Matsubara, T. Iwasaki, T. Ito, T. Ikawa, T. Kawanaka, K. Kasahara, S. Harder (2005), Earthquake Source Fault Beneath Tokyo, Science, 309, 5733, 462-464.  
Hirata, N., H. Sato, S. Sakai, A. Kato, E. Kurashimo

(2005), Fault system of the 2004 Mid Niigata Prefecture Earthquake and its aftershocks, *Landslides*, 2, 2, 153-157.

Hirata, N. (2004). Past, current and future of Japanese national program for earthquake prediction research, *Earth Planets Space*, 56, 8, xliii-l.

平田直 (2002), 地殻ダイナミクスと地震発生(分担、菊地正幸編), 朝倉書店.

Hirata, N. et al.(1996), Urgent Joint Observation of Aftershocks of the 1995 Hyogo-ken Nanbu Earthquake, *J. Phys. Earth*, 43, 317-328.

## 東洋文化研究所長

### 羽田 正 教授

(任期：平成 21 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日)



昭和51年 3 月

京都大学文学部卒業

昭和53年 3 月

京都大学大学院文学研究科修士課程修了

昭和58年 6 月

イラン学第 3 期博士(パリ第 3 大学)

平成 9 年 9 月 本学東洋文化研究所教授

所属：西アジア研究部門

専門分野：歴史学(世界史)

研究内容(代表的な著書や論文等)：

Asian Port Cities 1600-1800. Local and Foreign Cultural Interactions (editor), NUS Press

Singapore & Kyoto University Press, 2009

『東インド会社とアジアの海』(講談社、2007 年)

『イスラーム世界の創造』(東京大学出版会、2005 年)

『勲爵士シャルダンの生涯』(中央公論新社、1999 年)

『モスクが語るイスラム史：建築と政治権力』(中央公論社、1994 年)

## 社会科学研究所長

### 末廣 昭 教授

(任期：平成 21 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日)



昭和49年 3 月

本学経済学部卒業

昭和51年 3 月

大学院経済学研究科応用経済学専攻修士課程修了

平成 7 年 4 月

社会科学研究所教授

所属：比較現代社会部門 地域社会研究分野

専門分野：アジア経済社会論

研究内容(代表的な著書や論文等)：

Capital Accumulation in Thailand 1855-1985 (1989 年)

Catch-up Industrialization: The Trajectory and

Prospects of East Asian Economies (2008 年)  
『二〇世紀システム第4巻 開発主義』(編著 1998 年)  
『キャッチアップ型工業化論: アジア経済の軌跡と展望』  
(2000 年)  
『ファミリービジネス論: 後発工業化の担い手』(2006  
年)

### 生産技術研究所長

#### 野城 智也 教授

(任期: 平成 21 年 4 月 1 日~平成 24 年 3 月 31 日)



昭和55年 3 月  
本学工学部建築学科卒業  
昭和60年 3 月  
大学院工学系研究科建築学専  
攻博士課程修了  
平成13年 4 月  
生産技術研究所教授  
所属: 人間・社会系部門

専門分野: 建築生産・プロジェクト  
研究内容 (代表的な著書や論文等):  
『持続可能性の向上に資する建築生産のあり方に関する  
研究』(2006 年 日本建築学会賞受賞)  
『実践のための技術倫理: 責任あるコーポレートガバナ  
ンスのために』(共著、東大出版会、2005 年)  
『サービスプロバイダー 都市再生の新産業論』(彰国社、  
2003 年)  
『サステナブル建築の政策デザイン』(共著、慶応義塾大  
学出版会、2002 年)  
『都市この小さな惑星の』(共訳、鹿島出版会、2002 年)

### 史料編纂所長

#### 加藤 友康 教授

(任期: 平成 21 年 4 月 1 日~平成 23 年 3 月 31 日)



昭和49年 3 月  
本学文学部第2類(史学)卒業  
昭和52年 3 月  
大学院人文科学研究科国史学  
専門課程修士課程修了  
平成 8 年 4 月  
史料編纂所教授  
所属: 古代史料部門

専門分野: 日本古代史  
研究内容 (代表的な著書や論文等):  
『古代文書論—正倉院文書と木簡・漆紙文書』(共編著、  
東京大学出版会)  
『摂関政治と王朝文化』(編著、吉川弘文館)  
『世界各国史 1 日本史』(共著、山川出版社)

### 分子細胞生物学研究所長

#### 秋山 徹 教授

(任期: 平成 21 年 4 月 1 日~平成 23 年 3 月 31 日)



昭和50年 3 月  
本学農学部卒業  
昭和56年 3 月  
大学院医学系研究科博士課程  
修了  
平成 6 年 7 月  
大阪大学微生物病研究所教授

平成 10 年 4 月 本学分子細胞生物学研究所教授

所属: 分子情報研究分野

専門分野: 分子細胞生物学、分子腫瘍学

研究内容 (代表的な著書や論文等):

Nakamura, T., Hayashi, T., Nasu-Nishimura, Y.,  
Sakaue, F., Okabe, T., Ohwada, S., Matsuura, K. and  
Akiyama. PX-RICS mediates ER-to-Golgi transport of  
the N-cadherin/  $\beta$ -catenin complex. Genes Dev. 22,  
1244-1256, 2008

Kawasaki, Y., Sato, R. and Akiyama, T. Mutated APC  
and Asef are Involved in Migration of Colorectal  
Tumor Cells. Nature Cell Biol. 5, 211-215, 2003

Jimbo, T., Kawasaki, Y., Koyama, R., Sato, R., Takada,  
S., Haraguchi, K. and Akiyama, T. Identification of link  
between the Tumor Suppressor APC and the Kinesin  
Superfamily of Proteins. Nature Cell Biol. 4, 323-327,  
2002.

Kawasaki, Y., Senda, T., Ishidate, T., Koyama, R.,  
Morishita, T., Iwayama, Y., Higuchi, O., and Akiyama,  
T. Asef, a Link between the Tumor Suppressor APC  
and G-protein Signaling. Science 289, 1194-1197, 2000

Hamada, F., Tomoyasu, Y., Takatsu, Y., Nakamura, M.,  
Nagai, S., Suzuki, A., Fujita, F., Shibuya, H., Toyoshima,  
K., Ueno, N. and Akiyama, T. Negative regulation of  
Wingless signaling by D-Axin, a Drosophila homologue  
of Axin. Science 283, 1739-1742, 1999



## 附属図書館長

古田 元夫 教授

(任期：平成21年4月1日～平成24年3月31日)



昭和49年3月

本学教養学部卒業

昭和51年3月

大学院社会学研究科国際関係  
論専門課程修士課程修了

昭和53年3月

大学院社会学研究科国際関係  
論専門課程中途退学

平成2年11月 学術博士(東京大学)  
平成7年4月 教養学部教授  
平成8年4月 大学院総合文化研究科教授  
平成13年2月 大学院総合文化研究科長・教養学部長  
(～平成15年2月)  
平成16年4月 副学長(～2005年3月)  
平成17年4月 国立大学法人東京大学理事・副学長(～  
平成19年3月)  
平成19年4月 大学院総合文化研究科教授 総長室顧  
問(～平成21年3月)  
平成20年4月 学生相談ネットワーク本部長  
所属：大学院総合文化研究科地域文化研究専攻多元世界  
解析大講座  
専門分野：ベトナム地域研究  
研究内容(代表的な著書や論文等)：  
・『ベトナム人共産主義者の民族政策史』大月書店、  
1991年  
・『歴史としてのベトナム戦争』大月書店、1991年  
・『ベトナムの世界史』東京大学出版会、1995年  
・『ホー・チ・ミン』岩波書店、1996年  
・『アジアのナショナリズム』世界史リブレット42、山  
川出版社、1996年

## 部局長退任の挨拶

### 退任にあたって

前大学院人文社会系研究科長・文学部長  
立花 政夫

平成19年度から2年間、人文社会系研究科長・文学部長を務めました。一教員として東大で研究教育にいそしんでいる間は、よって立つ基盤は自ら問いかけ自ら答える研究成果であり、批判されれば事実に基づいて検証するしかなく、所属大学名など何の役にも立たないことは明白でした。しかし、部局長という職務を遂行するにあたり、よって立つべき基盤は「私の常識」しかなく、様々な法律や規則、教授会・科所長会議・役員会等のメンバー各位の意見等を勘案し、自分にとって腑に落ちるかどうかという観点から判断せざるを得ない場面がしばしばありました。「部局エゴ」や「東大エゴ」ではなく、全学や社会に与える影響力を十分に吟味し、広い視野に立つ

て「東大の名を惜しむ」必要性を痛感しました。部局内では新風を吹き込むことに努力しましたが、成果が出るのに時間がかかると思います。今後とも、本研究科に対する全学からの暖かいご支援をお願いいたします。

## 退任に際しての雑感

前大学院理学系研究科長・理学部長  
山本 正幸

この2年間、定式的な責務を果たす以上に東京大学や理学系研究科の発展に貢献できたか、甚だ疑問であるが、個人的には人生の中でも密度の高い時間を経験し、多くを学ばせて頂いた。研究の空白という代償を払ったが、今は素直にその体験をありがたいと感じている。

何事からも自由に研究を推進できる環境を守り、優秀な後継者の育成を図ることが、理学系研究科の果たすべき究極的な社会的責任だという考えで諸問題に対応してきたつもりである。しかし、法人化後の大学の中ではしばしばこの立ち位置の難しさを思い知らされた。

評価とそれに伴った褒賞・制裁が、国立大学法人運営の基軸になろうとしている。東大には研究能力、経営手腕、提言力、どれをとっても超一流の人材が集まっており、外部資金競争では圧倒的に勝ち抜いている。評価においては必ずトップを目指すという意志も強固に見える。しかし、大学入試対策が高校の教育内容を束縛するように、評価対策は我々の研究・教育を束縛してはいないだろうか。意味のない評価は拒否してよいのではないか、評価でいくつか弱点が指摘されるくらいのほうが東京大学は「人間らしい」のではないかなど、責任ある立場の方にはまさに妄言でしかないと感じつつ退任する。

## 転換期の三年間

前大学院教育学研究科長・教育学部長  
金子 元久

研究科長・学部長を務めた3年間をふりかえってみると、さまざまな意味での転換点であったのだと思う。いうまでもなくこの三年間は東大全体にとっては、法人化を実質的なものとする重要な過程であった。教育学研究科にとっても、これまでの学術的な専門分野を中心とした構成に、実践的な志向をもつ臨床心理学コース、大学経営政策コース、そして学校教育高度化専攻を設置する、という組織改革の仕上げの時期であった。こうした時期に責任のある立場にいたことは私にとっては大きな経験になった。それを支えていただいた総長をはじめとする執行部の方々、研究科の教員、そして職員の方々に感謝したい。しかしそのために、私自身の研究と教育面での質的な転換をはかることには少し遅れたことは否めない。それを取り返すことがこれからの課題である。

## 退任にあたって

### 前大学院数理科学研究科長 桂 利行

足掛け3期、4年間の任務を終えて、ほっとしています。

この間は法人化後の難しい時期でしたが、小宮山総長を始め、東京大学の執行部の方々のアクティブな采配ぶりにはただ感心させられました。私としては、数理科学研究科を大学の動きに適合させながら、数理に必要な静けさをも保っていくことを心がけましたが、今振り返ってみると、スタッフに忙しさを振りまき続けていたような気がします。大学が社会と連動しアカウンタビリティを果たしながら貢献していくことは重要なことであり、数理科学研究科もその例外ではありませんが、大学の学問の基盤をなすと信じている文学や理学の研究には、何にも煩わされない静かな時間の流れが貴重であることは間違いありません。東京大学が、様々な部局の要請を調和させて、ますます大きな成果をあげ続けることを心から念じてやみません。最後になりましたが、サポートしていただいた教職員の皆様に心から感謝の意を表したいと思います。

## 新領域の発展を願って

### 前大学院新領域創成科学研究科長 兩宮 慶幸

平成19、20年度の2年間、研究科長を務めました。この間、小宮山総長はじめ、本部の役員・職員、他部局の皆様と様々な場面でお話する機会を通して、多くのことを学び、多いなる刺激を受けました。また、新領域の教職員の方々がこの間しっかりと支えて下さったこと、大変にありがたく思っています。2年間は長くもあり、あっという間の期間でもありました。新領域は昨年で創立10周年を迎えて草創第2期に至り、新領域の真価が内外から問われる重要な時期にあると認識しています。その時期に研究科長としての任を与えられたことに大きな責任と使命を感じ、駆伝の走者に与えられたミッションのようなものを感じ、私なりに精一杯走ったつもりです。走りの速度や走る姿の美醜は問わないで頂きたいのですが、ランナーズハイのような高揚した気持ちで2年間を充実して楽しく走ることができました。すべて皆様のご支援とご協力のお陰であり、大変に感謝しています。今後は一教員として引き続き新領域、そして、東京大学の発展に貢献したいと思っています。ありがとうございました。

## 退任にあたって

### 前大学院情報学環長・学際情報学府長 吉見 俊哉

平成18年度から3年間、情報学環長・学際情報学府長を務めました。情報学環は、2000年に設立された新

しい大学院組織ですが、旧社会情報研究所との合併を経て、院生数約350人の中規模大学院にまで発展して参りました。〈情報〉の概念を核に、ITからジャーナリズムの専門家までが集う「自律分散協調」を象徴するような組織なので、「異なるものをつなぐ」ことを目指して3年間を過ごしてきました。地震研究所、生産技術研究所との3部局連携で総合防災情報研究センター(CIDIR)を、東洋文化研究所との連携でアジア情報社会コース(ITASIA)を設立できたことは、何よりも喜びでした。同時に、情報学環・福武ホールが完成し、今後の活動に大きな可能性が開かれました。清華大や復旦大、台湾大等の東アジアの主要大学との協定や留学生支援室の開設により、東京大学の国際化の先駆けとなろうともして参りました。これらがなんとか達成できましたのも、偏に全学が「学環」のような新しい横型組織を支えてくださったからです。心より御礼申し上げます、退任の挨拶とさせていただきます。

## 退任にあたって

### 前地震研究所長 大久保 修平

小宮山総長の下、2期4年勤めた所長の任期もようやく満了しようとしています。ちょうど法人化の離陸後、水平飛行に移るまでの期間に在職し、文字通り次々に明らかになってくる問題に翻弄され続けましたが、幸い、関係各位のお力添えで乗り切ることができました。地震研究所は地震や火山噴火に関する理工学の推進について全国連携の中核的役割を果たしていますが、それには全国規模での協力と継続的な研究推進が欠かせません。21年度からは新たに、地震予知と火山噴火予知とを統合した5ヵ年の研究プロジェクトが開始されます。私自身は研究者に戻りますが、地震研究所の活動に今後とも皆様のご支援を期待しています。最後になりましたが、総長をはじめ役員や部局長の先生方と、本部ならびに部局の教職員の皆様に、心からの感謝の念を捧げます。

## 退任にあたって

### 前東洋文化研究所長 関本 照夫

所長としてこの3年間を過ごし、良くも悪くもこれまでの研究・教育の生活とは大きく異なる世界を経験しました。とりわけ大きな出来事は、東洋文化研究所建物の耐震強度不足への対処でした。做すべき前例もないことでしたので、教職員や蔵書・研究資料さらに什器類などすべての人とももの退避先の確保、耐震補強改修の予算獲得、改修設計、度重なる引越、なかなか終わらない工期の心配などで任期中の2年半が過ぎていきました。

その間心配事は絶えませんでした。その間に得たことも少なくありません。小さな部局が独力では解決できないことについて、本部や他部局の実に多くの方々から

ご支援をいただき、東京大学の一体性を実感しました。各部局は自立してやっていく能力を持たねばならない。だが、努力してなお困っている時には全学がひとつになって助けてくれるという貴重な体験でした。退任にあたり改めて御礼申し上げます。

## 「連邦国家」としての東京大学の模索

前社会科学研究所長

小森田 秋夫

文系小部局の長を務めたこの4年間、国立大学法人となった東京大学は欧州連合に似ているところがあるな、と思うことがよくあった。連合として“一つの声”で語ることを促す外的な環境。そのような中で、加盟国の“主権”と連合の権限やリーダーシップとの程よい関係の模索。連合をリードする“大きな国”の流儀とそれが唯一ではないと主張する“小さな国”の言い分との折り合い。対立する国益を調整する“外交”の場でもあり、共通の利益を確認すべき“内政”の場でもある首脳会議。コンセンサスを建前とするそこでの意思決定の微妙な性格…。もちろん、もはや諸国家の単なる連合体ではなく、しかしそれ自体ひとつの国家である連邦国家でもない欧州連合と比べれば、国立大学法人は、運営資金の流れひとつをとってても「ひとつの国家」に近い。しかし、その国家のかたち（「連邦」的性格の内実）は、欧州連合のそれと同様に未完の問いの対象であり、東京大学の構成員がその責任において選びとってゆくべきものである。自らの責任のはたし方はどうであったか——忸怩たる思いで、いま後任にバトンタッチする。

## 研究所長退任にあたって

前生産技術研究所長

前田 正史

平成17年、つまり国立大学法人化2年目から所長を務め、4年間の得難い経験をすることができました。

生産技術研究所は日本最大の附置研究所であり、そのルーツは昭和17年に西千葉に設置された第二工学部に遡ることができますが、今年は60周年を迎える節目の年でもあります。地球環境を考え、ものづくりの現場から産業界と連携し、新たな学問体系を見出す萌芽的研究として、研究センターを3つ設置し（エネルギー工学連携研究センター、革新的シミュレーション研究センター、先進モビリティ研究センター）、2つのセンターが卒業いたしました。

私は、輪番制ですが、国立大学附置研究所・センター長会議の会長をつとめました。その際には各大学の個性を大いに感じました。そして、東京大学のコミュニティの相互理解の深さに、学部、研究科、研究所の間のコミュニケーションや人事交流の活発なことなど、東大各部局の底力に驚くとともに、部局ごとの文化、ガバナンスの違いも感じました。

大学が知の拠点であることは言うまでもありません。そのためにいかに教員の研究と教育のために時間を確保するか、微力ながら腐心してきました。戦略的な教員人事も所員の提案を積極的に支援し、20件近くを実現することができました。総長、役員会、関連する部局のご理解もさることながら、所内に強力な教員支援の事務組織が整備されていたことも大きな支えでした。

皆様、本当にお世話になりました。

## お世話になりました

前史料編纂所長

横山 伊徳

毎日毎日過去をふりかえることを仕事としてきた私ではありますが、この2年間をふりかえることは、あまりほめられるようなことがないだけに、どちらかといえば、やりたくない事柄でした。しかし、この原稿の締切りが近づくにつれ、自分の中で大きくなってきたのは、2年間毎日さまざまなお世話をしてくださった人々への感謝の気持ちです。貴重史料の耐震退避をはじめ、補強工事など、通常の部局運営ではありえないような、多くの方々との出会いがあり、ご支援をいただきました。本当にお世話になりました。ありがとうございます。

## 退任にあたって

前分子細胞生物学研究所長

宮島 篤

法人化の前年度から3期6年間にわたる分生研所長を退任いたしました。法人化という大学の激動期に本部棟に通い様々な経験をいたしました。また、本学の多様性と底力を改めて実感した6年間でもあり、いろいろな分野の方々を知り合いになれたことは私にとっての貴重な財産です。分生研は小部局ではありますが、分子生物学や細胞生物学の領域において研究業績が着実に上がってきていることを誇りに思っています。これは勿論個々の研究者の努力によるものですが、若手研究者の登用や従来の体制にとらわれない柔軟な研究所運営も一助となっているものと思います。一方、分生研は研究スペースの狭隘という深刻な問題を長年抱えており、この問題解決に向けて微力ながら努力して参りました。総長や理事・副学長をはじめ本部および分生研の事務部の方々のご尽力により、新研究棟の建設に目処がつかしましたことを感謝いたします。

## 附属図書館長を退任するにあたって

前附属図書館長


西郷 和彦

2期4年間に亘り、総長、役員、教職員の皆様には大変お世話になりました。有り難うございました。

この間、長年の懸案事項でありました基盤的学術雑誌

経費の共通経費化、学生用図書経費の恒常化を実現することが出来ました。これも偏に、総長並びに役員の方々のご理解と教職員の皆様のご支援の賜物と感謝申し上げます。

しかし、附属図書館は、まだまだ多くの問題を抱えています。例えば、ジャーナルは研究推進に不可欠ですが、ジャーナルの価格は年々上昇を続けており、極めて近い将来にジャーナルへのアクセス環境が現在よりも劣悪になることが危惧されています。学習、教育、研究を支える図書・学術雑誌の維持に、皆様のご理解と更なるご支援をお願い致します。



一般

## ライフサイエンス研究倫理支援室

「ライフサイエンス研究倫理支援室」  
がスタート！

本学は、平成 21 年 2 月 1 日付けで「ライフサイエンス研究倫理支援室」を設置し（設置時は岡村定矩室長、4 月より松本洋一郎室長）、専任教員 2 名、事務職員 1 名を配置してスタートしました。



発足時の記念写真

【前列左より、三浦竜一教授（研究倫理支援担当）、長井裕之特任助教（4 月着任）。後列右より、谷合俊一本部研究推進系統括長、赤林朗副室長（医学系研究科教授）、岡村定矩前室長（前理事・副学長）、松井潤一本部研究推進グループ長、田中智子本部研究推進グループ職員】

当室は、倫理審査を必要とする研究（臨床研究、疫学研究、ヒト ES 細胞使用研究等）と関連法令等の遵守を必要とする研究（遺伝子組換え実験、動物実験、特定病原体使用実験等）について、全学的な支援活動を行うことを目的としています。具体的には、申請や手続き等の相談窓口として助言・指導や協力、関連情報の収集と全学的な発信、教育活動、関連する全学委員会のマネジメント、実施状況のモニタリング、支援システムの開発等に取り組んでいきます。

近年社会全体が、社会活動全般に対して、「倫理」、「コンプライアンス」、「個人情報」、「アカウントビリティ」といった観点からみて適正な実施をより強く求めています。当室の設置は、本学がライフサイエンス研究の総合的な支援に、より充実した体制で取り組んでいこうとする姿勢を示すもので、全国的にみても先駆的な試みです。当室は活発な支援活動を通じて、社会の要請と本学の期待に応えていきます。

ライフサイエンス研究あるいはその他のヒトを対象とした研究活動に関する不明な点等がございましたら、下記までお気軽にお問い合わせ下さい。

ライフサイエンス研究倫理支援室メールアドレス

lifescience @ adm.u-tokyo.ac.jp

ライフサイエンス研究倫理支援室ホームページ

<http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/office/lres/index.html>

## 海洋アライアンス

### 第3回イブニングセミナー開催

一般

2月26日(木)、本郷キャンパス工学部3号館において、海洋アライアンス・第3回イブニングセミナーが開催された。今回は青山潤特任准教授(海洋研究所)、交告尚史教授(公共政策学連携研究部・法学政治学研究科)による、以下の講演があった。

- ・「ウナギ生態の謎」 青山潤特任准教授
- ・「個別法の目的と総合化の試み—自然に対する配慮と関わりで—」 交告尚史教授

青山特任准教授は、ウナギが行う数千キロにも及ぶ大回遊の謎に迫った。低緯度海域でふ化したウナギは、やがてレプトセファルスと呼ばれる幼生となり、長い回遊を始める。北赤道海流に流されるレプトセファルスはある時点で黒潮に乗り換え、日本の沿岸にたどり着く。この乗り換えには物理的要因と生物的要因による緻密なメカニズムが働くことが示唆される。しかし現在、世界に認められる18種・亜種のウナギは、1種たりとも天然で生み出された卵や産卵中の親ウナギが発見されたことはなく、その生態は未だ謎に包まれていると述べ、ウナギ研究の興味深さを語った。

最後に、世界的に激減するウナギ資源の保全のためにも、生活史の全貌を明らかにする必要があることを強調した。

交告教授は、海底の鉱物掘採について、現行の鉱業法が想定する「環境」は人間の生活や人体の安全を指すことを指摘し、もっと生態系に配慮した環境評価の仕組みを工夫するように述べた。

さらに行政法学における目的拘束の観点から、「業界の健全な発達」を目的に掲げる採石法を例にとり、環境保護に関係する法律のほとんどに環境保護の目的がないことを問題視した。

また「動植物生息空間の保護」を掲げるデンマークの自然資源法や、ヨーロッパにおける環境法典化の潮流などを例にとり、非自然保護法によって自然保護を図るためには工夫が必要であることを述べた。

当日は大学内外から教授、学生が集まり、2人の講演に耳を傾けた。また講演後のディスカッションでは意見や質問が飛び交い、問題解決型の海のシンクタンクを目指す海洋アライアンスにとって、大変意義深い意見交換の場となった。次回も多くの参加を期待したい。

イブニングセミナーは今後も2ヶ月に1回を目処に開催する予定である。

海洋アライアンスホームページ:

<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp>



セミナー風景

## 大学発教育支援コンソーシアム推進機構(COREF)

### 「大学の知」で初等中等教育の現場を支援

一般

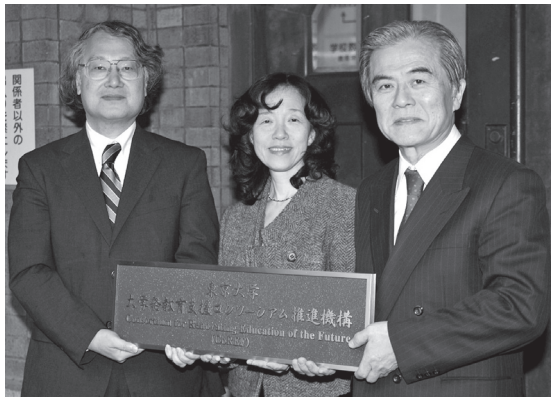
学内広報1383号(2009年2月16日発行)「発掘! 総長室総括委員会」でも紹介されたが、大学発教育支援コンソーシアム推進機構は、総長室総括委員会の下に、小宮山宏前総長を機構長として昨年11月に発足した新しい組織である(1枚目の写真中央は三宅なほみ副機構長、左は金子元久前教育学研究科長)。

大学発教育支援コンソーシアム(教育コンソーシアム)は、大学の知で小・中・高等学校の教育の質に貢献しようという総合大学を中心とするネットワークによる取り組みで、本機構がハブとなり文部科学省からの運営費交付金による支援を受けて事業を推進している。大学の知のリソースを学校の教室などで実際に活用できる形で発信すること、教育現場で大学の知を活用する実現可能な手段を現場の先生たちと一緒に開発し、実践的に評価することを目指している。

学内でも既に小・中・高等学校の教育の質の向上のための様々な取り組みが行われていますが、それらの成果を蓄積し、「小・中・高等学校で活用できる」形で発信していきたいと考えていますので、関連する事業を実施されている研究チームにおかれましては、小規模のものでも結構ですので、ぜひ機構へご一報下さい。

機構では、当面は既にある多くのコンテンツを実際に活用できる形で提供するためのインターフェイスとなるポータルの開発や、現場の先生方にも参加いただくワークショップの実施、長期的には、東大発のコンテンツを実際に授業で使い、その成果を評価する長期参加型プロジェクトなどを計画しています。

今後とも、引き続き皆様のご支援を賜りますよう、どうぞよろしく願いいたします。



機構看板設置 (医学部1号館玄関)



シンポジウムにて。左は教材の展示、右はグループ議論



ワークショップにて。グループで議論する参加者

### 本部留学生支援グループ

#### 東京大学卒業・修了予定の外国人留学生、留学生支援団体等と総長との懇談会



3月5日(木)18時から、東天紅上野店において「東京大学卒業・修了予定の外国人留学生、留学生支援団体等と総長との懇談会」が開催された。

この会は、本学の学部を卒業または大学院修士課程・博士課程を修了する予定の外国人留学生及び留学生支援団体関係者等と総長ほか役員をはじめとする本学教職員が一同に会して親睦を深めることを目的としており、会には留学生約170名に加え、日頃から留学生をサポートいただいている支援団体、大使館及び自治体等関係者、ならびに本学教職員の総勢300名を超える参加者があった。

会は小宮山宏総長の挨拶に引き続き、留学生支援団体の代表として株式会社アサツー ディ・ケイ代表取締役会長 稲垣正夫氏からご挨拶をいただき、浅島誠理事(副学長)による乾杯のご発声で幕を開けた。

しばらくの歓談ののち、本年3月に薬学部卒業予定の郎 媛琳(ロウ エンリン)さん、公共政策学教育部専門職学位課程修了予定の Bambang Indrawan Cahya Putra (バンバン インドラワン チャーヤ プトラ)さん、新領域創成科学研究科博士課程修了予定の曲 薇(チュウ ウエイ)さんの3名から、日本での経験、研究生活などにちなんだ流暢な日本語によるスピーチがあった。会場では留学生が、総長、理事や研究科長等とともに記念写真を撮る姿などが見られ、終始和やかな雰囲気にも包まれた。会の終盤近くでは、東京大学運動会応援部と参会者一同による東京大学応援歌「ただ一つ」の合唱、応援部によるエールののち、予定時間の20時、坂野留学生センター長(大学院理学系研究科・教授)から閉会の挨拶があり、会は盛会のうちに終了した。



来賓スピーチ 稲垣正夫・株式会社アサツー ディ・ケイ代表取締役会長



小宮山総長と記念写真を撮る留学生



留学生スピーチ 曲 薇 (チュウ ウエイ)  
(新領域創成科学研究科博士課程修了予定)

## 部局 ニュース

### 社会科学研究所

東北大学でグローバルCOEキック  
オフセミナーに参加

2月3日(火)から4日(水)、グローバルCOE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」のキックオフセミナーが東北大学で開かれた。このグローバルCOEは東北大学が拠点であり、社会科学研究所が連携拠点となっている。社研側からは小森田秋夫所長、連携拠点リーダーの大沢真理教授始め11人が参加。窓外に残雪をのぞむセミナー室で、国内外の若手研究者を中心に熱心な報告が行われ、質疑応答が交わされた。

3日のプレ・キックオフセミナーでは、英語セッション”Looking for New Social Justice in the Globalizing World”があり、中国、英国、日本、カナダから5人が登壇した。社研からは高松香奈特任助教が、“‘Human Security’ and Assistance to ‘Fragile States’ in Japan’s ODA Policy: from the Case of Myanmar”と題する報告を行った。

4日午前のセミナーは、「ジェンダー平等とセクシュアリティ」、「少子高齢化をめぐる国家と私的領域」、「New Social Issues in the Globalizing World」の3つのワーキンググループ(WG)に分かれて、それぞれのWGで3、4名が報告を行い、その後参加者を交えて討論に移った。

昼食時にはポスターセッションとレセプションが行われた。ポスターセッションでは、この拠点の下にある15の研究プロジェクトの内容が説明され、今後刊行される予定の多数の成果物についても紹介があった。拠点

の大きな目的は、国内外の大学院生や若手研究者を育成する点にある。例えば、クロス・ナショナル・ドクトラル・コース(CNCD)はそのための主要事業のひとつである。これは、東北大学と海外連携大学が博士課程の院生を第2年次に相手校に送り、双方の教員から指導を受けつつ、双方の博士号を取得できるというプログラムである。レセプションでは東北大学理事に続いて小森田社研所長から挨拶があった。

午後は2つの会場に分かれて、日本語セッション「ジェンダー平等と共生」と、英語セッション”Towards a just, Peaceful and Convivial Community in the Globalizing World”が行われた。前者では、人身売買、家族法改正、DV法の日韓比較、パート均等待遇、障害者の就労支援など、興味深い報告が行われた。後者の英語セッションでは安全保障政策、平和運動、教育、共同体構築など、多様なテーマに関する報告がなされた。

社研側からはプロジェクト協力者や東京大学院生など合わせて8名が報告し、討論にも積極的に参加して存在感を發揮した。若手の報告者で構成するセミナーであり、完成度には課題を残したかもしれないが、意欲と期待が感じられるセミナーであった。



プレ・キックオフセミナーで討議する参加者

### 留学生センター

留学生センター日本語教育「集中日本語コース」等 2008年度冬学期修了証書授与式行われる

留学生センター日本語教育「集中日本語コース(初級～上級)」「学術日本語コース(上級)」2008年度冬学期の修了証書授与式が、2月19日(木)15時30分から医学部総合中央館3階333会議室で行われ、両コース合わせて51名が修了した。内訳は、国費留学生(大使館推薦による10月渡日者)15名、その他の国費留学生24名、私費留学生12名であった。

式には、浅島誠理事・副学長をはじめ、センター関係教職員及びいくつかの研究科の国際交流室の先生方が出席、浅島理事・副学長からの挨拶の後、日本語教育部門主任の菊地康人教授から修了者一人ひとりに修了証書が

手渡され、講評が述べられた。続いてカマリ タビリジ、モスタファさん（初級代表：イラン）、フー ジェロムさん（中級代表：カナダ）及びディラング ポールさん（上級代表：ニュージーランド）の3名の受講生から日本語によるスピーチがあり、短い期間での受講生の日本語の上達振りが披露され、和やかな雰囲気の中に式が終了した。



集合写真

引き続き、山上会館にところを移して、修了者を囲みでの懇談会が行われ、公務多忙の中ご出席いただいた浅島理事・副学長から再度ねぎらいの言葉をいただいた。修了者たちは、センター教員を囲んで記念写真を撮ったり、参加者全員で歌を歌ったりしてパーティーを楽しみ、やがて別れを惜しみながら会は終了した。

なお、今期の修了者51名の所属及び出身は、以下のとおり。

研究科（10 研究科）

人文社会系研究科	2名
法学政治学研究科	3名
総合文化研究科	4名
理学系研究科	1名
工学系研究科	15名
農学生命科学研究科	9名
医学系研究科	4名
数理科学研究科	1名
学際情報学府	8名
情報理工学系研究科	4名

国または地域（22 カ国・地域）

中国	19名
韓国	3名
タイ	3名
フランス	3名
アルジェリア	2名
イスラエル	2名
台湾	2名
ペルー	2名
マレーシア	2名

イラン	1名
インドネシア	1名
オーストリア	1名
カナダ	1名
クロアチア	1名
スイス	1名
チュニジア	1名
ニュージーランド	1名
バングラデシュ	1名
香港	1名
パキスタン	1名
ヨルダン	1名
ロシア	1名



修了証書授与風景



ねぎらいの言葉を述べる浅島理事・副学長

物性研究所

「第6回 物性研究所 技術発表会」開催される

2月20日(金)物性研究所6階講義室において、第6回物性研究所 技術発表会が開催された。口頭発表12件(特別セッション「超伝導」6件、一般講演5件、特別講演「技術職員一過去・今・未来一」1件)、ポスター発表9件、計21件の発表があり、74名(東工大2名、大阪大1名、琉球大1名、高エネ研1名、長岡技科大1名、三井造船1名、工学部3名、新領域1名、物性研究所内63名)




の参加者があった。日頃の技術職員の業務や失敗談、苦労話、研究開発の成果など、技術発表会ならではの発表に加え、特別セッションでは「超伝導」に関するレビュー講演、特別講演では技術職員に関する講演があり、参加者からも質問、意見が出された。

夕方からは懇親会が催され、研究所内の技術職員同士、また他大学の技術職員との意見交換が行われた。終始和やかな雰囲気の中、大成功のうちに閉幕した。



口頭発表の様子



部局

社会科学研究所

社研シンポジウム「社会的排除とジェンダー」を開催


2月28日(土)に、第22回社研シンポジウム「社会的排除とジェンダー：日独型レジームと北欧型レジーム」(国際シンポ)を情報学環・福武ラーニングシアターで開催した。シンポの目的は、ジェンダー視点と生活保障システム(レジーム)というアプローチにもとづき、貧困、格差、失業、雇用の非正規化などの社会的排除が、レジームによってどのように現象しているのか、排除をいかに克服しようとしているのか、最新の知見を集め議論を深めることである。社会科学研究所が連携拠点となっている東北大学GCOEプログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」、および社研の大沢真理教授、北海道大学の宮本太郎教授がそれぞれ研究代表者を務める2つの科学研究費プロジェクトが協力した。一般参加者も含め学内外から約150名の参加を得た。

小森田秋夫所長、辻村みよ子東北大学大学院教授(GCOE拠点リーダー)の挨拶後、大沢真理教授(GCOE連携拠点リーダー)が研究プロジェクトの趣旨および「社会の再生産の危機へ：逆機能する日本の生活保障システム」を報告した。続いて宮本太郎教授が「男性雇用志向型レジームの終焉」、マルガリータ・エステベス・アベシラキウス大学准教授が「選挙制度と日本の福祉国家の将来」、カリン・ゴットシャル プレーメン大学教授とカレン・シャイア デュースブルグ大学教授が「『多様な資本主義』におけるジェンダーと技能形成」、白波瀬佐

和子人文社会系研究科准教授が「晩婚化と所得不平等に関するジェンダー格差の比較分析」をテーマに、それぞれ報告を行った。武川正吾人文社会系研究科教授、ハイディ・ゴットフリート ウェイン州立大学教授が報告に対するコメントを行い、その後の自由討議では、コメントーターおよび会場からのコメント・質問に報告者が応答しつつ、活発な議論が展開された。



自由討議では活発な議論が展開された



部局

先端科学技術研究センター

革新的太陽光発電国際シンポジウム  
2009—世界の第一線の研究者が駒場  
リサーチキャンパスに集結—

先端科学技術研究センターでは、地球環境問題、エネルギー・資源問題を地球規模で解決するために、エネルギー・環境技術国際研究拠点「SOLAR QUEST」を立ち上げ、革新的な研究開発に取り組んでいる。

2008年度より、先端科学技術研究センター、産業技術総合研究所、東京工業大学が中心となり、NEDO委託事業として「革新的太陽光発電技術研究開発」プロジェクトが開始されている。3月2日(月)、3日(火)に駒場リサーチキャンパス内のコンベンションホールにおいて、同プロジェクトの最新の研究成果の報告に加えて、海外の第一線で活躍する22名の専門家を招聘し、最新の次世代太陽電池の研究開発動向についての情報交換やグローバルネットワークの構築・拡大を図ることを目的に「革新的太陽光発電国際シンポジウム2009」を開催した。

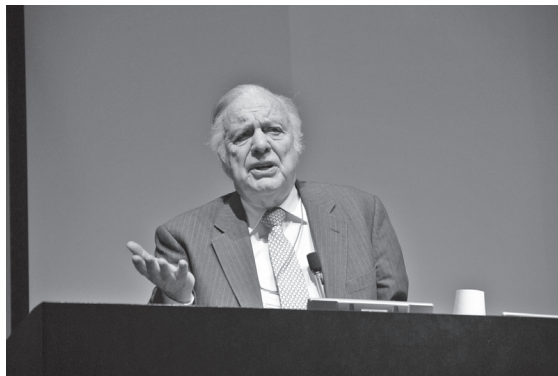
シンポジウムでは、太陽電池の研究開発をリードする国内外の研究者が一同に会し、タンデム・無機系・有機系の太陽電池の開発の現状や今後の研究開発の方向性について、活発なディスカッションが行われた。最終的には、招聘研究者、プロジェクト関係者、一般参加者あわせて400名以上が参加し、ピーク時には立見も出る程の大盛況となった。

SOLAR QUESTのプロジェクトリーダーである先端科学技術研究センターの中野義昭教授による閉会挨拶では、プロジェクト成果の広報や国内外の研究機関との

ネットワークの構築という当初の目的が達成できたこと、また、未来の太陽電池の開発を担う多くの若い研究者・学生がシンポジウムに参加し、研究だけでなく様々な面で刺激を受けたことが大きな成果であることが強調された。なお、「第2回革新的太陽光発電国際シンポジウム2009」は、つくばのEPOCHAL TSUKUBAで、2009年12月3日（木）、4日（金）に開催される予定である。



開会挨拶する先端科学技術研究センター宮野所長



基調講演する Max Planck Institute Prof. Queisser



会場の様子

**大学院工学系研究科・工学部**

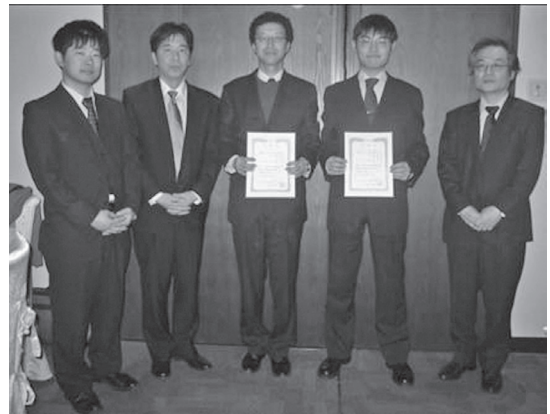
東京大学・コマツ社会連携講座の研究テーマが学術研究講演会においてベストペーパー賞・ベストプレゼンテーション賞をダブル受賞

3月3日（火）、国士舘大学において行われた自動車技術会関東支部主催の学術研究講演会において、東京大

学・コマツ社会連携講座のテーマから「二円筒試験のピッチング寿命に及ぼす固体接触の影響」というタイトルで発表を行い、ベストペーパー賞、ベストプレゼンテーション賞をダブル受賞した。（受賞者 東京大学：濱口哲也教授、川元康裕助教、修士2年菊池篤徳さん、コマツ：七野勇人氏、長田哲氏）講演会での口頭発表は修士2年の菊池さんが行い、ベストプレゼンテーション賞を受賞した。

本講座は、2007年4月からスタートした社会連携講座の第一号であり、産学連携研究を推進するとともに、実践的教育と技術者の効果的育成を目指しており、今回の受賞は、本講座の研究・教育の両面を認められた成果であると言える。

発表タイトルにあるピッチングとは、歯車の歯面に発生する疲労破壊現象のことで、歯車のコンパクト化、長寿命化に向けて避けて通れない課題になっている。ピッチング現象は様々な因子が複雑に関係しているため、そのメカニズムは実はよくわかっていない。最先端の研究開発の現場で企業が抱えるこの難しい課題を、修士論文テーマとして菊池さんが取り組み、PBL（Project Based Learning）的手法を取り入れた実践的教育が実を結んだ。



受賞者一同で記念撮影（左から川元助教、濱口教授、コマツ・七野氏、修士2年・菊池さん、コマツ・花本氏）

**大学院農学生命科学研究科・農学部**

第1回農学生命科学技術職員研修会が開催される

3月5日（木）13時から6日（金）12時まで、弥生講堂アネックス セイホクギャラリーにおいて、本研究科主催による第1回農学生命科学研究科技術職員研修会が開催された。今回の研修会は本研究科に所属する全技術職員を対象とする初めての研修会であり、全附属施設の代表10名で構成された実行委員会が中心となって企画・運営を行った。研修の内容は特別講演「安全について」（安全衛生管理室 高橋勝彦特任教授）、退職者講演「下刈り技官の40年」（演習林研究部 荒木田義隆技術専門員）、口頭発表6演題、ポスター発表18演題のほか、技

術職員組織化についての意見交換を行った。

参加者は本研究科の技術職員の約半数におよぶ48名のほか、教員および研究員17名、事務職員2名、他学部技術職員9名の合計76名であった。同じ研究科に所属しているにもかかわらず、これまで名前も顔も知らなかった技術職員の業務を理解し、技術職員同士が交流できたことは、本研究科技術職員の技術の向上につながり、また組織化に向けてあらたな第一歩を記すことができた。最後にご協力いただいた生源寺眞一研究科長をはじめ、すべての教職員に御礼を申し上げる。



研修会参加者

### 分子細胞生物学研究所

#### 平成20年度分生研技術発表会を開催

3月12日(木)、分生研本館1階会議室において平成20年度「分子細胞生物学研究所技術発表会」が行われた。本会は、分生研に所属する技術職員の発表を通じて、研究所内外の情報、意見交換を目的として開催しており、4名の技術職員が代表として各自の職務、担当する研究課題について発表した。また、特別講演として、(独)科学技術振興機構ERATO協力研究員の藤山(中村)沙理氏を招き、蛋白質同定法の最先端技術についてレクチャーを受けた。

当日は37名の教職員、学生の皆様にご参加頂き、活気に溢れた雰囲気の中、活発な意見交換がなされた。今年度の発表内容は、各自が担当する研究課題について、実験上の創意工夫を紹介したものが中心であったため、互いの参考となる部分が多かった。また特別講演を通じて、まだ馴染みの薄い技術について学び、新たな知識を得られたことは非常に有意義であった。

参加者の皆様には、多数の貴重なご質問、ご意見を頂き、技術職員一同、今後の研究活動の中でそれらを生かし、更なる技術力向上に努めたい。

開催にあたり多大なご協力を頂いた宮島篤所長、加藤茂明技術部長、素晴らしい講演をして下さった藤山氏と、全ての参加者の皆様に深い感謝の意を述べると共に、今回の発表会のご報告とする。



発表会の様子

### 大学院教育学研究科・教育学部

#### 公開シンポジウム「教育学部における教育・研究の課題—東京大学大学院教育学研究科・教育学部の外部評価を踏まえて—」を開催

大学院教育学研究科・教育学部では、2008年11月に行われた外部評価を踏まえて、また同時に外部評価の一環として、3月18日(水)、本郷キャンパス赤門総合研究棟200番教室にて、標記公開シンポジウムを開催した。

シンポジウムは3部から構成され、第1部で教育学研究科教員から現状と課題の紹介がなされた。教育学研究科全体に関しては、教育実践のプロを養成する組織の構築、研究活動の組織的な高度化とともに、学部・大学院の教育機能を問い直し、教育学に対するトータルなアプローチを可能にする改組を進めていることが紹介された。教育面では、シラバスの充実・授業評価の導入・TA制度の拡充といった改革の現状、学生の興味喚起不足と大学院進学率の低下といった課題が紹介され、今後の方向として「教育学的教養」の明確化と実践化・学際化・国際化の推進が示された。研究面では、個々の教員による研究活動の向上と横断的機構の整備・充実による総合的研究体制の整備といった現状と、研究の組織化と統合化、関連分野との連携、グローバル化への対応と世界への発信、人材確保・獲得戦略の整備をめぐる改革方針について説明がなされた。

第2部では、外部評価委員合計8名のうち当日参加の7名から提言がなされた。教育学部が進めてきた改革は高く評価できること、研究面では教育についての根本的・原理的な吟味を進め21世紀の教育に関して教育界をリードし社会のモデルとなるビジョンを、実践面も含めて構築していくことへの要望が複数の委員から表明された。教育面では、専門性に加えたリーダーシップの養成を含む望ましい学生像の明確化、学部と修士課程の連携強化、大学院重点化による大学院生の多様化に対応する体制の整備について要望があった。それらを支える組織面では、附属学校との連携強化、シンクタンク機能の確立、マネジメント機能の強化について提案があった。また、学際的・国際的な連携、社会へのアウトリーチ活動、人材確保についても原理的な考え方から具体的な対

応案に至る提言がなされた。

総合討議にあてられた第3部では、大学院重点化に伴う大学院生の多様化、教員の任期と大学院生の指導継続性、附属学校と研究科の連携等について質問があり、外部評価委員および研究科教員から活発な発言がなされた。

全体として、教育面においては、教育学の独自性・専門性をふまえながらもより幅広い視野で教育を捉えていく方向性が、一方で研究面においては個々の研究を生かしながらも教育の根源に関わる部分を実践も含めて根本的に考えていく方向性が、諸委員の多様な提言のなかから浮かび上がった。2009年度、教育学研究科は創立60周年、還暦を迎えるにあたり、中期的な外部評価の観点からのみでなく長期的な観点からも時宜を得た重要なシンポジウムとなった。



金子元久研究科長の挨拶



総合討議の様相



懇談会後の外部評価委員・教職員をまじえての記念撮影

## 大学院教育学研究科・教育学部

### 「教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター」の開設

4月1日に、教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センターが開設された。本学のアクション・プランに掲げられている「バリアフリーの実現と構成員の多様性を育むための環境整備」を推進すべく、バリアフリーの学問的体系化を図る拠点となることを目指している。教育をバリアフリーの観点から見直し、バリアフリーを教育研究の領域において推進する、という二つの軸を中心に活動を展開する。センター長1名、専任教員1名および若干名の兼任教員から成る組織として、赤門総合研究棟212号室および203号室においてスタートし、初代センター長には本研究科の衛藤隆教授が就任された。



(左から) 衛藤センター長、白石副センター長、武藤研究科長

すでに本研究科では、バリアフリー支援チーム（チーム長：武藤芳照研究科長）を中心にバリアフリー環境整備を行ってきたが、ハード面におけるユニバーサルデザイン化の推進を図るとともに、ソフト面として私たち一人ひとりの心の中にあるバリアや文化的社会的なバリアと向き合うことが最も基本的で重要なことだという認識をもっている。当センターにおけるバリアフリー教育研究活動においては、教員も学生も、キャンパス内外のさまざまな人々にも、それぞれのやり方で関わり、共に「気づく」こと、学び合っていくことを願っている。

来る6月20日（土）には、同センターの開設を記念して『市民公開フォーラム：教育のバリアフリー、そしてバリアフリーの教育』を安田講堂（13:30～17:00）において開催します。基調講演「バリアフリーの教育」を先端科学技術研究センター教授の福島智氏にお願いし、引き続き「教育のバリアフリー」パネルにおいて、脚本家の小山内美江子、パラリンピック水泳金メダリストの成田真由美、画家の木下晋、先端科学技術研究センター教授の中邑賢龍、分子細胞生物学研究所准教授の伊藤啓の諸氏のご参加をいただく予定です。ふるってご参加ください。

教育学研究科では、育児支援の一環として、学生や教職員が授乳や休憩などのために利用することを目的とした育児支援室を設置し、この度、利用を開始した。

育児支援体制の充実については、本研究科の学生組織である「教育学研究科学生協議会」から、全学的な保育施設の充実はもとより、身近な問題として、多目的トイレ（バリアフリー対応型）内に、乳幼児と母親が共に利用できる設備を整備することや、授乳のための部屋の設置について要望が出されていた。これを受けて、乳幼児と母親が共に利用できるトイレの設備については、昨年11月に整備を完了し、育児支援室については、この度、実現したものである。

同学生協議会のアンケート調査によると、実際に育児をしている学生が6人、また、将来育児をすることを考えている学生が18人おり、育児に関わる・関わろうとしている学生が相当数にのぼり、同学生協議会と本研究科長との定例的な話し合いにおいて以前から要望が出されていて、育児支援のための設備の整備は、本研究科の喫緊の課題となっていた。

本学における次世代育成支援および男女共同参画のための環境整備に呼応して、本研究科においても、学生のみならず、教職員の育児支援のための手助けになるように、今後とも取り組んで行く予定である。



育児支援室にて赤ちゃんと一緒にくつろぐ



利用される方は事前に

学生支援チーム

にご相談ください

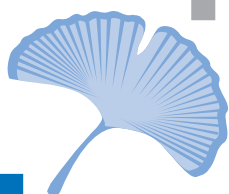


大学院教育学研究科・教育学部

平成21年4月1日

学生への告知用掲示

# キャンパス ニュース



キャンパス

## 本部入試グループ

第2次学力試験(前期日程)の合格者、  
同(後期日程)第1段階選抜結果の  
発表

平成 21 年度本学入学者選抜の第 2 次学力試験（前期日程）の合格者 3,007 人の受験番号及び第 2 次学力試験（後期日程）の第 1 段階選抜合格者の大学入試センター試験試験場コード・受験番号が 3 月 10 日（火）12 時 30 分頃、本郷構内で掲示により発表された。

また、併せて、合格者の科別成績（最高点・最低点・平均点）も発表された。

なお、各科別の合格者数等は次のとおりである。

### 平成 21 年度第 2 次学力試験（前期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第 1 段階選抜 合格者数	受験者数	合格者数	合格者科別成績		
						最高点	最低点	平均点
文科一類	401	1,643	1,210	1,203	401	463.044	365.556	390.394
文科二類	353	1,205	1,059	1,056	353	451.089	357.244	377.715
文科三類	469	1,501	1,410	1,406	479	446.867	350.700	372.841
理科一類	1,108	2,893	2,770	2,763	1,129	451.311	323.322	350.457
理科二類	532	2,094	1,868	1,848	547	436.578	322.511	347.936
理科三類	98	541	392	384	98	461.256	380.211	403.918
合 計	2,961	9,877	8,709	8,660	3,007			

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

### 平成 21 年度第 2 次学力試験（後期日程）第 1 段階選抜合格者数等

科 類	募集 人員	志願 者数	倍率	第 1 段階 選 抜				合格者成績		
				合格 者数	不 合 格 者 数		最高点	最低点	平均点	
					本学前期日程 合格による者	左記以外の者				計
全科類 (理科三類を除く)	100	3,166	31.7	506	1,586	1,074	2,660	772	707	721.52
合 計	100	3,166	31.7	506	1,586	1,074	2,660			

本部入試グループ  
**第2次学力試験(後期日程)、外国学校  
 卒業学生特別選考の合格者発表**

平成 21 年度本学入学者選抜の第 2 次学力試験（後期日程）の合格者 100 人及び外国学校卒業学生特別選考合格者第 1 種（外国人であって日本国の永住許可を得ていない者）の合格者 13 人、第 2 種（日本人及び第 1 種以外の外国人）の合格者 23 人の受験番号が、3 月 22 日（日）12 時 30 分頃に、本郷構内で掲示により発表された。また、併せて、合格者の成績（最高点・最低点・平均点）も発表された。

なお、それぞれの入試の合格者数等は、次のとおりである。

**平成 21 年度第 2 次学力試験（後期日程）募集人員・合格者数等**

科 類	募集人員	志願者数	第 1 段階選抜 合格者数	受験者数	合格者数	合格者成績		
						最高点	最低点	平均点
全科類 (理科三類除く)	100	3,166	506	437	100	192	143	155.97
合 計	100	3,166	506	437	100			

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

**平成 21 年度外国学校卒業学生特別選考志願者数・合格者数等**

科 類	区分 種別	志願者数	第 1 次選考	第 2 次選考	第 2 次選考
			合格者数	受験者数	合格者数
文科一類	第 1 種	8	4	4	0
	第 2 種	33	16	13	8
文科二類	第 1 種	36	9	9	4
	第 2 種	21	8	8	4
文科三類	第 1 種	11	4	4	1
	第 2 種	27	15	14	4
理科一類	第 1 種	51	13	13	5
	第 2 種	23	12	10	3
理科二類	第 1 種	9	4	4	3
	第 2 種	8	8	7	3
理科三類	第 1 種	3	1	1	0
	第 2 種	5	3	2	1
合 計	第 1 種	118	35	35	13
	第 2 種	117	62	54	23

なお、過去 3 年間の入学志願者数及び合格者数の推移、高校卒業年別の合格比率、出身校所在地別合格者数及び比率は次のとおりである。

### 入学志願者数及び合格者数の推移

	平成 21 年度						平成 20 年度						平成 19 年度							
	志願者		合格者		計	志願者		合格者		計	志願者		合格者		計	志願者		合格者		計
	前期	後期	前期	後期		前期	後期	前期	後期		前期	後期	前期	後期		前期	後期	前期	後期	
文科一類	1,643	1,643	401	401	1,342	1,342	401	401	1,502	791	2,293	373	42	415						
文科二類	1,205	1,205	353	353	1,320	1,320	354	354	1,065	666	1,731	328	38	366						
文科三類	1,501	1,501	479	479	1,692	1,692	479	479	1,597	1,064	2,661	434	54	488						
理科一類	2,893	2,893	1,129	1,129	3,045	3,045	1,129	1,129	3,012	2,341	5,353	1,045	125	1,170						
理科二類	2,094	2,094	547	547	2,266	2,266	547	547	1,946	637	2,583	508	60	568						
理科三類	541	541	98	98	418	418	90	90	410	153	563	80	10	90						
全科類		3,166	3,166	100	100	3,485	3,485	100	100											
合計	9,877	3,166	13,043	3,007	100	3,107	10,083	3,485	13,568	3,000	100	3,100	9,532	5,652	15,184	2,768	329	3,097		

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

### 高校卒業年別の合格比率

科 類	区 分	平成 21 年度			平成 20 年度			平成 19 年度		
		前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計
文科一類	現 役	65.3 %			68.3 %			65.7 %	59.5 %	65.0 %
	1 浪	31.2			28.9			31.9	38.0	32.5
	2 浪	3.0			2.0			1.6	2.4	1.7
	3 浪以上等	0.5			0.8			0.8	0.1	0.8
文科二類	現 役	61.5			62.7			61.6	65.8	62.0
	1 浪	36.8			34.5			35.0	31.6	34.7
	2 浪	1.7			2.3			2.4	2.6	2.5
	3 浪以上等	0.0			0.5			1.0	0.0	0.8
文科三類	現 役	63.0			58.9			65.9	61.1	65.3
	1 浪	33.4			37.4			29.3	25.9	28.9
	2 浪	1.5			3.1			3.2	5.5	3.5
	3 浪以上等	2.1			0.6			1.6	7.5	2.3
理科一類	現 役	69.8			70.6			74.9	72.0	74.6
	1 浪	27.5			27.2			23.8	17.6	23.2
	2 浪	1.4			1.5			0.7	6.4	1.3
	3 浪以上等	1.3			0.7			0.6	4.0	0.9
理科二類	現 役	59.8			55.8			57.9	53.3	57.4
	1 浪	36.4			37.5			37.6	35.0	37.3
	2 浪	2.7			4.2			2.6	6.7	3.0
	3 浪以上等	1.1			2.5			1.9	5.0	2.3
理科三類	現 役	66.3			61.1			68.8	30.0	64.4
	1 浪	23.5			25.6			21.3	30.0	22.2
	2 浪	3.1			6.7			3.8	20.0	5.6
	3 浪以上等	7.1			6.6			6.1	20.0	7.8
全科類	現 役		70.0			75.0				
	1 浪		28.0			18.0				
	2 浪		1.0			2.0				
	3 浪以上等		1.0			5.0				
合計	現 役	65.2	70.0	65.4	64.5	75.0	64.8	67.4	63.2	66.9
	1 浪	31.5	28.0	31.4	31.7	18.0	31.3	29.6	26.7	29.3
	2 浪	2.0	1.0	1.9	2.6	2.0	2.5	1.8	5.8	2.3
	3 浪以上等	1.3	1.0	1.3	1.2	5.0	1.4	1.2	4.3	1.5

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

### 出身校所在地別合格者数及び比率

		平成 21 年度						平成 20 年度						平成 19 年度					
		前期		後期		計		前期		後期		計		前期		後期		計	
		合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %	合格者数 人	比率 %
東 京	862	28.7	40	40.0	902	29.0	889	29.6	34	34.0	923	29.8	926	33.5	115	35.0	1,041	33.6	
北 海 道	63	2.1	2	2.0	65	2.1	58	1.9	4	4.0	62	2.0	42	1.5	8	2.4	50	1.6	
東 北	91	3.0	5	5.0	96	3.1	91	3.0	3	3.0	94	3.0	90	3.2	11	3.3	101	3.3	
関 東 東京を除く	545	18.1	22	22.0	567	18.2	554	18.5	13	13.0	567	18.3	501	18.1	64	19.5	565	18.2	
北 陸	114	3.8			114	3.7	132	4.4	5	5.0	137	4.4	103	3.7	4	1.2	107	3.5	
中 部	320	10.6	7	7.0	327	10.5	317	10.6	9	9.0	326	10.5	240	8.7	28	8.5	268	8.7	
近 畿	442	14.7	9	9.0	451	14.5	441	14.7	21	21.0	462	14.9	398	14.4	52	15.8	450	14.5	
中 国	156	5.2	4	4.0	160	5.1	150	5.0	5	5.0	155	5.0	120	4.3	11	3.3	131	4.2	
四 国	106	3.5	1	1.0	107	3.4	95	3.2			95	3.1	85	3.1	12	3.7	97	3.1	
九 州 沖縄を含む	296	9.9	10	10.0	306	9.9	265	8.8	6	6.0	271	8.7	255	9.2	22	6.7	277	9.0	
検定その他	12	0.4			12	0.4	8	0.3			8	0.3	8	0.3	2	0.6	10	0.3	
合計	3,007	100.0	100	100.0	3,107	100.0	3,000	100.0	100	100.0	3,100	100.0	2,768	100.0	329	100.0	3,097	100.0	

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。



## INTERVIEW

知の構造化センター  
松本 洋一郎 前センター長  
(理事・副学長)

知の構造化センターは、自律分散的に創造される膨大な知識を構造化して、新しい価値に結びつけることを目的とし、2007年5月に設立されました。現在、「進化する教科書」をはじめとする様々なプロジェクトを進めており、今後の活動が目まぐるしくなっています。今回は初代センター長の松本洋一郎先生を訪ね、知の構造化センターの活動や今後の抱負などについて、お話を伺いました。

### Q. センター設立の背景と目的は？



**松本** 知識が爆発的に増えて、その膨大な知識を処理しきれなくなった、ということが背景にあります。色々な知識を使うとなると、それを構造化して使いやすくしなければなりません。どのように構造化したら良いかを考えたとき、ITと組み合わせて知識を可視化して見せることが重要だろうということになりました。このような知識の可視化ツールの開発というのが、知の構造化

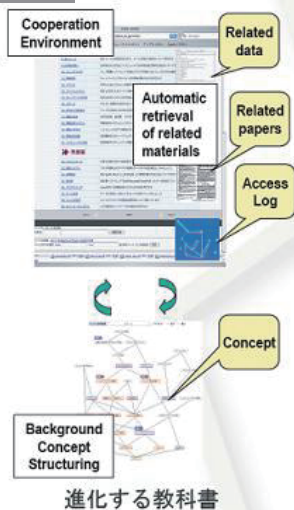
センター設立の根幹にあると言えます。また色々な人に発信し、多くの分野の融合を図りたいので、言葉(ターミノロジー)を共通化して、具体化・明示化して見せることがポイントだと思います。

### Q. 今、特に力を入れている分野は？

**松本** 一つは「進化する教科書」です。今行われている教育をもっと効果の高いものにしていかないといけないと思っています。特に優れた人材を輩出するためのツールの開発は、日本にとって極めて重要だと考えます。「進化する教科書」は、教員の講義ノートを東大独自のwikiシステム上に実装したもので、研究成果を迅速に反映できるなど、様々な利点があります。学生が「進化する教科書」で最新の知識を得られる、という訳です。

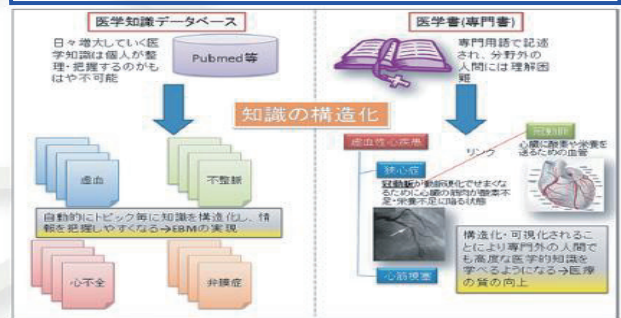
もう一つは医療分野です。医師の診断を手助けするような、システムを作れないかと考えています。単なるカルテ情報ではなく、診断結果のデータベースを整備し、その医療情報を有効に活用するための手法はどういうところにあるのか、というような研究もしています。これは医学部附属病院と共同で行っていますが、今後全国的に展開していければ良いと思います。

また知の構造化の技術を、歴史などの文系の分野でも使ってもらえるようにしたいと思っています。例えば岩波書店の「思想」という雑誌をデジタル化し、その時代にどういったキーワードがどのように使われているかを可視化することによって、研究者が議論できるようなツールの開発にも取り組んでいます。



## 総長室総括委員会とは？

総長室の下に設置された、室、本部、機構といった組織をまとめる、本部における教授会のような役割を担っています。  
総長室総括委員会HP: <http://cirp.u-tokyo.ac.jp>



## 医学知識の構造化・可視化

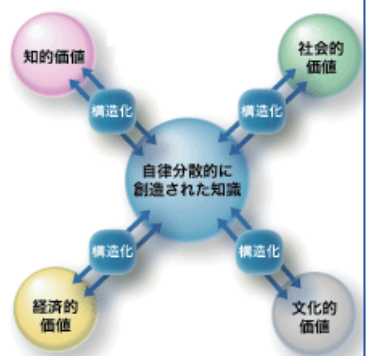
### Q. 今後、知の構造化が必要と思われる分野は？

**松本** 一番インパクトが強いのは、先ほど申し上げた医療分野だと思います。色々な治療方法がありますが、「こういう診断の時に、この治療をしたら成績はこうだった」というようなデータベースが構築されていけば、医師の診断・治療の正確さも向上するでしょう。また薬の効き方は生活習慣やDNAの違いで異なると考えられますが、現在、薬の有効性などのデータの多くはアメリカでの治験に基づいているのです。ですから、日本でもまず多様な薬のデータベースをきちんと整備する必要があります。データベースができあがれば、薬の開発もしやすくなるでしょうし、ずっと省力化できると思います。そしてそれが可能になれば、その方法を世界の人に使ってもらえるようになると思います。

研究をするにしても、日本人の数は限られているわけですから、優秀な人材を育てつつ効率の良い研究スタイルや新しい技術の開発体制を考えていく必要があります。ただし色々な研究手法を否定するのではなく、多様性を確保しながらどうやって効率をよくしていくかが非常に重要なターゲットになっています。

### Q. 今後の抱負は？

**松本** 知の構造化センターの研究成果を多くの人に使ってもらえるように、早く可視化エンジンなどを整備したいと思っています。皆さんに使ってもらってその有効性を確認し、それを元にもっと改良していけば、知の構造化の手法をより良いものにしていくことができます。またそれが学術的価値、社会的価値、経済的価値や文化的価値につながるように、できるだけ早くアウトカムを世の中に出していきたいと思っています。



そして今、特に取り組みたいのは、環境やエネルギーの問題です。これらの問題に対する著書も多く出ているので、それを構造化して見せ、オープンなディスカッションができるようなものを作りたいと思っています。またディスカッションを経て、明確なビジョンを持った政策を提言すれば、東京大学が社会に対して貢献したということになるでしょうし、そういうことが可能な仕組みを、知の構造化センターを核に他のプロジェクトと連携して、発展させていきたいと思っています。

● 関連ホームページ ● (インタビューー: 神谷・長田)

知の構造化センター <http://www.cks.u-tokyo.ac.jp>

問い合わせ先: 本部 研究機構等支援グループ (内線20484)

## 産学連携協議会平成20年度年次総会、アドバイザリーボードミーティング(ABM)

### ABMから様々な事業が実現

3月16日(月)、平成20年度第2回アドバイザリーボードミーティング(ABM)が経団連会館で開催されました。

ABMの討議を踏まえて今年10月にスタートした世界に通用する人材育成を目指した「エグゼクティブ・マネジメント・プログラム(EMP)」には企業、官庁から28人が受講し、幅広い分野に渡る教養講義がとくに高い評価を受けたことが報告されました。また4月1日からは、高齢社会総合研究機構を設立し、ジェロントロジー教育・研究の国際的拠点構築を目指すなど、ABMでの討議結果が着実に実を結んでいます。産業界アドバイザーの榊原定征(東レ)社長は東京大学が世界の知の拠点となることに期待を寄せ、小宮山宏総長が大学の国際化が様々な問題解決の糸口となるとの考えを示しました。



熱心に討議する産業界アドバイザー(左)と大学側

### 大学の国際化に向け産学連携の一層の推進を

ABM終了後、経団連ホールで東京大学産学連携協議会平成20年度年次総会が開催されました。同協議会は産業界との一層の連携促進を目的に設立されたもので、総会後の懇親会でも経済・産業界と大学のパイプを強化していくことを確認しました。

小宮山宏総長の挨拶、渡文明経団連副会長の来賓挨拶の後、藤田隆史産学連携本部長が活動を報告。そのなかで海外企業との共同研究は2007年の8件から2008年には2倍近くに増加するだろうとの見通しを示しました。また東京大学エッジキャピタル(UTEC)が投資する大学発のバイオベンチャーが3月に株式上場することを報告、投資活動が東京大学の教育・研究にフィードバックされ産学連携の質の向上につながる事が期待されます。



挨拶する小宮山総長と濱田新総長(左)

### 【第14回科学技術交流フォーラム開催】サービス領域での新展開に企業が強い関心

第14回科学技術交流フォーラム「サービスイノベーション—サービス情報基盤の確立に向けて—」が3月9日(月)、情報学環・福武ホールで開催されました。定員200名に対し280名を越す事前申込があり、大盛況に終わりました。今回のフォーラムは東京大学と企業の研究者で構成された「サービスイノベーション研究会\*1」での成果発表の場と位置付けられたこともあり、サービスビジネス展開で課題を抱える企業の方々からサービス領域での新展開を期待して集まったものと思われます。文部科学省の岩瀬公一科学技術・学術総括官、経済産業省の田中茂明サービス政策課長からは来賓挨拶で、サービスイノベーション研究



パネリストの議論を熱心に聞き入る参加者

で先行する東京大学のさらなる発展を期待されました。基調講演では同研究会委員長の武市正人情報理工学系研究科教授が情報社会のサービスに関わるさまざまな現象を

\*1 2006年10月から「サービスを科学する」という視点に立ち、企業と連携して実施した研究活動のこと。

連絡先：産学連携本部(本部産学連携グループ)  
電話：内線22857(外線03-5841-2857)  
ホームページ：<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>



サービスイノベーション研究会  
委員長：武市正人教授

分析してシステムを実現するための方法論を体系化した「サービス情報基盤」の確立を提言\*2しました。さらに古田一雄工系研究科教授が既存要素技術・融合領域の視点、須藤修情報学環教授が公共サービスの視点、池田謙一人文社会科学系研究科教授が社会心理学的視点からそれぞれ成果報告しました。妹尾堅一郎特任教授(知的資産経営)の特別講演では、学術的アプローチにマネジメントの視点が加わったことで企業側の方々の関心を集めました。続くパネル討論では、南谷崇教授(先端科学技術研究センター)が司会を務め、討論の後、サービス情報基盤の確立などを内容とする共同宣言を読み上げました。

### 参加者の多くはサービス情報基盤の必要性を認識

フォーラム終了後のアンケートでは融合研究領域の方法論の確立、サービス現場の実証研究など具体化に向けた研究を期待する声が多く聞かれました。産学連携本部ではこれらの声に応える「UCRコミュニティ」を2009年度に発足させる予定で準備を進めています。

### 産学連携が求められるサービス分野

サービス分野は融合的な領域での連携が多い、目標となるニーズが大きく変化する、顧客へのサービス提供と直結した研究開発体制が必要——などにより産学連携が強く求められる分野と思われます。今回の提言が起爆剤となり、学界と産業界でのサービスに関する研究開発が活発化し、学術面でのレベルアップと産業界への貢献に繋がることを願っています。

\*2 <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/service-innovation/>

DUCR

検索

**DUCR**  
Division of University Corporate Relations  
The University of Tokyo



## ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～ No. 17

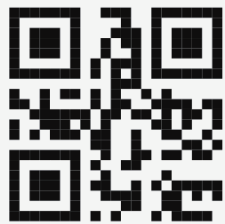


### 東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！



東大ナビ  
はじまる

ケータイでお得なイベント情報をGET!

詳しくは utnav.jp にアクセス。  
または mail@utnav.jp に空メール!

東京大学 教育企画室



### イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jp に空メール送信！

- この記事のQRコードから
  - mail@utnav.jp宛てにメール送信
  - 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!



### イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます

- http://utnav.jpにアクセス
  - イベント掲載フォームから送信！
  - 追ってスタッフよりご連絡致します
- 教育企画室TREEオフィスまで！
- 内線；27823（重田）
  - メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
  - オフィス；本郷キャンパス 第二本部棟403号室

## インタープリターズ・ バイブル vol. 21



科学技術振興調整費新興分野人材育成 科学技術インタープリター養成プログラム

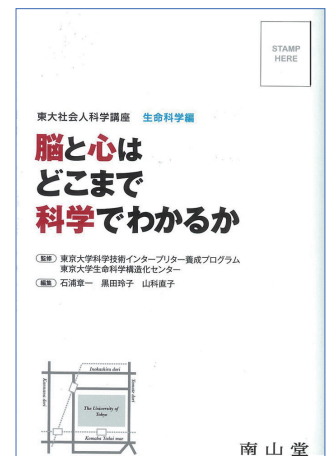
### 大学院インタープリター生への希望

石浦 章一

総合文化研究科 教授  
科学技術インタープリター養成プログラム担当

東京大学の大学院生を対象に始まった科学技術インタープリター養成プログラムも、いよいよ最後の年度になった。プログラム修了生も次々と社会に羽ばたいていっており、その効果が表れるのはいつの日だろうか、楽しみなことである。先日行われた修了発表会でも、HP立ち上げから出前授業まで、のびのびと新企画に挑戦してくれている姿は頼もしいものがある。昔に比べて、どの学部でもサイエンスカフェを行って自分の仕事をやさしく説明したり、学園祭でポスターセッションを行っているのは、それはそれで素晴らしいことなのだが、だが待てよ、東京大学としてはもっと違う企画があってもいいのではないかと、という声が身体の内側から沸きあがってくる。理由は簡単なことである。面白実験が科学の発展につながるか、という単純な疑問がぬぐえないためである。出前で、大学院生が料理番組のような実験をして、それが見ている中高生の心を打つかどうか、科学の真髄をやさしく伝えられたか、という点に関しては疑問の声があがるだろう。とすれば、インタープリターとしての大学院生の行うべき仕事は、そのあたりの教員がサイエンスカフェで行っているような自分の研究の紹介ではなく、考える力を養う実験の紹介、先人の思考過程を追うような実験と結果の解釈、に特化すべきではないだろうか。本学の大学院生の知識に見合うような論理構成をとり、しかも私たちのような手垢がついた教員ではなく、リアルタイムに科学を学びつつある大学院生でしかできない授業が見たい。私自身は、真似は大嫌いである。テレビで見かける科学プロデューサーの考え抜かれた実験や一流の研究成果を網羅した科学館の展示は尊敬に値するが、生身の、しかも発展途上の人間が教える「一筋縄では行かない現実の科学」にも真実が含まれているはずであり、庶民の科学意識というのはそのようなものに親しみをもつのではないかと思う。大学院生の出前授業がどこまでできるか、それも楽しみの一つである。

【追伸】科学技術インタープリター養成プログラムと生命科学構造化センターの生命科学の今を伝えるコラボ企画が、「脳と心は科学でどこまでわかるか」として出版された。ご批判を仰ぎたい。



★科学技術インタープリター養成プログラム

URL:<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/>

## ワタシのオシゴト / 第38回

Rings around the UT

工学系・情報理工系等事務部 財務グループ 調達チーム

尾崎 正明さん

## 社会科見学気分楽しく

私は、平成8年4月1日に採用されて以来ずっと工学系・情報理工系等であり、数えてみればこの4月で14年目に突入です。専攻事務の時には経理系全般と総務系の一部を担当し、そこで研究室と身近に接した様々な経験は厚みとなっているらしく、現在の勤務場所である部局中央事務における調達担当（契約案件対応や、執行全般の質疑応答など）でも非常に役立っていると感じております。今の仕事でのやりがいは、書類完成などの満足感もありますが、先生や経理担当の方から気さくに「ありがとう。」と直に声をかけていただける時につきます。（心の中で小さくガッツポーズ☆）



“着実に、忍耐強く、賢くあれ”で。

調達では先端設備（ロボット・計測器・加工機など）の契約に際しニュース等で見聞きした物がそのまま登場する事が特に面白く、たまに先生から優しく「見せてあげるからおいで。」と誘われる時は社会科見学のようですし、経験・勉強を次の調達案件に活かすよこびを感じております。



「サッカーバカ」っていい響き♪

得意ワザ：どこでも寝れる事。

自分の性格：丑年生まれのくせに、オラオラオラっと猛進タイプ。（←フットサルの時には相手から嫌がられるので、少し反省ですが）

次回執筆者のご指名：三浦勝正くん

次回執筆者との関係：同年同日で工学部に採用されてからずっとの腐れ縁・・・。

次回執筆者の紹介：「自分、〇〇ッス」が口癖である根からの体育会系。信頼性はバツゲンです。



噴水

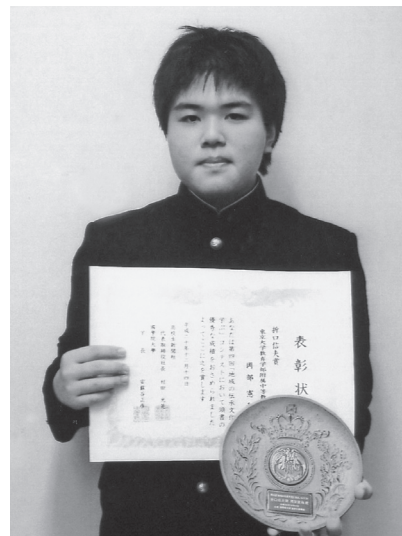
### 教育学部附属中等教育学校の生徒が「第4回地域の伝承文化に学ぶコンテスト」で最優秀賞・折口信夫賞を受賞

2008年12月14日（日）國學院大學渋谷キャンパス若木タワー 0509 教室で開催された「第4回地域の伝承文化に学ぶコンテスト」（主催：國學院大學・高校生新聞社）授賞式において、本校5年生の岡部憲和君の作品「満州」が「研究レポート部門・個人」で最優秀賞・折口信夫賞を受賞した。

このコンテストは、地域研究を発表する機会を持ってもらうとともに、國學院大學の持つ伝承文化に関する資産に触れてもらい、さらに研究を進めてもらうことを目的としている。

岡部君は、「満州」と題して、戦後満州から引き上げてきた80代の女性にインタビューしてレポートにまとめた。聞き取りをしたなかで、「戦時中は、日本の方が立場が上だったが、戦後は、逆転して中国の方が立場が上になったこと。戦後、中国の人に優しくされて、子どもだけを日本に返すのは家族がばらばらになるのでやめた方がよいと諭され、その通りにしたことで、家族4人全員がそろって日本に帰国できたこと」がわかった。

「1年前のこのコンテストでは、優秀賞であったが、今年はそれを上回る成果が出せて嬉しかった。さらに折口信夫賞を受賞して感動した」と感想を述べてくれた。さらに、「今後も戦争経験者が減ってしまうので、後回しにせず、今しかできないので、一人でも多くの方から話を伺ってまとめていきたい」と抱負を語ってくれた。今後も岡部君の活躍に期待したい。



受賞した岡部君



## 教育学部附属中等教育学校で2年総合学習発表会が開催される

3月10日（火）10時から12時30分まで、附属中等教育学校の体育館と新教育棟多目的室において、2年総合学習発表会「身体・表現」が開催された。数多くの保護者の方も参観した。

2年生の後期の総合学習は、全員が「和太鼓」「新体操」「演劇」を2時間ずつ体験した後、その中から一つを選択しさらに深く学んでいく。この日はその締めくくりとしての発表会である。

体育館において、まず「和太鼓」の演奏が行われた。三浦半島に伝わる「ぶち合わせ太鼓」の白熱した演技を「華・波・星」の3組が行った。

つぎに、「新体操」（4年目）が行われた。ボール・リボン・フラフープ・ゴースを用いて、華麗な動きで観衆を魅了した。

最後に「演劇」は、「Leaving School 振り返ることなく、胸をはって」（作：阿部順）で、男子生徒の退学をめぐる女教師の葛藤を描いている。生徒役や先生役を見事に演じ切った。

発表会のまとめでは、それぞれの講師の方々から感想をいただいた。そのなかで、「表現するときには照れや恥じらいがつきものであり、授業の始めにはそれぞれが感じていたのだと思う。しかし、発表している様子を見てみると恥じらいなどは感じず堂々と表現し演じきっていた。2年生にとって本校での生活はまだ4年間もある。その中で恥じらいなどは捨て自分自身を演じられるようになると、表現活動だけでなく学習も伸びていく。今回の体験を大切にしてほしい」という趣旨の感想があった。



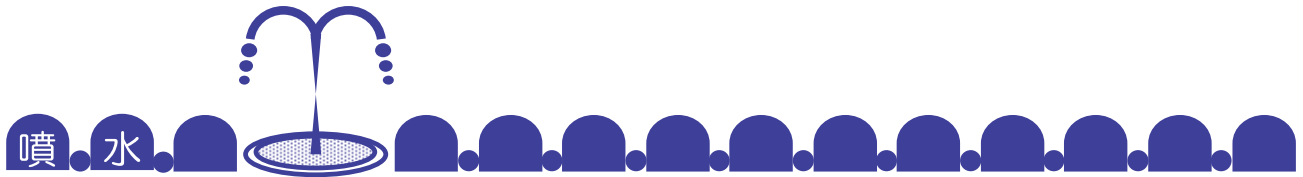
新体操の発表の様子



演劇発表の様子



太鼓の発表の様子



## 教育学部附属中等教育学校で平成 20 年度卒業式が行われる

3月6日（金）教育学部附属中等教育学校で、平成20年度卒業式が行なわれた。当日は雨混じりの天候であったが、58回生108名は晴れやかな表情で卒業証書を手にした。

式には、岡村定矩理事・副学長、金子元久教育学部長、千明賢治本部教育・学生支援系学務グループ長、江原勉教育学部事務長、入交亜樹本部教育・学生支援系学務グループ教務チーム職員をはじめ、多くの来賓の方々にご列席いただき、厳かな雰囲気の中にあたたかさのある卒業式となった。

南風原朝和校長は祝辞の中で、「厳しい社会情勢であるからこそ、本校で培った『本物の力』が必要とされている。これまで支えてくれた周囲の人々に恩返しができるよう、自信と誇りをもってそれぞれの道を歩んで欲しい」と述べた。

岡村理事・副学長は、「卒業をはじめとした人生の節目は自分を変える良い機会である。卒業生には無限の未来の時間があり、人間としての成長はこれからが本番である。多くの人と心を開いて語り合い、自ら学ぶ意欲を持ちつづけて欲しい」と話された。

金子教育学部長は、「『不確実性』が続く21世紀、既成の枠組に囚われず、個人の力を十分に発揮できる可能性があるといえるのではないか。本校における自立的な教育の成果は卒業生にとって大きな財産となっているはずである。自分自身の考え方をしっかりと持ちそれを自覚的に育てていって欲しい。また一方で自分に不足していると思われる力があれば、ためらわず基礎にたちかえって学んでいくことが大切である」と話された。

卒業式に続いて開催された「卒業を祝う会」では、元担任教諭で在職中に亡くなられた故井上俊雄先生への卒業報告を行い、卒業生は皆、未来に続くそれぞれの道をしっかりと歩いていくことを改めて決意した様子であった。



式辞を述べる南風原朝和校長

## 教育学部附属中等教育学校で課題別学習発表会が行われる

3月11日（水）13時から15時に教育学部附属中等教育学校において、課題別学習発表会が行われた。この会では、生徒が今年度の課題別学習での学習成果を口頭やポスター、演技を用いて発表した。

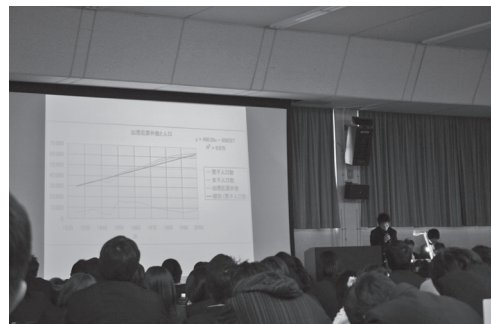
課題別学習は、「総合的な学習の時間」としておこなわれており、3、4年生（中学3年、高校1年）がともに学ぶ、本校独特の取り組みである。教員が設定したテーマの講座から生徒が1つを選び、1年間を通して研究をおこなう。今年度の講座は、「農業に学ぶ」「計算機科学入門」「星空」「英語で JAPAN」「つながる」「NGO入門」「ことばで啓く人間力」「材料加工論入門」「身近な事柄で数学を考える」「モデル化とシミュレーション」「日本の民族芸能」「心とからだ」「空想科学博物館」の13講座である。

「星空」の発表では、生徒は、自分たちが調べた星座の由来を説明した。また、生徒がプラネタリウムにおいて、機器の操作方法を体験したことや自分たちが調べた星座を解説したことが貴重な体験になったようだった。この講座を通して生徒は「星を見るのが好きになった」と話していた。

「NGO入門」では、生徒は環境と貧困について学んだ。これらに関連するNGOを訪問して話を聞いたことや、フリーマーケットへ参加して得られた収益を寄付したことなどを報告した。

「モデル化とシミュレーション」では、基本的なことを学んだあと、個人で研究した内容を発表した。生徒が取り組んだテーマは、「新型コロナウイルスが発生したらどうなるか」、「人口と凶悪犯罪件数」などであった。

この発表会を通して、生徒たちが1年間さまざまな学習をしてきたことが分かった。発表会の最後に終わりの言葉として代表生徒が「1年間学んだことは人生の財産になった」「卒業研究に生かしましょう」と話した。



課題別学習発表会の様子

# INFORMATION

## シンポジウム・講演会

### シンポジウム・講演会

大学院理学系研究科・理学部、大学院総合文化研究科・教養学部

### 地球惑星科学公開シンポジウム「気候異変～過去・現在・未来～」

本学の地球惑星科学系3学科では、地球惑星科学の研究の最前線と、学科での教育内容を駒場生に紹介するために、毎年「地球惑星科学公開シンポジウム」を開催しています。これまでのテーマは、地球のフィールドワーク、地球惑星科学と社会、惑星科学のリアリティーでしたが、本年は「気候異変」をテーマとして以下の2つの講演を行います。また、大学院学生による研究紹介、学科生による学科の教育や生活の紹介もあります。対象は教養学部1、2年生ですが、関心をお持ちの高校生、大学生、一般の方の参加も自由です。

日時：5月8日（金）18：00～20：00  
場所：駒場キャンパス数理科学研究科棟 大講義室  
参加費：無料

プログラム：  
東塚知己（理学系研究科地球惑星科学専攻）  
「もうひとつのエルニーニョ：インド洋ダイポールモード現象」  
茅根 創（理学系研究科地球惑星科学専攻）  
「地球温暖化によって水没するツバルの真実」

#### 大学院学生の研究紹介

東京大学で地球惑星科学を学ぶには  
理学部地球惑星物理学科／地球惑星環境学科、教養学部  
広域科学科

問い合わせ先  
理学系研究科地球惑星科学専攻 茅根 創  
(kayanne@eps.s.u-tokyo.ac.jp)



高校生・大学生のための地球惑星科学公開シンポジウム  
気候異変～過去・現在・未来～のポスター

## シンポジウム・講演会

### 医科学研究所

### 第36回医科学研究所創立記念シンポジウム 「感染防御の最前線」

医科学研究所では、伝染病研究所から医科学研究所への改組を記念して、毎年、創立記念シンポジウムを開催しており、今年は以下のとおり実施します。

皆様のご来場をお待ちしています。（参加費無料）

日時：5月29日（金）13:00～17:00  
会場：医科学研究所 講堂

プログラム  
13:00～13:10 開会挨拶 所長 清木元治

13:10～13:50  
1. 自然免疫システムにおける病原体センシングの分子基盤  
三宅健介（医科学研究所）

13:50～14:30  
2. 感染免疫における樹状細胞の役割  
小安重夫（慶應義塾大学医学部）

14:30～14:50 休憩

14:50 ~ 15:30

3. マラリア原虫のアキレス腱を標的とする SE36 マラリアワクチン開発  
堀井俊宏 (大阪大学微生物病研究所)

15:30 ~ 16:10

4. エイズワクチン開発: HIV 感染防御に何が必要か?  
俣野哲朗 (医科学研究所)

16:10 ~ 16:50

5. 核酸と免疫: 自己と非自己の識別機構  
谷口維紹 (東京大学大学院医学系研究科)

16:50 ~ 17:00 閉会挨拶 副所長 井上純一郎

問合せ先: 医科学研究所大学院事務室 (内線 72045)  
gakumu@adm.ims.u-tokyo.ac.jp



### お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第 519 (4 月 1 日) 号の発行  
——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15 号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

第 519 号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

濱田純一: 時代に「知の光」を  
山影進: 駒場キャンパスで過ごすことの意味

〈教養学部 教員紹介 2009 (1)〉:  
哲学・科学史/心理・教育学/人文地理学/物理  
/化学/生物/情報・図形/宇宙地球/相関自然  
/スポーツ・身体運動/数理科学研究科

清水剛: 東アジア四大学フォーラムの新しい試み  
斎藤兆史: 駒場の飲食店案内 (大幅改訂版)  
石垣琢磨・松島公望:  
駒場には「よろず相談所」があります  
~その場所は、学生相談所です~  
斎藤文修: 進学情報センター  
宮内由美子: 留学生相談室より

古矢旬: アメリカ太平洋地域研究センター  
石井洋二郎: 駒場図書館への招待  
伊藤元己: 駒場博物館案内  
山口和紀: 情報教育棟  
石川隆: 保健センター駒場支所  
部長室: 初年次活動センター学  
事務部: 教育組織・事務部等

青木貴稔: 〈時に沿って〉いま思うこと  
澤井哲: 〈時に沿って〉専門性の解き方- 30 代編

〈辞典案内〉  
田尻芳樹: 英語  
鍛冶哲郎: ドイツ語  
坂原茂: フランス語  
安岡治子: ロシア語  
西中村浩: ポーランド語  
村松真理子: イタリア語  
竹村文彦: スペイン語  
木村秀雄: ポルトガル語  
日向太郎: 古典語-ギリシア語・ラテン語-  
吉川雅之: 現代中国語  
品田悦一: 国語辞典  
齋藤希史: 漢和辞典  
生越直樹: 韓国朝鮮語  
杉田英明: アラビア語  
藤井毅: ヒンディー語  
高松洋一: トルコ語  
サイフル・バハリ・アフマッド:  
マレーインドネシア語  
中井和夫: ウクライナ語  
柴宜弘: セルビア・クロアチア語  
岩月純一: ベトナム語  
上村静: ヘブライ語  
永ノ尾信悟: 古典語-サンスクリット語-  
前田君江: ペルシア語  
浅見靖仁: タイ語  
王 嵐: 台湾語  
木村理子: モンゴル語  
吉川雅之: 広東語  
楊凱榮: 上海語  
高橋英海: シリア語-シリア・アラム語-  
加納啓良: インドネシア語

進学情報センター: シンポジウム  
ピアノ委員会: ピアノコンサート



## お知らせ

### 附属図書館

#### 総合図書館備付け図書の推薦について（平成21年度夏学期）

総合図書館では、学生の学習・研究を助け、また教養をより豊かにするために、全学の教員（常勤講師以上）から図書を推薦していただく制度を設けております。

つきましては、下記のとおり図書の推薦をお願いいたします。

1 取りまとめ窓口 各部局図書館（室）

2 推薦期限 5月7日（木）

なお、その他の図書の推薦は随時受け付けます。

3 推薦図書の範囲

- (1) 講義に密着した図書は、本郷キャンパスの講義を対象としています。
- (2) その他、学生の教養書としてふさわしいものを推薦ください。  
ただし、雑誌および学生にとってあまりに高度な専門図書、医学・薬学臨床系図書は除いてください。

4 推薦方法

総合図書館備付け図書推薦要領によります。

※推薦要領は、各部局図書館（室）に備付けております。

\*附属図書館 Web サイト

(<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/>)「ニュース」にある「総合図書館備付け図書の推薦受付について」もご参照ください。

## お知らせ

### 情報基盤センター

#### “情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

レポート・論文や、ゼミ発表の準備の際、文献探して困ったことはありませんか？

情報基盤センター図書館電子化部門では、“情報探索ガイダンス” 各種コースを実施しています。

5月は本学でサービスの提供を開始したばかりのWeb版の文献管理ツール「RefWorks」（レフワークス）のコースを新設しました。論文執筆のための文献リスト作成などにぜひご活用ください。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

#### ●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー  
(各回先着12名。予約不要。)

#### ●日時・コース：

※どのコースも、自宅からの利用方法の説明を含みます。

■5月8日（金）13:30～14:30 文献検索早わかり

■5月21日（木）15:00～16:00 文献検索早わかり

図書、電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事など、各種文献検索方法を、まとめてコンパクトに解説します。

■5月18日（月）12:00～13:00

日本の論文を探すには？

■5月26日（火）15:00～16:00

日本の論文を探すには？

4月に大幅リニューアルされたばかりの、日本国内の雑誌論文の代表的データベース「CiNii」（サイニイ）の使い方を中心に解説します。

■5月19日（火）13:30～14:30

電子ジャーナルを利用するには？

■5月29日（金）15:00～16:00

電子ジャーナルを利用するには？

電子ジャーナルを使えば、欲しい論文の本文がWebで簡単に見られます。このコースでは、代表的な学術出版社の電子ジャーナルサイトを例にとって実際の利用方法を解説します。また、「UT Article Link」（東京大学学術論文リンク）を使ってデータベース検索結果から電子ジャーナルへアクセスする方法も紹介します。

■5月22日（金）15:00～16:00

Webで文献の「検索」から「整理」まで～RefWorksを使うには～【New！】

4月よりWeb上で使える文献管理ツール「RefWorks」のサービスを開始しました。データベースからデータを取り込んで自分用の文献リストをWeb上に保存し、論文の参考文献リスト自動作成などに活用できる、便利なツールです。Web上で他の人と文献リストの共有も可能です。ユーザ登録や基本的な使い方を実習します。

#### ●参加費：無料

月	火	水	木	金
				5/1
5/4	5/5	5/6	5/7	5/8 13:30 ～ 14:30 早わかり
5/11	5/12	5/13 (※1)	5/14 (※2) (※3)	5/15 (※2)
5/18 12:00 ～ 13:00 日本の論文	5/19 13:30 ～ 14:30 電子ジャーナル	5/20 (※2)	5/21 15:00 ～ 16:00 早わかり	5/22 15:00 ～ 16:00 RefWorks
5/25	5/26 15:00 ～ 16:00 日本の論文	5/27	5/28	5/29 15:00 ～ 16:00 電子ジャーナル

- ※1 本号の記事“セミナー「学術雑誌の評価指標を考える：インパクトファクターと新指標アイゲンファクター」のお知らせ”を参照
- ※2 本号の記事“Web版の文献管理ツール「RefWorks」サービス開始のお知らせ～利用説明会も開催～”を参照
- ※3 本号の記事“韓国語による「留学生向け情報探索ガイダンス」のお知らせ”を参照

#### ●出張講習会、随時受付中です！

授業やゼミなどに、出張いたします。ご希望の日時、会場、内容、人数、連絡先を、メールで下記までご連絡ください。(無料)

ご希望の内容・レベルに合わせて、講習いたします。出張講習会については、下記サイトをご参照ください。  
(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

#### ●問い合わせ：

情報基盤センター 学術情報リテラシー係  
03-5841-2649 (内線：22649)  
[literacy@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:literacy@lib.u-tokyo.ac.jp)  
<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

## お知らせ

### 情報基盤センター

#### セミナー「学術雑誌の評価指標を考える：インパクトファクターと新指標アイゲンファクター」のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、学術雑誌の評価指標に関する標記のセミナーを開催します。

今年2月、トムソン・ロイター社の学術誌評価分析データベース「Journal Citation Reports (JCR)」に、従来のインパクトファクター (Impact Factor) に加え、雑誌の評価や影響度を表す新たな指標として、アイゲンファクター (Eigenfactor) が導入されました。

このセミナーでは、インパクトファクターや新導入のアイゲンファクターなど、学術雑誌評価指標について、その意味や有効な活用法、留意点を解説します。

研究者の方々をはじめ、論文引用データに基づく学術雑誌や論文評価の新しい動向に関心をお持ちの皆様のご参加をお待ちしております。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

●会 場：本郷キャンパス 総合図書館3階 大会議室  
(先着 100名 事前申込みの方優先)

中継会場：柏図書館1階 メディアホール  
(先着 144名 事前申込みの方優先)  
(両会場とも座席に余裕があれば当日参加もOK)

●日 時：5月13日 (水) 15:00～16:30

●講 師：トムソン・ロイター・グループ  
トムソンコーポレーション株式会社  
シニアインフォメーション アナリスト  
宮入暢子氏

●参加費：無料

●申込方法：

学術情報リテラシー係 ([literacy@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:literacy@lib.u-tokyo.ac.jp)) 宛に以下のメールにてお申込みください。

- ・ 件名：5/13 セミナー参加希望
- ・ 本文：
  - (1) 参加会場 (※総合図書館、柏図書館のいずれか)
  - (2) 氏名 (3) 身分 / 学年 (4) 所属 (5) 講師への質問

●問い合わせ：

情報基盤センター 学術情報リテラシー係  
03-5841-2649 (内線：22649)  
[literacy@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:literacy@lib.u-tokyo.ac.jp)  
<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/index.html>

## お知らせ

情報基盤センター

### Web 版の文献管理ツール「RefWorks」(レフワークス) サービス開始のお知らせ ~利用説明会も開催~

情報基盤センター図書館電子化部門では、4月から、Web上で使える文献管理ツール「RefWorks」のサービスを開始しました。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも利用できます。

研究・教育・業務の様々な場面で多様な用途があります。どうぞご利用ください。

#### ● RefWorks を使うと、こんなことができます

##### 1) 自分用の文献データベースを Web 上に作成

各種文献データベースや Web サイトから必要なデータを RefWorks へ取り込み、自分用の文献リストとして保存・整理できます。データの保存件数は無制限です。保存しておいたデータは、Web 上にあるのでログインすればどこからでも参照できます。

##### 2) 参考文献リスト作成の自動化

RefWorks に保存しておいたデータは、論文執筆中に検索して呼び出し、文中の引用番号と末尾の参考文献リストを自動作成することができます。

##### 3) 文献フォルダの共有・公開

RefWorks で作成した文献リストは、授業やゼミで、あるいは研究グループのメンバーなど特定のメンバーと Web 上で共有することができます。共有する相手が RefWorks ユーザでなくても可能です。

RefWorks 契約機関に所属していない人に文献リストを公開することもできますので、研究業績リストの Web 上での公開などにも使えます。

#### ● ユーザ登録が必要です

RefWorks を利用するには、まず学内の端末から RefWorks にアクセスし、画面上でユーザ登録（個人アカウントの作成）が必要です。

登録方法やマニュアルは、下記のサイトをご参照ください。

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/faq.html>

#### ● RefWorks へのアクセスはこちら

<http://www.refworks.com/refworks> にアクセスし、ログインしてご利用ください。

自宅など学外からも、ユーザ登録時にメールで通知される方法でアクセス可能です。

#### ● 利用説明会の日程

下記の日程で利用方法の説明会を開催します。本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。スライドとデモンストレーションによる説明です。実習はありません。(参加費：無料)

##### ■ RefWorks 説明会 in 本郷

特に分野を問わず、RefWorks 利用方法全般について説明します。柏図書館にて中継を視聴可能です。

日時：5月14日(木) 15:30～17:00

会場：本郷キャンパス 総合図書館3階 大会議室

(先着100名 事前申込みの方優先)

中継会場：柏図書館1階 メディアホール

(先着144名 事前申込みの方優先)

##### ■ 医学系向け RefWorks 説明会

PubMed、医中誌 Web から RefWorks へデータを取り込む方法など、特に医学系研究者を対象とした内容です。5/14と重複する内容も含まれます。

日時：5月15日(金) 15:30～17:00

会場：医学図書館3階 333 会議室

(先着150名 事前申込みの方優先)

##### ■ RefWorks 説明会 in 駒場

特に分野を問わず、RefWorks 利用方法全般について説明します。5月14日と同内容です。

日時：5月20日(水) 15:30～17:00

会場：駒場図書館会議室(カウンター集合)

(先着24名 事前申込みの方優先)

※どの会場も座席に余裕があれば当日参加もOKです。

##### ◆ 講師：株式会社サンメディア

e-Port 横川奈美子氏

e-Port マネージャー 馬淵沙織氏

##### ◆ 申込方法：

学術情報リテラシー係

([literacy@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:literacy@lib.u-tokyo.ac.jp))

宛に以下のメールにてお申込みください。

・ 件名：RefWorks 説明会参加希望

・ 本文：

(1) 参加会場 (※総合図書館、柏図書館、  
医学図書館、駒場図書館のいずれか)

(2) 氏名 (3) 身分 / 学年 (4) 所属 (5) 講師への質問

##### ● 問い合わせ：

情報基盤センター 学術情報リテラシー係

03-5841-2649 (内線：22649)

[literacy@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:literacy@lib.u-tokyo.ac.jp)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/index.html>

## お知らせ

情報基盤センター

### 韓国語による「留学生向け情報探索ガイダンス」のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、韓国語で行う「留学生向け情報探索ガイダンス」を開催します。

内容は、レポート・論文作成に役立つ、データベースを使った図書や雑誌論文の検索実習です。

入門的な内容ですので、新入学の留学生に限らず、初心者の方の参加も歓迎します。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

#### ●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー  
(先着12名 予約不要)

#### ●日時：5月14日(木) 13:30～14:30

詳細は下記のサイトをご覧ください。(韓国語)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/k/training-k.html>

#### ●参加費：無料

#### ●問い合わせ：

情報基盤センター 学術情報リテラシー係

03-5841-2649 (内線：22649)

[literacy@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:literacy@lib.u-tokyo.ac.jp)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

## お知らせ

低温センター

### 保安教育『低温講習会』のお知らせ

本郷キャンパスで液体窒素・液体ヘリウム利用者を対象とした講習会を下記の要領にて開催します。この講習会は高圧ガス保安法で義務付けられている保安教育の一環として行うものです。対象者は、主として今年度入学の修士課程1年生など新たに寒剤(液体窒素・液体ヘリウム)を利用し始める学生及び教職員です。研究室の該当者は、必ず出席するようお願いします。なお、申し込み方法は低温センターホームページ「低温講習会について」をご覧ください。5月8日(金)までにお申し込みください。

(<http://www.crc.u-tokyo.ac.jp/>)

#### 【内容】

- 高圧ガス保安法
- 寒剤の性質、事故原因と事故防止
- 容器の取り扱い 他

【問い合わせ先】低温センター 業務部門 内線 22853

【開催日】※第一回または第二回のどちらか1回を受講してください。

<第一回>

日時：5月14日(木) 14:30～16:30

場所：理学部1号館 小柴ホール

<第二回>

日時：5月19日(火) 14:30～16:30

場所：武田先端知ビル5階 武田ホール

## お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

### 第116回オルガン演奏会

日時：5月19日(火) 18時30分開演

場所：駒場Iキャンパス 900番教室

オルガン演奏：ヨハネス・ゲファート

G・D・ライディング (1664-1710)

プレリュード 変ホ長調

G・F・ヘンデル (1685-1759)

協奏曲第13番「カッコウとナイチンゲール」(J・ゲファートによるオルガン編曲)

J・S・バッハ (1685-1750)

トッカータ、アダージョとフーガ ハ長調 BWV 564

E・ファジャーニ (1972-)

J・S・バッハ風プレリュードとフーガ

E・ジグー (1844-1925)

スケルツォ ト短調, トッカータ ロ短調

A・ウィルシャー (1955-)

オルガンのためのコンサート用小品「私のベートーヴェン」

H・スマート (1813-1879)

大祝典行進曲

入場無料

主催：東京大学大学院総合文化研究科・教養学部

オルガン委員会

問い合わせ：Tel 03-5454-6139 (駒場博物館)

## お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

### 第63回小石川植物園市民セミナーのご案内

小石川植物園後援会が主催する第63回小石川植物園市民セミナーが下記の通り開かれます。今回は、本学総合研究博物館の池田博准教授による、ヒマラヤのフロラに関する講演です。ヒマラヤ地域の珍しい花々、現地での植物調査の実際、そして植物相研究の最前線に触れられる、絶好の機会です。本学関係者に限らず、どなたでも参加できます。どうぞ皆様お誘い合わせの上、是非ご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。

講師：池田 博（総合研究博物館准教授）

演題：「ヒマラヤに花を訪ねて」

日時：6月6日（土）13時～15時

場所：理学系研究科附属植物園本園（小石川植物園）柴田記念館

参加費：無料（但し、一般の方は入園料が必要です）

参加申込方法：6月1日（月）までに、往復葉書または電子メールにて後援会までお申し込み下さい。返信葉書ないし返信メールが招待状となります。なお参加ご希望多数の際は、お申し込み順に従い受付が締め切られることがあります。悪しからずご了承下さい。

主催・参加申込先：〒112-0001 文京区白山3-7-1

東京大学大学院理学系研究科附属植物園内  
小石川植物園後援会

koishikawa-koenkai@koishikawa.gr.jp

問い合わせ先：理学系研究科附属植物園

杉山宗隆准教授（03-3814-0368）

## お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

### 第6回高校生のためのサイエンスカフェ本郷

東京大学大学院理学系研究科で活躍する大学院生や若手研究者と、お茶を飲みながら気軽にお話してみませんか？最先端の研究のこと、大学での生活のこと、高校生の皆さんの質問になんでもお答えします！当日は研究室見学も予定しています。ぜひご参加ください。

総合タイトル：「宇宙と生命、その進化の謎を解く」

講演内容：

「星と惑星ができるまで —有機分子の進化—」

坂井 南美（理学系研究科 物理学専攻 助教）

「百聞は一見にしかず —生命の根幹、生体巨大分子に迫る—」

伊藤 弓弦（理学系研究科 生物化学専攻 博士課程3年 日本学術振興会特別研究員DC2）

日時：6月14日（日）13:00～17:00（12:30開場）

会場：本郷キャンパス 理学部1号館2階小柴ホール

対象：高校生

定員：50名 参加費無料 応募者多数の場合は抽選

締切：5月21日（木）

申し込み方法：詳細は次のURLからご覧ください。

<http://www.s.u-tokyo.ac.jp/cafe6>

主催：大学院理学系研究科・理学部

問い合わせ先：

電話：03-5841-7585

e-mail: kouhou@adm.s.u-tokyo.ac.jp

## 人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

	氏名	異動内容 (退 職)	旧 (現) 職等
21.3.30	稲葉 敦	辞 職 (産業技術総合研究所安全科学研究部門副研究部門長)	人工物工学研究センター教授
21.3.30	古江 頼隆	辞 職 (法務省特別職)	大学院法学政治学研究科教授
21.3.31	大沼 保昭	定 年	大学院法学政治学研究科教授
21.3.31	野崎 薫子	定 年	大学院法学政治学研究科教授
21.3.31	小俣 政男	定 年	大学院医学系研究科教授
21.3.31	玉置 邦彦	定 年	大学院医学系研究科教授
21.3.31	野本 明男	定 年 (大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター特任教授)	大学院医学系研究科教授
21.3.31	廣川 信隆	定 年 (大学院総合文化研究科生命科学構造化センター特任教授)	大学院医学系研究科教授
21.3.31	岡部 篤行	定 年	大学院工学系研究科教授
21.3.31	木村 文彦	定 年	大学院工学系研究科教授
21.3.31	鈴木 博之	定 年	大学院工学系研究科教授
21.3.31	松島 克守	定 年 (知の構造化センター特任教授)	大学院工学系研究科教授
21.3.31	毛利 尚武	定 年	大学院工学系研究科教授
21.3.31	佐藤 慎一	定 年 (理事 (副学長))	大学院人文社会系研究科教授
21.3.31	塩川 徹也	定 年	大学院人文社会系研究科教授
21.3.31	鈴木 泰	定 年	大学院人文社会系研究科教授
21.3.31	寺島 孝一	定 年	大学院人文社会系研究科准教授
21.3.31	岩澤 康裕	定 年 (電気通信大学教授)	大学院理学系研究科教授
21.3.31	佐藤 勝彦	定 年	大学院理学系研究科教授
21.3.31	松浦 充宏	定 年	大学院理学系研究科教授
21.3.31	中田 好一	定 年	大学院理学系研究科附属天文学教育研究センター教授
21.3.31	菊池 淑子	定 年	大学院理学系研究科准教授
21.3.31	吉村 宏和	定 年	大学院理学系研究科准教授
21.3.31	相良 泰行	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
21.3.31	祥雲 弘文	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
21.3.31	田付 貞洋	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
21.3.31	田中 忠次	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
21.3.31	西澤 直子	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
21.3.31	日野 明德	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
21.3.31	米山 忠克	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
21.3.31	神野 直彦	定 年	大学院経済学研究科教授
21.3.31	臼井 隆一郎	定 年	大学院総合文化研究科教授
21.3.31	大築 立志	定 年	大学院総合文化研究科教授
21.3.31	大貫 隆	定 年	大学院総合文化研究科教授
21.3.31	岡 秀夫	定 年	大学院総合文化研究科教授
21.3.31	鹿兒島 誠一	定 年	大学院総合文化研究科教授
21.3.31	里見 大作	定 年	大学院総合文化研究科教授
21.3.31	繁樹 算男	定 年	大学院総合文化研究科教授
21.3.31	杉橋 陽一	定 年	大学院総合文化研究科教授
21.3.31	鈴木 賢次郎	定 年	大学院総合文化研究科教授
21.3.31	友田 修司	定 年	大学院総合文化研究科教授
21.3.31	廣松 毅	定 年	大学院総合文化研究科教授
21.3.31	山本 巍	定 年	大学院総合文化研究科教授
21.3.31	海老塚 豊	定 年	大学院薬学系研究科教授
21.3.31	菊地 文雄	定 年	大学院数理科学研究科教授
21.3.31	大澤 雅彦	定 年	大学院新領域創成科学研究科教授
21.3.31	松井 孝典	定 年	大学院新領域創成科学研究科教授
21.3.31	和田 仁	定 年	大学院新領域創成科学研究科教授
21.3.31	館 暲	定 年	大学院情報理工学系研究科教授
21.3.31	原島 博	定 年	大学院情報学環教授
21.3.31	島崎 邦彦	定 年	地震研究所教授
21.3.31	佃 為成	定 年	地震研究所附属地震地殻変動観測センター准教授
21.3.31	廣渡 清吾	定 年	社会科学研究所教授
21.3.31	七尾 進	定 年	生産技術研究所教授
21.3.31	藤田 隆史	定 年	生産技術研究所教授
21.3.31	渡邊 勝彦	定 年	生産技術研究所教授

21.3.31	石本 英彦	定 年	物性研究所教授
21.3.31	黒田 寛人	定 年	物性研究所准教授
21.3.31	伊福部 達	定 年 (先端科学技術研究センター特任教授)	先端科学技術研究センター教授
21.3.31	町田 和雄	定 年	先端科学技術研究センター教授
21.3.31	上田 完次	辞 職	人工物工学研究センター教授
21.3.31	五十嵐 武士	辞 職	大学院法学政治学研究科教授
21.3.31	廣瀬 久和	辞 職	大学院法学政治学研究科教授
21.3.31	高本 真一	辞 職	大学院医学系研究科教授
21.3.31	岡 明	辞 職	大学院医学系研究科准教授
21.3.31	熊野 宏昭	辞 職	大学院医学系研究科准教授
21.3.31	黒岩 宙司	辞 職	大学院医学系研究科准教授
21.3.31	宮澤 恵二	辞 職 (山梨大学大学院医学工学総合研究部 (医学学域) 教授)	大学院医学系研究科准教授
21.3.31	大垣 眞一郎	辞 職	大学院工学系研究科教授
21.3.31	中尾 真一	辞 職	大学院工学系研究科教授
21.3.31	阿部 弘亨	辞 職 (東北大学金属材料研究所教授)	大学院工学系研究科准教授
21.3.31	武市 祥司	辞 職	大学院工学系研究科准教授
21.3.31	陳 迎	辞 職	大学院工学系研究科准教授
21.3.31	常田 貴夫	辞 職 (理化学研究所基礎研究所次世代分子理論特別研究ユニット副ユニットリーダー)	大学院工学系研究科准教授
21.3.31	渡邊 晴光	辞 職	大学院工学系研究科准教授
21.3.31	末木 文美士	辞 職 (人間文化研究機構国際日本文化研究センター教授)	大学院人文社会系研究科教授
21.3.31	柳田 勉	辞 職 (数物連携宇宙研究機構特任教授)	大学院理学系研究科教授
21.3.31	横山 茂之	辞 職 (理化学研究所領域長)	大学院理学系研究科教授
21.3.31	川口 正代司	辞 職 (自然科学研究機構基礎生物学研究所教授)	大学院理学系研究科准教授
21.3.31	米澤 徹	辞 職 (北海道大学大学院工学研究科教授)	大学院理学系研究科准教授
21.3.31	岩田 耕一	辞 職	大学院理学系研究科附属スペクトル化学研究センター准教授
21.3.31	遠矢 幸伸	辞 職	大学院農学生命科学研究科准教授
21.3.31	木畑 洋一	辞 職	大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター教授
21.3.31	長尾 恭光	辞 職	教養学部附属教養教育開発機構准教授
21.3.31	栗栖 源嗣	辞 職 (大阪大学蛋白質研究所教授)	大学院総合文化研究科准教授
21.3.31	松下 信之	辞 職	大学院総合文化研究科准教授
21.3.31	桂 利行	辞 職	大学院数理科学研究科教授
21.3.31	神保 道夫	辞 職	大学院数理科学研究科教授
21.3.31	永田 昌男	辞 職	大学院新領域創成科学研究科教授
21.3.31	熊谷 一清	辞 職	大学院新領域創成科学研究科准教授
21.3.31	杉原 厚吉	辞 職	大学院情報理工学系研究科教授
21.3.31	澤田 康文	辞 職 (大学院薬学系研究科特任教授)	大学院情報学環教授
21.3.31	盛田 謙二	辞 職 (放射線医学総合研究所企画部経営企画主幹)	医科学研究所教授
21.3.31	武川 睦寛	辞 職 (名古屋大学環境医学研究所教授)	医科学研究所准教授
21.3.31	中川 一路	辞 職 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授)	医科学研究所附属感染症国際研究センター准教授
21.3.31	小國 健二	辞 職	地震研究所准教授
21.3.31	勝俣 啓	辞 職 (北海道大学大学院理学研究院准教授)	地震研究所附属地震予知研究推進センター准教授
21.3.31	辻 宏道	辞 職 (国土交通省国土地理院国土交通技官)	地震研究所附属地震予知情報センター准教授
21.3.31	三輪 哲	辞 職 (東北大学大学院教育学研究科准教授)	社会科学研究所附属日本社会研究情報センター准教授
21.3.31	村松 伸	辞 職 (人間文化研究機構総合地球環境学研究所教授)	生産技術研究所教授
21.3.31	内藤 幹彦	辞 職 (国立医薬品食品衛生研究所部長)	分子細胞生物学研究所附属細胞機能情報研究センター准教授
21.3.31	森 正樹	辞 職	宇宙線研究所教授
21.3.31	川邊 隆夫	任期満了	医学部准教授
21.3.31	安藤 譲二	任期満了	大学院医学系研究科教授
21.3.31	平田 恭信	任期満了 (大学院医学系研究科特任准教授)	大学院医学系研究科准教授
21.3.31	中田 基昭	任期満了	大学院教育学研究科教授
21.3.31	玄 大松	任期満了	東洋文化研究所附属東洋学情報センター准教授
21.4.1	小西 由也	出向期間満了 (産業技術総合研究所)	先端科学技術研究センター准教授
(採 用)			
21.4.1	辻 哲夫	高齢社会総合研究機構教授	
21.4.1	川人 貞史	大学院法学政治学研究科教授	東北大学大学院法学研究科教授
21.4.1	千田 恵介	大学院法学政治学研究科教授	法務総合研究所教官
21.4.1	土屋 文昭	大学院法学政治学研究科教授	東京高等裁判所判事
21.4.1	廣瀬 謙造	大学院医学系研究科教授	名古屋大学大学院医学系研究科教授
21.4.1	菊地 陽	大学院医学系研究科准教授	

21.4.1	船津 公人	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科特任教授
21.4.1	山田 淳夫	大学院工学系研究科教授	東京工業大学大学院総合理工学研究科准教授
21.4.1	姫岡 とし子	大学院人文社会系研究科教授	筑波大学大学院人文社会科学研究所教授
21.4.1	岡村 定矩	大学院理学系研究科教授	理事 (副学長)
21.4.1	阿部 光知	大学院理学系研究科准教授	京都大学大学生命科学研究科助教
21.4.1	近藤 真理子	大学院理学系研究科附属臨海実験所准教授	大学院新領域創成科学研究科特任研究員
21.4.1	浅川 修一	大学院農学生命科学研究科教授	
21.4.1	後藤 春美	大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター教授	
21.4.1	金 東漢	教養学部附属教養教育開発機構准教授	
21.4.1	寺田 寅彦	大学院総合文化研究科准教授	
21.4.1	西村 弓	大学院総合文化研究科准教授	
21.4.1	森 芳樹	大学院総合文化研究科准教授	筑波大学大学院人文社会科学研究所准教授
21.4.1	藤村 宣之	大学院教育学研究科准教授	名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授
21.4.1	緒方 芳子	大学院数理学系研究科准教授	九州大学助教
21.4.1	岡田 慧	大学院情報理工学系研究科准教授	大学院情報理工学系研究科特任講師
21.4.1	堀 里子	大学院情報学環准教授	大学院薬学系研究科特任講師
21.4.1	井上 直樹	医科学研究所教授	文部科学省大臣官房付
21.4.1	亀 伸樹	地震研究所准教授	九州大学大学院数理学系数理学部部門助教
21.4.1	束田 進也	地震研究所附属地震予知情報センター准教授	気象庁地震火山部管理課調査官
21.4.1	宮澤 理穂	地震研究所附属地震火山噴火予知研究推進センター准教授	京都大学防災研究所准教授
21.4.1	園田 茂人	東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター教授	
21.4.1	廣田 輝直	東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター准教授	
21.4.1	黒田 祥子	社会科学研究所准教授	
21.4.1	巖淵 守	先端科学技術研究センター准教授	先端科学技術研究センター特任准教授
(昇 任)			
21.3.16	小紫 公也	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
21.3.16	渋谷 哲朗	医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター准教授	医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター講師
21.4.1	清水 伸幸	医学部准教授	医学部講師
21.4.1	藤城 光弘	医学部准教授	医学部附属病院助教
21.4.1	吉内 一浩	大学院医学系研究科准教授	医学部附属病院助教
21.4.1	太田 順	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科准教授
21.4.1	染谷 隆夫	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科附属量子相エレクトロニクス研究センター准教授
21.4.1	西成 活裕	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科准教授
21.4.1	横関 智弘	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
21.4.1	池澤 優	大学院人文社会系研究科教授	大学院人文社会系研究科准教授
21.4.1	野島 陽子	大学院人文社会系研究科教授	大学院人文社会系研究科准教授
21.4.1	五十嵐 圭日子	大学院農学生命科学研究科准教授	大学院農学生命科学研究科助教
21.4.1	NEELAM RAMAIAH	大学院農学生命科学研究科准教授	大学院農学生命科学研究科講師
21.4.1	石垣 琢磨	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
21.4.1	市野川 容孝	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
21.4.1	佐々 真一	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
21.4.1	佐藤 俊樹	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
21.4.1	福島 真人	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
21.4.1	村田 滋	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
21.4.1	斎藤 文修	大学院総合文化研究科准教授	大学院総合文化研究科助教
21.4.1	村上 裕	大学院総合文化研究科准教授	先端科学技術研究センター助教
21.4.1	横山 ゆりか	大学院総合文化研究科准教授	大学院総合文化研究科助教
21.4.1	寺嶋 和夫	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
21.4.1	原田 達也	大学院情報理工学系研究科准教授	大学院情報理工学系研究科講師
21.4.1	山崎 俊彦	大学院情報理工学系研究科准教授	大学院情報理工学系研究科講師
21.4.1	石崎 雅人	大学院情報学環教授	大学院情報学環准教授
21.4.1	森田 裕一	地震研究所附属地震火山噴火予知研究推進センター教授	地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター准教授
21.4.1	安富 歩	東洋文化研究所教授	東洋文化研究所准教授
21.4.1	佐々木 弾	社会科学研究所教授	社会科学研究所准教授
21.4.1	田邊 俊介	社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター准教授	社会科学研究所附属日本社会研究情報センター助教
21.4.1	半場 藤弘	生産技術研究所教授	生産技術研究所准教授
21.4.1	林 昌奎	生産技術研究所教授	生産技術研究所附属海中工学研究センター准教授
21.4.1	根本 利弘	生産技術研究所准教授	生産技術研究所附属戦略情報融合国際研究センター助教
(配 置 換)			
21.4.1	鎌田 実	高齢社会総合研究機構教授	大学院工学系研究科教授
21.4.1	上原 誉志夫	保健・健康推進本部准教授	保健センター准教授



21.4.1	古関 隆章	大学院工学系研究科准教授	大学院情報理工学系研究科准教授
21.4.1	矢入 健久	大学院工学系研究科准教授	先端科学技術研究センター准教授
21.4.1	安西 信一	大学院人文社会系研究科准教授	大学院総合文化研究科准教授
21.4.1	伊藤 隆司	大学院理学系研究科教授	大学院新領域創成科学研究科教授
21.4.1	服部 正平	大学院新領域創成科学研究科附属オーミクス情報センター教授	大学院新領域創成科学研究科教授
21.4.1	峯松 信明	大学院情報理工学系研究科准教授	大学院工学系研究科准教授
21.4.1	相澤 清晴	大学院情報学環教授	大学院情報理工学系研究科教授
21.4.1	園田 茂人	大学院情報学環教授	東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター教授
21.4.1	辻井 潤一	大学院情報学環教授	大学院情報理工学系研究科教授
21.4.1	加藤 照之	地震研究所附属地震火山噴火予知研究推進センター教授	地震研究所附属地震予知研究推進センター教授
21.4.1	佐藤 比呂志	地震研究所附属地震火山噴火予知研究推進センター教授	地震研究所附属地震予知研究推進センター教授
21.4.1	平田 直	地震研究所附属地震火山噴火予知研究推進センター教授	地震研究所附属地震予知研究推進センター教授
21.4.1	吉田 真吾	地震研究所附属地震火山噴火予知研究推進センター教授	地震研究所附属地震予知研究推進センター教授
21.4.1	武尾 実	地震研究所附属火山噴火予知研究センター教授	地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター教授
21.4.1	中田 節也	地震研究所附属火山噴火予知研究センター教授	地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター教授
21.4.1	藤井 敏嗣	地震研究所附属火山噴火予知研究センター教授	地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター教授
21.4.1	渡辺 秀文	地震研究所附属火山噴火予知研究センター教授	地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター教授
21.4.1	飯高 隆	地震研究所附属地震火山噴火予知研究推進センター准教授	地震研究所附属地震予知研究推進センター准教授
21.4.1	上嶋 誠	地震研究所附属地震火山噴火予知研究推進センター准教授	地震研究所附属地震予知研究推進センター准教授
21.4.1	加藤 尚之	地震研究所附属地震火山噴火予知研究推進センター准教授	地震研究所附属地震予知研究推進センター准教授
21.4.1	中谷 正生	地震研究所附属地震火山噴火予知研究推進センター准教授	地震研究所附属地震予知研究推進センター准教授
21.4.1	卜部 卓	地震研究所附属火山噴火予知研究センター准教授	地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター准教授
21.4.1	大湊 隆雄	地震研究所附属火山噴火予知研究センター准教授	地震研究所附属火山噴火予知研究推進センター准教授
21.4.1	小川 裕充	東洋文化研究所教授	東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター教授
21.4.1	丘山 新	東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター教授	東洋文化研究所教授
21.4.1	佐藤 仁	東洋文化研究所准教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
21.4.1	仁田 道夫	社会科学研究所教授	社会科学研究所附属日本社会研究情報センター教授
21.4.1	玄田 有史	社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター教授	社会科学研究所教授
21.4.1	佐藤 博樹	社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター教授	社会科学研究所附属日本社会研究情報センター教授
21.4.1	有田 伸	社会科学研究所准教授	大学院総合文化研究科准教授
21.4.1	BLACKWOOD THOMAS STEPHEN	社会科学研究所准教授	社会科学研究所附属日本社会研究情報センター准教授
21.4.1	佐藤 香	社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター准教授	社会科学研究所附属日本社会研究情報センター准教授
21.4.1	村上 あかね	社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター准教授	社会科学研究所附属日本社会研究情報センター准教授
21.4.1	荒川 泰彦	生産技術研究所教授	先端科学技術研究センター教授
21.4.1	加藤 信介	生産技術研究所教授	生産技術研究所附属計測技術開発センター教授
21.4.1	浅田 昭	生産技術研究所附属海中工学国際研究センター教授	生産技術研究所附属海中工学研究センター教授
21.4.1	浦 環	生産技術研究所附属海中工学国際研究センター教授	生産技術研究所附属海中工学研究センター教授
21.4.1	桑原 雅夫	生産技術研究所附属先進モビリティ研究センター教授	生産技術研究所教授
21.4.1	須田 義大	生産技術研究所附属先進モビリティ研究センター教授	生産技術研究所教授
21.4.1	岩本 敏	生産技術研究所准教授	先端科学技術研究センター准教授
21.4.1	火原 彰秀	生産技術研究所准教授	生産技術研究所附属計測技術開発センター准教授
21.4.1	北澤 大輔	生産技術研究所附属海中工学国際研究センター准教授	生産技術研究所准教授
21.4.1	坂本 慎一	生産技術研究所附属先進モビリティ研究センター准教授	生産技術研究所准教授
21.4.1	中野 公彦	生産技術研究所附属先進モビリティ研究センター准教授	生産技術研究所准教授
21.4.1	橋本 秀紀	生産技術研究所附属先進モビリティ研究センター准教授	生産技術研究所准教授
(兼 務 命)			
21.4.1	影山 和郎	本部統括長(産学連携系)	大学院工学系研究科教授
21.4.1	古田 元夫	附属図書館長	大学院総合文化研究科教授
21.4.1	林 良博	総合研究博物館長	大学院農学生命科学研究科教授
21.4.1	宮川 清	アイソトープ総合センター長	大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター教授
21.4.1	新井 充	環境安全研究センター長	環境安全研究センター教授
21.4.1	五十嵐 泰夫	生物生産工学研究センター長	大学院農学生命科学研究科教授
21.4.1	福代 康夫	アジア生物資源環境研究センター長	アジア生物資源環境研究センター教授
21.4.1	岡本 和夫	大学総合教育研究センター長	大学院数理科学研究科教授
21.4.1	山本 一彦	医学教育国際協力研究センター長	大学院医学系研究科教授

21.4.1	清水 孝雄	大学院医学系研究科長 医学部長	大学院医学系研究科教授
21.4.1	武谷 雄二	医学部附属病院長	大学院医学系研究科教授
21.4.1	小松 久男	大学院人文社会系研究科長 文学部長	大学院人文社会系研究科教授
21.4.1	山形 俊男	大学院理学系研究科長 理学部長	大学院理学系研究科教授
21.4.1	生源寺 眞一	大学院農学生命科学研究科長 農学部長	大学院農学生命科学研究科教授
21.4.1	武藤 芳照	大学院教育学研究科長 教育学部長	大学院教育学研究科教授
21.4.1	大島 利雄	大学院数理科学研究科長	大学院数理科学研究科教授
21.4.1	大和 裕幸	大学院新領域創成科学研究科長	大学院新領域創成科学研究科教授
21.4.1	下山 勲	大学院情報理工学系研究科長	大学院情報理工学系研究科教授
21.4.1	石田 英敬	大学院情報学環長 大学院学際情報学府長	大学院情報学環教授
21.4.1	清木 元治	医科学研究所長	医科学研究所教授
21.4.1	平田 直	地震研究所長	地震研究所附属地震火山噴火予知研究推進センター教授
21.4.1	羽田 正	東洋文化研究所長	東洋文化研究所教授
21.4.1	末廣 昭	社会科学研究所長	社会科学研究所教授
21.4.1	野城 智也	生産技術研究所長	生産技術研究所教授
21.4.1	加藤 友康	史料編纂所長	史料編纂所教授
21.4.1	秋山 徹	分子細胞生物学研究所長	分子細胞生物学研究所教授
21.4.1	西田 睦	海洋研究所長	海洋研究所教授

[訂正]

学内広報において、一部誤りがありましたので訂正いたします。関係部局および関係者の皆様に深くお詫び申し上げます。

No.1383 (2009.2.16)

21 ページ下段

人事異動 (表) の日付欄 (左端)

10 行目～最終行

(誤) 20.2.1

(正) 21.2.1

# 平成21年度 学内広報発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日	配布
1386	4月 28日(火)	5月 25日(月)	5月 29日(金)
1387	5月 28日(木)	6月 19日(金)	6月 25日(木)
1388	7月 1日(水)	7月 27日(月)	7月 31日(金)
1389	7月 28日(火)	8月 25日(火)	8月 31日(月)
1390	8月 28日(金)	9月 17日(木)	9月 28日(月)
1391	10月 1日(木)	10月 23日(金)	10月 29日(木)
1392	10月 29日(木)	11月 20日(金)	11月 27日(金)
1393	学生生活実態調査号		
1394	11月 25日(水)	12月 17日(木)	12月 24日(木)
1395	1月 6日(水)	1月 25日(月)	1月 29日(金)
1396	1月 29日(金)	2月 19日(金)	2月 25日(木)
1397	セクシュアル・ハラスメント調査特集号		
1398	2月 25日(木)	3月 19日(金)	3月 26日(金)

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

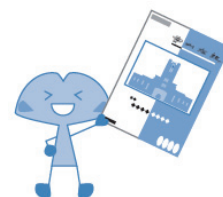
[http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html)

【東京大学ホームページ】→【左下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム

TEL:03-3811-3393 内線22031 E-mail:kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp





# 「学内広報」ニュース・インフォメーション記事提出要領

## 作成例

本部広報グループ

「キャンパスツアー」スタート!

本学学生がツアーガイドとなって、赤門や大講堂(安田講堂)、三四郎池、総合図書館など、本郷キャンパス内の名所旧跡を案内する「キャンパスツアー」が今年も始まった。キャンパスツアーは昨年度から実施されており、「ジュニアTA制度」に基づき応募した学生が、東京大学の歴史や学生生活のエピソードを交えながら、約2時間にわたり案内する。

今年度のスタートとなった5月14日(土)には、午前、午後合わせて43人が参加し、ツアーガイドの説明に熱心に耳を傾けていた。



広報センター前で説明するガイドとそれを聞く参加者

ツアーには、高校生以上であれば誰でも無料で参加することができる。今後のツアーは、夏休みや年末年始、入試、学期末試験期間を除く授業期間の火曜日(10:00~12:00)と土曜日(10:00~12:00、13:30~15:30)に行われる予定である。



正門から大講堂に続く銀杏並木

記事の冒頭に**部局名**を記載

簡潔で分かりやすい**タイトル**を記載

- ・過去の報告記事(ニュース)では「**である調**」を用いる
- ・今後のお知らせ(インフォメーション)では「**ですます調**」を用いる

日付には括弧書きで**曜日**をつける

- ・写真を掲載する場合は、25文字以内で**キャプション**(写真の説明文)をつける
- ・原稿とは別に、JPEGなどの形式による元の画像ファイルを別途送付する(プリントの写真は学内便で送付)

句読点は「、」「。」を用いる

時間は**24時間表記**とする

- ・記事は一行25文字の書式で作成する。
- ・文字数は800字を目安とするが、内容によって増減は可とする。
- ・人物名は**フルネーム**で表記すること。

## 提出上の注意

### 1. 提出方法

記事は、各部局の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとして送付すること。  
(学内広報担当者の個人アドレスではなく、必ず下記のアドレスに送付してください。)

### 2. 締切日

HPで発行スケジュールを確認すること。  
[http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html)  
トップページ> 広報・情報公開> 学内広報

### 問い合わせ先・提出先

本部広報グループ広報企画チーム  
TEL: 03-3811-3393(内線 22031)  
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

※原稿を受け取った後、学内広報担当者から、必ず**受領メール**をお送りしています(概ね1週間以内)。返信メールが届かない場合は、何らかのトラブルで原稿を受け取れていない可能性がありますので、その際は**お問合せ願います**。

# Contents

## 特集

- 02 濱田純一 第29代総長就任
- 08 平成21年度役員等の紹介
- 18 平成20年度卒業式・学位記授与式
- 28 平成21年度入学式・大学院入学式
- 42 平成20年度第2回「東京大学総長賞」授与式の挙  
行及び「総長大賞」受賞者決定

## NEWS

### 一般ニュース

- 45 部局長の交代
- 52 [ライフサイエンス研究倫理支援室](#)  
「ライフサイエンス研究倫理支援室」がスタート！
- 53 [海洋アライアンス](#)  
第3回イブニングセミナー開催
- 53 [大学発教育支援コンソーシアム推進機構 \(CoREF\)](#)  
「大学の知」で初等中等教育の現場を支援
- 54 [本部留学生支援グループ](#)  
東京大学卒業・修了予定の外国人留学生、留学生支  
援団体等と総長との懇談会

### 部局ニュース

- 55 [社会科学研究所](#)  
東北大学でグローバルCOEキックオフセミナーに  
参加
- 55 [留学生センター](#)  
留学生センター日本語教育「集中日本語コース」等  
2008年度冬学期修了証書授与式行われる
- 56 [物性研究所](#)  
「第6回物性研究所技術発表会」開催される
- 57 [社会科学研究所](#)  
社研シンポジウム「社会的排除とジェンダー」を開催
- 57 [先端科学技術研究センター](#)  
革新的太陽光発電国際シンポジウム2009  
—世界の第一線の研究者が駒場リサーチキャンパス  
に集結—
- 58 [大学院工学系研究科・工学部](#)  
東京大学・コマツ社会連携講座の研究テーマが学術  
研究講演会においてベストペーパー賞・ベストプレ  
ゼンテーション賞をダブル受賞
- 58 [大学院農学生命科学研究科・農学部](#)  
第1回農学生命科学技術職員研修会が開催される
- 59 [分子細胞生物学研究所](#)  
平成20年度分生研技術発表会を開催
- 59 [大学院教育学研究科・教育学部](#)  
公開シンポジウム「教育学部における教育・研究の  
課題—東京大学大学院教育学研究科・教育学部の外  
部評価を踏まえて—」を開催
- 60 [大学院教育学研究科・教育学部](#)  
「教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究セン  
ター」の開設
- 61 [大学院教育学研究科・教育学部](#)  
「育児支援室」設置される

### キャンパスニュース

- 62 [本部入試グループ](#)  
第2次学力試験（前期日程）の合格者、同（後期日  
程）第1段階選抜結果の発表
- 63 [本部入試グループ](#)  
第2次学力試験（後期日程）、外国学校卒業学生特  
別選考の合格者発表

### ◆ 表紙写真 ◆

平成21年度入学式（28ページに関連記事）

## コラム

- 65 発掘！総長室総括委員会 第12回
- 66 Crossroad 産学連携本部だより vol.41
- 67 ケータイからみた東大～東大ナビ通信～ No.17
- 67 インタープリターズ・バイブル vol.21
- 68 Relay Column「ワタシのオシゴト」第38回
- 68 噴水 「第4回地域の伝承文化に学ぶコンテスト」  
で最優秀賞・折口信夫賞を受賞
- 69 噴水 教育学部附属中等教育学校で2年総合学習  
発表会が開催される
- 70 噴水 教育学部附属中等教育学校で平成20年度卒  
業式が行われる
- 70 噴水 教育学部附属中等教育学校で課題別学習発  
表会が行われる

## INFORMATION

### シンポジウム・講演会

- 71 [大学院理学系研究科・理学部](#)、[大学院総合文化研究科・  
教養学部](#)  
地球惑星科学公開シンポジウム「気候異変～過去・  
現在・未来～」
- 71 [医科学研究所](#)  
第36回医科学研究所創立記念シンポジウム「感染  
防御の最前線」

### お知らせ

- 72 [大学院総合文化研究科・教養学部](#)  
「教養学部報」第519（4月1日）号の発行  
——教員による、学生のための学内新聞——
- 73 [附属図書館](#)  
総合図書館備付け図書の推薦について（平成21年  
度夏学期）
- 73 [情報基盤センター](#)  
“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ
- 74 [情報基盤センター](#)  
セミナー「学術雑誌の評価指標を考える：インパ  
クトファクターと新指標アイゲンファクター」のお知  
らせ
- 75 [情報基盤センター](#)  
Web版の文献管理ツール「RefWorks」（レフワーク  
ス）サービス開始のお知らせ～利用説明会も開催～
- 76 [情報基盤センター](#)  
韓国語による“留学生向け情報探索ガイダンス”の  
お知らせ
- 76 [低温センター](#)  
保安教育『低温講習会』のお知らせ
- 76 [大学院総合文化研究科・教養学部](#)  
第116回オルガン演奏会
- 77 [大学院理学系研究科・理学部](#)  
第63回小石川植物園市民セミナーのご案内
- 77 [大学院理学系研究科・理学部](#)  
第6回高校生のためのサイエンスカフェ本郷

## 事務連絡

- 78 人事異動（教員）
- 83 平成21年度 学内広報発行スケジュール
- 84 「学内広報」ニュース・インフォメーション記事提  
出要領

## 淡青評論

- 86 法と政治と脳科学と



七徳堂鬼瓦

## 法と政治と脳科学と

社会的行動を考えるのに脳の働きの理解は役に立つであろうか。当研究科の一部の変化はこの問いに答えるかもしれない。

きっかけは、2006年夏の米国政治学会で発表された政治学のfMRIを用いた予備的実験の話を私から聞いた蒲島郁夫教授が本格的実験をと思いついたことである。偶然にも神作裕之教授の弟である憲司氏が国立障害者リハビリテーションセンター研究所室長でシステム脳科学者であることがわかり、神作氏の協力を得て1992年米国大統領選のネガティブキャンペーン

ビデオを使う実験が始まった。試行錯誤が必要な予備実験では、神作氏を紹介して下さった樋口範雄教授をfMRIの中に2時間半も閉じこめてしまった。実験中に頭が動けば意味あるデータは得られない。樋口氏のギネス記録並み(?)の忍耐に感謝の言葉もない。こうして設定された実験課題を用いて40人の被験者からデータが得られたのは、大学院生の井手弘子さんが瞬間に実験手法をマスターしたからである。fMRI実験のできる日本初の政治学研究者の誕生である。この間、私が派遣されたイェール大学で、小宮山・レヴィン両総長の支援で「社会科学における脳認知科学的アプローチ」というシンポジウムを2008年4月に共催し、実験へのフィードバックも得られた。順風満帆の中、蒲島氏が熊本県知事に当選、政界に転身してしまう。私が脳科学の専門論文を渉猟し政治行動から結果の解釈を考えることになり難儀した。感情に訴えると考えられがちなネガティブキャンペーンであるが、この実験で候補者支持を維持する場合でも変える場合にも、認知をつかさどる前頭前野に関連した脳活動がみられたことは興味深い。

法律の方でも、内閣府主催の振り込め詐欺に関する学際的研究会に参加した廣瀬久和教授が「消費者法でも脳から行動を理解しないと」と2009年3月、イアン・ラムゼー・ケント大学教授の「行動経済学と消費者市場規制」、坂上雅道玉川大学脳科学研究所教授の「脳における多様な意思決定」の発表を中心に、COE研究会「行動科学と法」を開いた。実際の詐欺の事例等を前提とした刺激的な議論だった。ラムゼー・坂上両氏にお聞きしたところ、法学者と脳科学者を組み合わせた研究会に出るのは初めてのとのこと、廣瀬氏のアイデアにうなづいてしまった。

脳科学における社会的行動の研究は揺籃期ではあるが、新たな人間理解を生むことを願いつつ息長く取り組んでいきたい。

加藤淳子（大学院法学政治学研究科・法学部）

(淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1385 2009年4月23日

東京大学広報委員会

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報グループ

TEL : 03-3811-3393

e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

http://www.u-tokyo.ac.jp